

ウマイヤ朝の意味.....	3
ムハンマドとユダヤ人.....	4
ムハンマドと「イスラムの家」.....	7
スーフィーの講話.....	8
1) これは或るスーフィーの述懐談。.....	9
ウルルン滞在記名作選「モロッコ・巨大迷宮都市の珍商売」.....	11
コーランの価値.....	15
「慈悲深く慈愛あまねき神の名において」.....	17
ウサーマ・ブン・ラーディン資料.....	20
「このアメリカの行為は、イスラム教徒に対する明確な宣戦布告である」。.....	21
・アメリカはイスラムに宣戦布告している。 ・イスラムの敵にはイスラム教徒は戦わなければならない。.....	21
・「アメリカと、イスラム教徒は戦わなければならない」.....	21
「我々は、すべてのイスラム教徒に、神の命令に従って、見つけたならばいつでもどこでもアメリカ人を殺害し、財産を奪うよう呼びかける」.....	21
「しかし、禁じられた数か月が過ぎ去ったとき、異教徒を見つけたらどこでも戦って殺害し、とらえ、包囲し、(戦争の) あらゆる計略に彼らがはまるのを待て」.....	21
 イスラームとはなにか.....	24
 イスラームとはなにか.....	27
サウム (断食) イスラミックセンター編著 一、序文.....	54
サウム (断食) イスラミックセンター編著 二、ラマダーン (断食月)	56
サウム (断食) イスラミックセンター編著 三、みいつの夜 (ライラト・ル・カドル)	57
サウム (断食) イスラミックセンター編著 四、バドルの戦い.....	57
サウム (断食) イスラミックセンター編著 五、イスラームカレンダー	58
サウム (断食) イスラミックセンター編著 六、断食の種類	58
サウム (断食) イスラミックセンター編著 七、断食の時間	59
サウム (断食) イスラミックセンター編著 八、夕方の食事	60
サウム (断食) イスラミックセンター編著 九、未明の食事	60
サウム (断食) イスラミックセンター編著 十、断食をしなくてもよい場合	61
サウム (断食) イスラミックセンター編著 十一、夜間の礼拝 (タラウィー)	62
サウム (断食) イスラミックセンター編著 十二、断食明けの喜捨 (ザカートとサダカ)	62
サウム (断食) イスラミックセンター編著 十三、ラマダーン中の善行	63
サウム (断食) イスラミックセンター編著 十四、断食明けの祭典 イード・ル・フ	

神の預言者たち イスラミックセンター編著 一、序章.....	64
●「使者」そして「預言者」の意味.....	65
神の預言者たち イスラミックセンター編著 二、イブラーヒーム（アブラハム）..	70
●イスマーイール（イスマイル）.....	71
「わたしの子らよ、アッラーはおまえたちのために、この教えを選びたもうた、それで ムスリムとならずに、死んではならぬぞ」。(クルアーン第二章一三二節) 神の預言者た ち イスラミックセンター編著 三、ムーサー（モーゼ）	75
●歴史的背景.....	76
●ムーサーの幼年期.....	76
●使者への呼びかけ.....	77
●荒野の生活.....	79
神の預言者たち イスラミックセンター編著 四、イーサー（イエス）.....	82
●歴史的背景.....	82
●イーサーの幼年時代.....	83
●洗礼者ヤフヤー（ヨハネ）.....	84
●預言者としてのイーサー.....	85
●新約聖書福音書の問題.....	86
イスラム世界の成立.....	87
六信五柱.....	87
1 預言者ムハンマド（マホメット）.....	88
2 正統カリフとウマイヤ朝.....	89
3 イスラム帝国としてのアッバース朝.....	90
テロは世界を変えたか〈上〉.....	92
不破 哲三.....	92
同時多発テロの歴史的な意味は？.....	92
なぜアメリカがテロの標的になったか？.....	93
どんな「大義」をかかげてもテロは許されない.....	95
国連の制裁行動——非軍事と軍事と.....	96
日本は国連協力も「非軍事」で.....	99
憲法第九条をもった国として世界平和への貢献の道を.....	100
国際社会が合意した行動でこそ、制裁と人道が両立できる.....	102
テロ新報——自衛隊を戦場近くに出したいという一心で.....	104
テロは世界を変えたか〈下〉.....	105
不破 哲三.....	105
理屈なしの小泉手法は国民の不安を広げている.....	105

国連主導の平和秩序の建設は二十一世紀の重要課題	107
日米安保下の日本外交には三つの根本的な弱点がある	108
「世界化（グローバリゼーション）」の動きをどう見るか.....	111
イスラム世界も、世界の進歩の流れのなかにある	113
「文明の衝突」ではなく、異なる文明の「平和共存」の探求を.....	114
マルクスは、それぞれの社会の独自の発展の論理を探求した.....	116
「平和共存」の歴史をふりかえって.....	117
Osama bin Laden	118
Al Qaeda	135

ウマイヤ朝の意味

皆さん、「ウマイヤ朝」はご存知だと思います。

いわゆる、正統カリフの時代の後に、イスラム共同体の主導権をにぎった王朝の名前です。正統カリフ時代までは、イスラム共同体の統治者は、宗教的にも優れた人物であることが、一応必要条件と見なされていましたが、ウマイヤ朝からはこの原則が破られました。また正統カリフ時代は、カリフ位は世襲制ではありませんでしたが、ウマイヤ朝からは世襲制になりました。ウマイヤ朝というのは、簡単に言えば、「ウマイヤ家」の人物が支配権を継承していった王朝ということです。このため、ウマイヤ朝の評判は、その資料がウマイヤ朝の政敵アッバース朝の時代の作られた物が多いこともあって、評判が悪かったのですが、碩学 Wellhausen は、この単純な偏見の訂正にその名著『アラブ帝国とその没落』で成功しました。

前にも申しましたが、「ウマイヤ朝」とは、「ウマイヤ家」が統治した王朝ですが、この「ウマイヤ家」とはどのような一族なのでしょう。簡単にいえば、メッカを支配していた「クライシュ族」を仕切っていた一家です。この「クライシュ族」は、イスラムの預言者ムハンマドの属した部族でもありました。ムハンマドの生まれた「ハーシム家」は、「クライシュ族」の中では、「ウマイヤ家」よりは偉くなかったようです。

さてムハンマドが、積極的にメッカで宗教活動を始めると、じきに、メッカの多神教徒と対立し始めました。この時「ウマイヤ家」は、メッカを仕切っていたわけですから、当然、ムハンマド達と対立したと思います。

実際、いわゆる「バドゥルの戦い」というメッカとムハンマドの武力衝突で、その衝突

のきっかけとなった隊商を率いていたのは、アブー・スフヤーンでした。この「バドゥルの戦い」でムハンマドは、事実上勝利をおさめます。これに対するメッカ側の報復戦争が、「ウフドの戦い」です。この時のメッカ側の総司令官はアブー・スフヤーンでした。この時点では、「ウマイヤ家」はまさに、「イスラムの敵」だったわけです。

ですからウマイヤ朝の成立は、かつてイスラムの敵であったウマイヤ家が、巨大化した「イスラム共同体」の支配権を、まんまと乗っ取ったことを意味するといってもよいと思います。ウマイヤ家としては、焼け太りとも言いましょうか、自分達の先祖の信仰をすてはしたが、イスラムを受容することによって、結局、メッカでかつて握っていた実権よりも遙かに巨大な権力を首尾良く入手したということになります。ウマイヤ家成立時に発生した内乱の原因の一つは、ここにあると言ってよいと思います。ムハンマドに昔から付き従って来た教団の長老達には、これほど理にかなわないことはないと思えたでしょう。しかし、「ウマイヤ家」の実務的能力は、評価せねばならないでしょう。巨大化したイスラム共同体の統治は、ムハンマド時代とは本質的に異なる統治方法を要請します。この転換の成功に「ウマイヤ朝」は、不可欠な貢献をしたと言わねばならないと思います。

ムハンマドとユダヤ人

ムハンマドよりも成功した預言者がはたしているのでしょうか？少なくともムハンマドが失敗した預言者であったと主張する人はあまりいないでしょう。しかし、もし、ムハンマドに、「あなたの人生は成功に溢れていましたか？」と尋ねたら、ムハンマドは必ずしもそうであるとは、答えないでしょう。おそらくその時彼の頭にはユダヤ人のことが浮かんでいるはずだと思います。

話は、ヒジュラの後から始まります。数十人の信者と共に、ムハンマドは故郷のメッカからメディナへ移ったわけです。問題は、この数十人の信者の食い扶持をどうするかです。メディナに移住する前に結ばれた協定では、ムハンマドとその仲間はメディナの一員として保護を受けることが約束されていましたが、居候の居心地が良くなかったことは確かだと思います。

さて、メッカ時代、ムハンマドは自分を新たな宗教の開祖と位置づけてはいませんでした。ユダヤ教徒やキリスト教徒に下された警告と同じ警告をアラブ人に下しているのだと考えていたようです。彼の最初の妻の親戚のワラカ・ブン・ナウファルの助言がこの判断に大きく影響を与えたものと思われる。

メディナへ移住してきたムハンマドは、そこで多くのユダヤ人に会います。ここから

は、普通の研究書などには書かれていない、私の「推測」ですが、

ムハンマドは、信者の経済問題も念頭において、特にユダヤ人達に、自分たちを同胞と認識してもらいたかったのではないのでしょうか。メディナのユダヤ人も広い農地を所有して大変豊かだったと言われています。この時点でムハンマドは独自の宗教共同体を独自の宗教に基づいて建立しようと思っただけではなかったのだと思います。この段階でイスラムは生まれて10年たつたばかりの新興集団なのです。ムハンマドもクライシュ族らの改宗に失敗した後ですから、非常にころもとなかったと思います。そこで「クライシュ族の改宗計画」に失敗した後、ムハンマドは、「ユダヤ教団への同化(ないしユダヤ教徒の改宗)」によって教団の世俗的な安定を得ようとしたのではないかと思います。自分に下された啓示は、ユダヤ教のそれと同じだと信じていたわけですから。

しかしこの接近は、失敗します。ユダヤ教徒からの拒絶に会ったのです。ユダヤ教徒からすれば、ムハンマドに下された内容が、ユダヤ教と同じものであるとは、とても信じられなかったのでしょう。コーランから判断する限り、ムハンマドのユダヤ教に関する知識は、少なくかつ不正確であったようです。コーランには、ユダヤ人がその教典をムハンマドに見せないということで、ユダヤ人を叱責する一節も含まれています。ムハンマドも、色々ユダヤ教を勉強しようとしたようです。

コーランに一番数多く登場する預言者は、モーセです。モーセとファラオのやりとりはあきれほど何度も出てきます。ユダヤ教徒に自分が、ユダヤ教にも通じていることを示したかったのだと思います。これは、自分の教団とメディナのユダヤ教徒の諸部族を合一させることに、いかにムハンマドがエネルギーを注いでいたかをしめすものです。クライシュ族の多神教よりは近い信仰を持っており経済的にもしっかりした基盤を持っているユダヤ部族と同化できれば、教団の将来はひとまず安泰なのです。

しかしユダヤ教徒から見れば、ムハンマドなど気の触れた田舎者としてしか写らなかったでしょう。その時点で見ても1000年近い伝統を持ち世界に大きな影響を与えていたエリート集団から見れば、無理もないことだと思います。ムハンマドを影で嘲笑する者もいたようです。

皮肉なことに、このユダヤ教徒からの決別が、初めて、本来の意味での独自の宗教の誕生を促すことになりました。これをもって自覚的なイスラム教が初めて生まれたと言っても過言ではないと思います。しかし振られ続けたムハンマドの心中はかなり不安だったでしょう。この時、これも私の非常に大胆な推測ですが、ムハンマドは、教団

の経済的基盤を安定させるため、「ユダヤ人の財産」に眼をつけていたと思います。以前ユダヤ人を軍事的に保護していたメディナの部族は今やムハンマドの側についているわけです。仮にユダヤ人を攻撃しても、自分達が軍事的に報復を受ける可能性は低いのではないかと密かに計算していたのではないのでしょうか。

その後、イスラム共同体は、メッカとの一連の戦争(バドル、ウフド、ハンダク)に入ります。この一連の戦争の後、必ず、メディナのユダヤ部族が1つずつ追放されています。理由はよく分からないそうです。ユダヤ教徒のイスラム教徒の仲は、よくなかったのですから、ユダヤ教徒はイスラム教徒の戦争に協力的ではなかったことが理由として上げられたりするようですが、ムハンマドとしては、ユダヤ人から財産を根こそぎ取り上げる格好の機会と判断したのではないのでしょうか。戦争の後のどさくさで理由は何とでもつくでしょうから。

また最後のハンダク(塹壕)の戦いの後は、ユダヤ部族(クライザ族)の男子全員(600-900名)が皆殺しにされています。もっともこれにはクライザ族の敵側(クライシュ族)へのスパイ行為のためとも言われています。この殺害の最終決断は、ムハンマド自身によって下されたと言われています。このような決断を見せる反面、ムハンマドは、ある婦人が子犬をいじめているのを目撃し、それを止めさせ、なおかつ婦人が本当に子犬をいじめないかを見張るための人間を一人つけた、とも言われています。600-900人のユダヤ人殺害も、いじめられた子犬を助けるのも、同じ人間のなせる業です。預言者というような人間を理解することの難しさを如実に感じさせる側面です。

メッカを追われるように出た新興宗教集団は、後に、そのメッカのクライシュ族を凌駕する政治力を付け、メッカを軍事的に占領します。なぜこのような奇跡にも似た業績がムハンマドには可能だったのか、大きな問題です。実証的な歴史学的手法では、その課程の正確な記述以上のことは出来ないと思います。私自身が、勝手にその一番の理由を推測すると、「ユダヤ人の財産を入手したこと」ではないかと思います。イスラムを受け入れないユダヤ人に、現世で罰を与えても問題ないのでしょうか、宗教的には。ただし、ムハンマドは全てのユダヤ人を迫害したわけではありません。おそらく政治的にムハンマドに抵抗したユダヤ人だけだったと思います。

ムハンマドを反ユダヤ主義者のように語ることは、現在色々な意味で勇気のいることです。ムハンマドの人品を著しく損なうおそれがあります。しかし歴史の実像を探求すると、以上のような推論は、バラバラに見える個々の事実を首尾一貫して結合する上で、噴飯物と一概に否定できない程度の真実性はあるとは、思えます。アカデミック

な裏付けは難しいでしょうが。

ムハンマドと「イスラムの家」

論文の準備のために、エウセビオスの『教会史』を読みました。初期キリスト教の歴史にとって大変貴重な資料です。全部で三冊ですが、よくぞ日本語に訳して下さったと思います。ありがたいことです。初期キリスト教の歴史ですから、キリスト教徒の迫害に関する記述が数多く出てきます。猛獣と戦わせたり、女の人を片足で吊したりと、残酷極まりない迫害の様相が生々しく伝えられています。胸の痛くなる話ばかりです。

ふと気がつくといスラム教徒の迫害の話は、キリスト教徒のそれほど聞かないな、と感じました。両宗教とも、当時の社会に対して同じ程度に批判的だったはずですが。メッカ期のムハンマドやイスラム教徒が、特にムハンマドの叔父アブー・ターリブの死後、迫害を受けたではないか、とおっしゃる方もいるでしょう。迫害の伝承は、確かに存在しますが、その真実性を疑う説も提出されています。仮に迫害が存在しても、キリスト教徒がローマ帝国から受けたそれに比すれば、期間も程度も些細なものといえるでしょう。ピラールのいじめやムハンマドが殴打される話が主として紹介されますが、その被害者が命を落としているわけではありません。

宗教のあり方の本質に関わる問いですが、この現世で、信者が迫害されることにはどのような意味があるのでしょうか。来世を確実に信じているのであれば、この世は泡沫ですから、残酷に迫害され天国に行く方が、棄教して地獄に墮ちるよりましかもしれません。しかし迫害にも揺るがない信仰を持った人が、なぜ、現世で十分な神の恵みを受けられないのか、疑問もわいてきます。神がいるので在れば、何百人も敬虔な信者が迫害される様を、なぜ黙って見ているだけなのでしょう。なんだかんだ言いつても、信者も現世で恵まれるにこしたことはないはずですが。

ムハンマドは、イスラムを打ち立てる際、このような道を、すなわち、神の国とカエサルカエサルの国を分ける道を、選択しませんでした。ムハンマドが、キリスト教の迫害の歴史を念頭においてこの道を意識的に選択したとは恐らく考えられません。「部族社会の革命的な掟」であったイスラムは、実社会からある程度の距離を持った掟の存在など想像だに出来なかったはずですが。しかしその分ムハンマドは、キリストの知らなかった苦勞を数多く背負いこむことになりました。要するに、信者達の生活の世話までしてやる義務が生まれたのです。政治的にも、経済的にも守ってやる義務を負ったのです。ムハンマドにスーフイースーフイーの師匠としての最高の規範を見ることに問題は在りませんが、彼が決して世俗を捨てた隠遁者ではなかったことは忘れてはなりません。世俗のムチ

に打たれ続けていたと言ってよいでしょう。

単に(他の宗教にも類似したものの見いだせる)神話に彩られた伝記らしきもののみが残されているキリストと違って、(少ないながらも)史実の分かっているムハンマドは、その生涯において為した世俗的に行いのために、しばしば異教徒から非難を向けられました。特に、戦争、女性問題、ユダヤ人問題などです。しかしその多くが、当時のヒジャーズの道徳的規範に照らしてみても、なんら非道徳的要素を持たないことは、現代の西洋キリスト教徒の碩学でさえほぼ一致して認めています。さらに中傷の対象となる行為の史実性もしばしば疑問に付されるのです。

こういった世俗にまみれたムハンマドの行いを、またしかし別の面から見ることも可能です。一言でいえば、ムハンマドが初めにドロをかぶってくれたおかげで、イスラム教徒は政治的、経済的に安定した暮らしを享受できた、後に迫害の歴史をくぐり抜ける必要がなかった、ということです。イスラム共同体が、一過性の地域的なもの(加賀の浄土真宗の共同体のそれのような)に留まらなかったのは、ムハンマドの力に加えて、さらに、ウマイヤ家のムアーウィヤの力量も不可欠であったのですが、やはりムハンマドの最初期の苦勞に負うところが絶大だったはずで、ムハンマドの行為には、現代的な倫理規範に当てはめると、肯定しがたいものがあることは確かです。ユダヤ人に対する彼の政策もその一つです。しかしそのお陰で、イスラム教は、「迫害の歴史」を持たずにすんだのです。名もない一信者が、為政者の手に数多く殺害されるところなくすんだのです(内乱はその後もありましたが)。イスラム教圏のことを、「イスラムの家(Dar al-Islam)」と表現することがあります。ムハンマドの苦勞の果実を表すものとしてなかなかいい表現だと思います。「家」の中にいる限り、最低限の安全の保障があたえられるのですから。信者のために自分を捨てたというニュアンスは、このようにムハンマドにも当然確認されるのです。

スーフィーの講話

昔、大学の夏のレポートの宿題として、スーフィーの講話の解釈を出したことがありました。デッドストックにしておくのもなんですので、これをここに紹介したいと思います。一応、我流の解釈も付記しておきますが、あくまで参考程度にとどめておいて下さい。その意味を、みなさん各自で考えていただきたいと思います。スーフィーの講話は、いわゆる禅問答のようなものですが、非常に深い人知が表明されていて興味深いものが多いです。

1) これは或るスーフィーの述懐談。

わしは風呂屋の竈場に入っていた。そこはかつてある聖者の隠生していたところ。あそこへ行けば、胸のもやもやが晴れるかもしれぬと思ったのだ。

見ると竈焚きの親方に見習いの小僧がいる。腰をきりっと締め上げて、かいがいしく働いていた。親方が、こうしろ、ああしろと言うと、小僧は敏捷にやっけてのける。この小僧が親方の指図を受けて、実にしばしこく働くので、湯加減もちょうどよくなってくる。

「そうだ」と親方が言う、「そんなふういきびきび働くんた。いつもそうして機敏に、行儀よくやっておれば、いまに俺の後継ぎにしてやるぞ」と。

突然笑いがこみ上げてきて、胸の鬱結が一時に解けた。この世で人の上に立つ者の、自分の指図で働く者に対するやり方はみんなこうしたものだとわしはその時悟ったのだ。

出典

『ルーミー語録』

井筒俊彦著作集 11

中央公論社 1993

pp. 371- 372

問題は、スーフィーの最後の笑いの意味だといえます。私は、これはある種自虐的な要素も多少含んでいる笑いだと思います。要するに、自分も、風呂屋の小僧と大して変わらないと悟ったので、可笑しくなったのでしょう。なぜか。自分も尊敬するスーフィーのようになりたいがために、盲目的にそのスーフィーの真似をただけです。風呂屋の主人になりたいがために、風呂屋の主人のするように行動している風呂屋の小僧と同じなわけです。困難の多い精神的な修行が、風呂屋の修行と同じであっていいわけではないのです。

しかし、ひねりが効いている点は、なんだかんだ言って、このスーフィーは、当初の目的、すなわち、「胸のもやもやを晴らすこと」は達成しているわけです。これも偉大なスーフィー（この物語ではほんの脇役程度にしか出現しませんが）の神秘的な力の発現と見なすことも出来ます。

2) 「天国の水」ないし「二つの世界」

ベドウインのハリースと、その妻ナフィーサは、わずかなナツメ椰子の木と駱駝に食べさせる草や水を求めて、砂漠の中を移動しながら暮らしていた。適当な場所を見つけると、二人はそこに破れた天幕を張り、砂漠の鼠を捕まえてその皮を剥いだり、椰子の繊維を編

んで縄を作り、それを通りかかった隊商に売っていた。二人は長年このような生活を続けており、ハリースはめったに日々の仕事を中断することがなかった。

ところが、ある日のこと、砂漠の中から新しい泉が湧き出てきたのであった。われわれには塩辛くて、とても飲めた代物ではなかったにちがいないが、その水を一口すくって飲んでみたとき、ハリースはこれこそまさしく天国の水だと思った。その透明度といい、おいしさといい、彼がいつも飲んできた水とは、較べものにならなかったからである。「この素晴らしさを分かっただけのお方に、わたしはこの水を届けねばならない」

彼はそう言うと、ただちにバグダードのハールーン・アッラシードの宮殿に向かって出発した。自分とカリフのために二つの山羊袋を携え、途中何度かナツメ椰子の実をかじった以外は、休むことなく旅を続けた。

数日後、バグダードに到着すると、ハリースはまっしぐらに宮殿へ駆けつけた。門番は彼の話の聞くと、規則に従って、ハールーンへの面会を許した。

「信徒の司令官さま」とハリースは言った。「わたしは無学な貧しいベドウィンでございますが、砂漠の水に関しては、そのすべてを知っています。このたびわたしは、天国の水を発見いたしました。そして、これこそ貴方さまにふさわしい贈り物だと思い、ただちに、こうして献上に参ったわけでございます」

素直な人柄であったハールーンは、その水を一口味わってみた。そして彼は、ベドウインの気質をよく知っていたので、警護の者に、ハリースを退出させて裁定が下されるまで閉じ込めておくように命じた。そして、次にハールーンは警護長を呼んで、こう言った。「この水は、われわれには何の価値もないが、あの男にとっては何より大切なものなのだ。だから、夜になるのを待って、あの男をこの宮殿から連れ出してやってくれ。けっして偉大なチグリス河を見せてはならぬぞ。おいしい水を飲ませないようによく注意して、彼の天幕まで送りどけるのだ。向こうに着いたなら、一千枚の金貨を与え、これは彼の奉仕に対する私の感謝の気持ちだと言え。そして、私が彼を天国の水の番人に任命したと、告げるのだ。カリフの名において、そこを通るすべての旅人にその水を無料で施すようにとな」

出典

『スーフィーの物語 -- ダルヴィーシュの伝承』

イドリース・シャー編著

美沢真之介訳

平河出版社 mindbooks シリーズ

1996

pp. 195-197

なんとなくホットするいい話だなと思います。比喩が豊富に使用されています。砂漠の夫婦は、一般の敬虔な信者を表しているのでしょうか。名前も、夫婦二人で「誠実な魂」を意味しているように思えます。一般にイスラムで定められている信仰・儀礼を疑うことなく素朴に毎日を送っている夫婦という設定でしょう。その夫婦が、ある日非常に特異な信仰上の経験をした。ちょっとした神秘体験とでも呼んだらよいのでしょうか。これに夫婦は大喜びです。こんなすばらしいものは、大先生に是非とも報告せねば、という運びになります。この大先生が、ここでハールーンによって表象されている人物です。実際には偉大なスーフィーの指導者といったところでしょうか。

偉大なスーフィーの指導者にとって、その夫婦の体験は非常に素朴でとるに足りないものでしょう。だからスーフィーの指導者は、その夫婦の報告を、鼻で笑って、軽蔑することも出来たはずですが。現実にはこのようなことは多いでしょう。しかしここで偉大なスーフィーの指導者がとった態度は全く違いました。夫婦の体験を、最大限に尊重し、しかも、それが実際にはあまりとるに足りないものであることを気づかせないことに非常な配慮を払ったのです。夫婦は、ハールーンの処置によって、より幸福に、より一層良い信者として、生を送ることが出来るようになったとあってよいでしょう。

どちらかという、指導者のあるべき姿を示す講話です。我々は、先輩、親、教師、上司など様々な形で人の指導者となる機会があります。その際の訓辞として多くの人間が胸にとめておくべき話でしょう。

ウルルン滞在記名作選「モロッコ・巨大迷宮都市の珍商売」

2000年11月5日(日)10時00分から同54分:毎日テレビ(4ch)

学会発表を六日後に控え、頭が朦朧としていた朝に偶然この番組を視ました。大変おもしろい内容でした。題にある「巨大迷宮都市」とは、フェズのことです。このフェズの旧市街の青年を主人公にした番組でした。何がおもしろかったかと言いますと、伝統的な中東の都市生活者の生涯設計が紹介されていたのです。

現代日本人の一般的な生涯設計は、まず、小・中・高校を卒業し、大学に入り4年で卒業し、企業に就職し、その一つの企業を定年まで勤めあげる、というものでしょう。もちろん、このような生涯を送る人は全体の割合から見ても多数派ではないかもしれ

ません。しかし理念としてこのような生涯が支持されている点は、ほぼ間違いないでしょう。現在はこのような生活設計がもはや支持されていない、と指摘される方も当然おられると思います。しかし私見では、このような昔からの生涯設計が不景気の影響で実現困難になった結果、様々な形態が模索されているのだと思います。伝統的な生涯設計が実現可能であるのに好んで別のパターンが選択されているようには思えません。

我々にとってこのような生涯設計は自明の理のように思われますが、これは、世界共通の価値観ではありません。このところをわきまえておくのは大切なことだと思います。要するに我々にだってその他のより良い生涯設計が存在するかもしれないということ、それは含有しているからです。

さてこの日曜日の「ウルルン滞在記」では、伝統的な中東の都市生活者の生涯設計が紹介されていました。

まず肉体的にほぼ大人となった頃、旧市街(メディナ)の荷物運びの日雇いのバイトからはじめます。その際、やとう側も一日単位で雇いますし、雇う際もめんどろな契約などせず、荷物を一つ運んだらいくら支払うというような約束を口頭で伝えるだけです。大きな商店や工場で仕事をする場合もあれば、単に旧市街で買い物をした人の荷物を家まで運ぶ仕事もあります。毎日、同じ場所で仕事をするわけではなく、その日その日に仕事のある場所へ出かけていく、という風でした。もちろん全く稼ぎのない日もあったようです。

中東の旧市街の道は大変狭いものです。だいたい人が四-五人横に並ぶと塞がってしまうような幅です。ですから自動車が通れません。そのため人間の運び屋さんの需要がまだあるのです。

この仕事をしていた番組中の少年は、昼は旧市街の食堂で自分が稼いでいたお金で食べていました。その日の稼ぎの半分ほどが食事代に消えましたから、儲けの量も大方検討がつきます。その少年は、見かけでは、小学校の高学年から中学生くらいにみえました。はやい年齢から独立心が育っているわけです。

この少年は、運び屋をしながら貯金をします。もちろんタンス貯金です。大きめのガラスの瓶を貯金箱代わりにしていました。なんのために貯金するのかというと、ロバを買うためです。ロバを何に使うのか。荷物運びをさせるためです。ロバを使えばより重いものがより遠くまで運べますから、儲けも大きくなるのです。そして儲けをまた貯金

して、馬を買って運送業の規模を拡大するもよし、その資本を元に別のビジネスを始めるもよし、というわけです。最終的に商業に成功した人物はフェズの旧市街の外に大きな邸宅を建てて余生を楽しむというわけです。これがいわゆる伝統的な中東の都市生活者のライフスタイルです。他には、手工業従事者の職人や、農民が伝統的な中東のライフスタイルに含まれるでしょう。しかし中東の個性を作っているのは、この商人の生活哲学だと思います。政治・統治に関係する人間は、この商人から税金をとって都市全体の治安維持を担当する人間にあたります。徴税にあたっては、徴税代行人が具体的に個々の徴税業務を担当していたようです。この徴税代行業の資格も実際には競売にかけられていたようです。

中東的な文明は、このような都市商業者が担う文明だったと思います。ですから資本主義を生み出した巨大な資本家と労働者は登場しませんでした。会社のような組織に属することは良しとされません。他人の下での仕事は一般に嫌われる傾向があります。皆、独立心に富んでおり自分の力で大きな商売をするのが理想です。個人で行う事業ですから、その規模にも自ずから限界があります。一般に個人が満足な富を所有できるような規模にまで事業が成功すれば、それ以上事業を大きくするような傾向はないようです。このようなメンタリティーは資本家の出現の歯止めになったのだと思います。同時にこれは工場労働者のような非人間的な人種の出現の歯止めにもなったわけです。事業を個人的規模に留めておく傾向は、事業の規模に一定の歯止めをかけ、さらにそれは事業に必要とされる市場の規模にも歯止めをかけます。ですから中東の商人には植民地のような巨大市場は無用だったわけです。一般に「大航海時代」といわれるインド洋沿岸の市場の中東勢から西洋勢への所有権の移行は、中東側の市場に対する淡泊さ、にも原因があったかもしれません。別の言い方をすると後発組の西洋は、国益増大のため、商人の市場拡大を権力側が後押ししたが、一方中東側はその必要を深くは感じなかった、ということでしょうか。この結果、西洋諸国は、巨大市場の獲得、資本家の出現、資本家の権力増大、資本家が権利を行使できる政治制度の設立すなわち革命の勃発、近代という道をたどります。一方で中東の側は、今度は西洋に生まれた資本家好みの権力により、中東自身が彼らの市場とされるという歴史の流れに揉まれます。

中東の個人主義的文明のよさが、どことなく感じていただけたかと思います。サラリーマンというか、巨大資本に従属せざるえない人間を多大に生み出す世界を彼らは、非人間的として意識的にしりぞけていたのかもしれませんが。5000年以上の歴史が生み出した人間の知恵ともいえるライフスタイルでしょう。別の言い方をすれば、中東は、「工業化社会」の手前で前進を拒絶した社会ともいえます。工業化社会のおかげで、我々はずいぶん豊かな生活を享受しています。その一方、会社勤めを強いられてい

やな上司の命令を聞かざるえない生活をも送っています。昔は盛んにいわれましたが、個々の仕事から労働の喜びが失われています。一部のエリートは創造的な仕事を楽しめますが、一方単純労働が相対的に多くの人間に強いられているわけです。ただし工業化社会のほうが、明らかに「貧困の解消」に成功しているように見えます。やはり工業化社会のほうがいいのでしょうか。一方でその工業化社会の成功も貧富の差の拡大のもとに成立したような歴史的経緯を持っているといえるかもしれません。世界の経済全体に議論を拡大すると別の結論がでるかもしれません。「中東的な商業主義的社会のほうがより人間的なのでそっちへもどれ」というような暴論を主張するつもりはありませんが、現在の状況を多少とも相対化できれば、と思います。

掲示板で何度か書きましたが、近くにチュニジアの青年が偶然、引越してきました。彼の生活設計を聞いてると以上のようなことを考えてしまいます。起業にかける執念や、なんでも商売の種にしてやろうという熱意は、文化的背景の違いを意識させるものでした。ごみ捨て場にすててあった鏡の木製の装飾を解体して腕輪をいくつも作り、町へ露天売りに出かけた時は、さすがに驚きました。自分はアラビア語でさえろくに書けないくせに、外国語を教える塾を開こうなどと本気で言い出します。彼はこのような執念をたびたび発揮します。しかし残念ながら彼のこのような執念は、一銭の儲けも彼にもたらず、結局、時給の極端にやすい工場にバイトにでるはめになりました。なんだか象徴的です。

商人が富を独占していた時代が終わると、工業を起こした資本者に富が集まる工業化社会が訪れ、市場の取り合いがもとで大量に人間を殺した戦争を二つまで起こしました。現在は軍事力で市場を奪うやり方はさすがに野蛮と悟ったのかあまりはやりませんが、各国の政治力が市場の獲得にものを使っている事情に本質的な変化はないようです。現在は工業化社会が終わり情報化社会に移行中だと言われています。もし本当だとすれば、これはとてつもなく重要なことです。これに失敗したところは第二の中東ということなのではないでしょうか？確かにネットワークが徹底的に世界中に広がれば市場を政府が採ってきたり守ったりする必要はなくなるわけです。下手をすると情報化社会は政府の形態まで変えてしまうかもしれません。情報化社会の政府像を正確に予見し実現した国は勝ち組に残れるでしょうね。こういう時代風潮は、中東の個人主義的商人には、追い風なのではないでしょうか。彼等が再度その栄光を取り戻す日が来てほしいものです。

コーランの価値

私はカトリックの思想家を主として扱う研究室に属していました。実際にカトリックの信者さんもいます。そういう環境ですから、宗教に関心の高い人が私の回りには比較的多くなります。イスラム教に関する質問を受ける機会も多いわけです。宗教に関心のある人は一般の日本人よりはイスラム教に対して好意的なのですが、それでもやはり壁を感じざるえない場合は少なくありません。なかでもコーランに関する誤解が多いようです。それをこの場を借りて解消したいと思います。

私は、チュニジアに留学した時、アラブの音楽にはまってしまいました。実際にウードという楽器を買って先生の所へ習いに行ったりもしました。その辺の経緯はこの HP の「チュニジア滞在中の思い出」に紹介しています。当時は暇ができると、町の中心地へ出かけてアラビア音楽のテープ屋へ足を運んでいました。テープも一本 200 円弱でしたので多量に買い込んでしまいました。そのうちなんだかんだとアラブ音楽に対する鑑賞眼のようなものも徐々に育ってきました。アラブ音楽の鑑賞力がアラブの人に段々と近くなってきました。ある音楽についての印象を現地の人に話して反応を伺って、自分の鑑賞力がどのようなものか調べてみたりもしました。そのうち古典的な芸術性の高いとされている音楽とそうでない音楽の違いもなんとなく理解できるようになりました。そしてアラブ音楽が目指している理念が漠然と見えてきたのです。その理念とは何でしょうか。それが、コーランの朗読そのものだったのです。コーランというものは、彼等の芸術活動の極北でもあったわけです。実際に著名なコーラン朗読家の朗読の芸術性の高さには驚くべきものがあります。

我々がコーランの朗読に似たものとして頭に浮かべるのは、お経の朗読でしょう。多くの人間にとってお経の朗読は、今や、「退屈なもの」の代名詞にまでなっています。しかしコーランの朗読は、少なくともアラビア語を母語とするアラブのイスラム教徒にとって、全く違います。多大な芸術的感興を与えるものです。しかも一部のインテリにだけでなく、あらゆる階層の人間にとってそうなのです。退屈なものとは 180 度異なるものなのです。魂をぐっとつかんで離さないものなのです。現在は Web 上でコーランの

朗誦が聞けます。関心を持たれた方は是非聞いてみて下さい。また大きめの CD ショップではコーランの CD も販売されています。

実際アラビア語の授業などでコーランの朗誦を学生さんに聞いてもらったことがあります。上にしたような説明の後で聞いてもらっても、反応は、「？」というものでした。何か妙におどろおどろしたもの、といった第一印象を持ったようでした。実際私の第一印象もそのようなものでしたが、やはりアラビア語をある程度身につけてアラビア語自身のリズムを漠然とでも理解しておくことが、前提とされているのかもしれませんが。

アラブ人が、コーランをありがたがっている点を、多くの人々は、「遅れている証拠」のように見えています。お経の朗誦をありがたがっていた昔の日本の田舎の人間と同様だと見ているわけです。これはコーランの朗誦のもつ現実的な魅力を理解できていないことから来る誤解です。残念ながら我々にはコーランのようなものが歴史上一度も与えられていないのです。私はイスラム教徒ではありませんが、京都の自宅近くの礼拝場で聞いた生のコーラン朗誦は本当に胸を打つ物でした。これを味わうためだけにアラビア語を勉強する価値があるといえるものです。

「コーランの翻訳が禁じられている」点を、イスラム教の後進性として指摘する人がいます。まずイスラム法上、コーランの翻訳が禁じられているのか否か、を私ははっきりとしりません。少なくともコーランの文中に明確にそれが、否定されているわけではありません。実際に早い時期にペルシア語訳は作られたと言われています。さらにコーランの翻訳者が原理主義者から脅かされたなどという話も聞いたことはありません。

「コーランの翻訳は不可能である」と主張したイスラム教徒ならいたかもしれませんが。コーランは、アラビア語の芸術性を極限にまで高めたテキストです。これは新約聖書のギリシア語とは対照的です。あるギリシア語に堪能な先生は、新約聖書のギリシア語を、「日本の中学生の英作文程度の英語」に比されていました。一方コーランのアラビア語は、ゲーテのドイツ語、ボードレールのフランス語に比されるものです。ゲーテやボードレールの詩が、完全に他の言語に翻訳可能でしょうか？不可能でしょう。それと同じ意味でコーランも翻訳不可能とされているだけの話です。本質的にイスラム教徒の後進性、保守性とは無関係なのです。

「異文化理解」という言葉が、最近好んで使用されています。しかし異文化は我々には初めは否定的に経験されることが多いことを忘れてはならないと思います。この一種の嫌悪感を乗り越えて現地人と同じ感性を共有できてから、批判も可能となるのです。

ちなみにここで私はコーランの「芸術性」云々に言及しましたが、コーランではコーランが詩ではないと明言されています。わかりやすさを理由に芸術を持ち出したのですが、厳密にはコーランは芸術の枠には収まらないものです。人間の主体的な意識の支配のもとに作成されたものではないからです。

「 慈悲深く慈愛あまねき神の名において 」

「 慈悲深く慈愛あまねき神の名において 」

bi ism allaah al-raHmaan al-raHiim

イスラム教の有名な定型句です。コーランのほぼ全ての章の冒頭にも掲げられています。まず簡単にその原文の構造を説明しておきます。

bi(ビ) : 前置詞で「において」

ism(イスマ) : 名詞で「名前」

allaah(アッラー) : 固有名詞でイスラム教の神「アッラー」

al-raHmaan(アッラフマーン) : 形容詞で「慈悲深い」 al は冠詞。

al-raHiim(アツラヒーム): 形容詞で「慈愛あまねき」al は冠詞。

日本語の語順とアラビア語の語順はおおよそ逆になっています。

この定型句の起源ですが、おそらく東方のキリスト教でしょう。古典シリア語の文献に同様の表現があります。

このページでお話したいのは、実はこの章句中の「慈悲深く慈愛あまねき」という形容詞のニュアンスです。日本語訳では「慈悲」「慈愛」という言葉が利用されることが多いようです。しかし両概念とも仏教的です。翻訳で正確に原語のニュアンスを完全に表現するのは常に大変困難なのですが、日本人がアッラーを仏教的に理解してしまっただけは困るのです。

まず起源と想定される古典シリア語ではどのようなニュアンスだったのでしょうか。古典シリア語で幅広く「愛」を表現する言葉に raHmaa があります。当然「神の愛」を示す言葉としても使用されています。アラビア語の al-raHmaan「慈悲深い」、al-raHiim「慈愛あまねき」も元をたどれば、この古典シリア語の「愛」raHmaa から出たものでしょう。古典シリア語的に考えますと、al-raHmaan「慈悲深い」には、能動的なニュアンスが、al-raHiim「慈愛あまねき」には受動的なニュアンスがあります。ですから、「raHmaan で raHiim な神」とは、「愛し、愛される神」ということになります。

もちろん普通イスラム教のお坊さん(ウラマー)は、この言葉をこのように解してはいません。預言者ムハンマドが借用したであろう元の古典シリア語の章句のニュアンスを仮説的に再現しただけです。イスラム教には、当初、人間が神を愛することが出来るかどうか問題視した人々がいたくらいですから。

ただアラビア語で考えますと、なぜあまり意味に違いのない二つの形容詞がつづくのか、腑に落ちませんが、古典シリア語のレベルで考えますと、面倒なことは何もなく単純に理解できる、ということを示しておきたかったのです。raHmaan と raHiim の違いに意味を見いださずとして、一方が「神と被造物の間の垂直的な慈悲」他方が「被造物の間の水平的な慈悲」を表しているとする見解もありますが、創造的・神学的解釈でしょう。信者さんからの積極的なコーランへのコミットメントとしてなら肯定可能です。raHmaan と raHiim は、一般的には同様の意味を持つ二つの形容詞として済

まされているようです。

また raHmaan は、神にしか使用できない形容詞である、とする注釈者(ジャウハリ)もいます。

さて本題に帰ります。「raHmaan で raHiim な神」とはどのような神なのでしょうか。キリスト教的な「愛する神」ではもちろんありません。人間の罪を救うために自らを贖罪の生け贄としてささげるまでに、人間に深い愛情を注ぎ込む神ではありません。神が一方で全能であるならば、その力で人間の罪をぬぐい去ることなど容易なはずですし、そもそも神は人間に殺されるわけではないのです。キリストの死が人間に罪を自覚させる演出であったとしても、全ての人間が罪深いわけではありませんし、わざわざ演出をするくらいなら、直接罪ある人間に罰を下せばすむことです。イスラム教にも「樂園追放神話」は共有されています。しかしその直後で「神は人間のその罪を許した」と記述されています。原罪意識はイスラム教には希薄です。イスラム教からみると、キリスト教徒の原罪意識は、なにか不健全に映ります。もちろんこれはイスラム教の人間観が傲慢である、ということではありません。「神の怒りを常に恐れる預言者ムハンマド」は、信者の理想像の一つとして共有されているようです。

回り道をしましたが、「人間のために自らを殺す神」という神観は、少なくとも、イスラム教では主流ではないようです。神の尊厳に傷を付けるように受け止められるでしょう。

また「raHmaan で raHiim な神」は、仏教的な「慈悲・慈愛の神」でもありません。仏教的な慈悲の特徴には、母性的な無制約性があります。息子に注がれる母の愛情の、より完全なもの、といった感じでしょうか。極端な例ですが、たとえ息子が殺人犯であっても、母親はその息子を愛すでしょう。仏教的な慈悲にも似たような側面があります。慈悲の注がれる対象の倫理的側面が軽視される傾向です(だから仏様はありがたい、ということになるのですが)。大泥棒のカンダタにも天国へ入れるチャンスを与えてしまうのが、慈悲なのです。天国でカンダタに出会った、カンダタに殺された人間の気分はさぞかし複雑でしょう。このような「慈悲・慈愛を恵む者」という規定は、アッラーには与えられていないように思います。

キリスト教と仏教との対比から、イスラム教の神観の特徴を浮かび上がらせてきたわけですが、ではこのイスラム教の「raHmaan で raHiim な神」のイメージをポジティブに記述するとどのようになるのでしょうか。ここからは私の主観的要素が一層強くなります。

「raHmaan」も「raHiim」も、同一の名詞から派生した形容詞と考えられます。そ

の名詞とは raHim (ラヒム)です。raHim (ラヒム)とは何か？「子宮」です。胎児にとっての「子宮」の関係が、「raHmaan で raHiim な」関係と考えられます。

神:人間 = 子宮:胎児

の関係がイスラム教のベースにある, ということです。イスラム教というと何かと父権的なイメージが先行しがちですが, 最も頻繁にイスラム教徒達が口にする定型句は, 神と人間の間を, このように記述しているのです。直接触れることはないが, やさしく包み保護する存在, ということでしょうか。もちろんアラーには厳しく罰する者として的一面もあります。イスラム教の神は, このように, 人間の通常の思考力では統合不可能な対立する諸性格を包含する存在として把握されているのです。

ウサーマ・ブン・ラーディン資料

今やテレビでウサーマ氏の顔を拝まない日はありません (2001/9/22)。しかし、その人となり判断する材料はさっぱり与えられておりません。困ったことです。そのため以前、私がネットから集めておいた資料の一部を公開させていただきます。これを読んで皆さんなりに判断して下さい。

まず ABCNEWS から。ウサーマ氏の独占インタビューです。直接、氏の肉声が聞けるだけに、その人となり判断するには格好の資料でしょう。

次は 1998 年の大使館爆破事件に対するアメリカの報復攻撃後に書かれた記事です。攻撃からウサーマ氏が生き延びたとの報告、及び氏の簡単な経歴です。特に目新しい情報はありませぬ。入門的内容です。すでに基本的事項をご存じの方を読み飛ばして下さい結構です。

アメリカの第1の標的：オサマ・ビン・ラディン

- ・アメリカはイスラムの聖地に7年以上も滞在し、その基地をイラク攻撃のために使用した。
- ・さらにまたイラクをアメリカは聖地の基地から攻撃しようとしている。
- ・上記の行為の真の目的はイスラエルを助けることだ。

「このアメリカの行為は、イスラム教徒に対する明確な宣戦布告である」。

という主張をさらに提示します。

この主張も全く根拠なしになされたものではありません。理由があります。その理由は、昔の偉い学者達がそう言っている、というものです。そこで本文中にはその学者の名が列挙されています。名前を具体的に挙げられている学者達は確かに高い評価を得、権威とされてきた人々です。またそれが嘘でないことを示すために、文書中にはシャイフ・アルイスラームの

- ・アメリカはイスラムに宣戦布告している。
- ・イスラムの敵にはイスラム教徒は戦わなければいけない。

から導き出される結論を考える訳です。

・「アメリカと、イスラム教徒は戦わなければならない」

「我々は、すべてのイスラム教徒に、神の命令に従って、見つけたならばいつでもどこでもアメリカ人を殺害し、財産を奪うよう呼びかける」

「しかし、禁じられた数か月が過ぎ去ったとき、異教徒を見つけたらどこでも戦って殺害し、とらえ、包囲し、(戦争の)あらゆる計略に彼らのはまるのを待て」

イスラム用語集

アーイシャ	'a:isha	第1代カリフ アブーバクルの娘。預言者の妻。
アーミン	a:mi:n	「アッラーよ、叶えてください。」
アーヤ	a:yah	1、しるし。 2、コーランの章を構成する一つの単位。一般的に、ひとつの合はひとつの句から、長い場合は複数の文から構成されて Qur'a:niya
アザーン	aza:n	1、宣言。コーラン 9-3((これは)アッラーとその使徒から降り、人びとへの(布告された)宣言。)) 2、礼拝時間に入ったことを知らせる定められた呼びかけの 二
アジュール	ajr	1、報奨。マレー語で pahala。コーラン 16-96((われは耐え忍び、あなたがたの最も優れた行為によって、報奨を与える。)) 2、マハル。コーラン 4-24((それでかの女らと、交わった者は、それらに代り、マハルを納めなさい。))
アッサラーム アライクム	assala:m alaikum	ムスリムの間で広く使われる世界共通の挨拶。アラビア語。「 والسلام عليكم والسalam عليكم」という意味。
アッラー	ALLA:H	神。アッラー。神という意味の「ILA:H」に定冠詞 AL が付いた形式の神の固有名詞。
アブドッラー	'abdulla:h	預言者ムハンマドの父の名。「アッラーの僕」という意味で、新たに入信した者が、父の名としてつけることがある。
アヤトラ	a:yat ullah	アヤトウッラー。イランのホメイニ師の称号で世に知られる。1 2 イマーム派の上級イスラム法学者の称号。
アラブ	'arab	アラビア人の総称。
アリー	'aliy	第4代カリフ アリー イブヌ アビー ターリブ ('aliy ibnu abutalib) の名。アッラーの使徒とされる。
アンサール	ansa:r	イスラム黎明期のマディーナのムスリム達。
イード	'i:d	イスラム暦 10月1日から3日をイードル フィトル ('i:d ul-fitr) イスラム暦 12月7日から10日をイードル アドハー ('i:d ul-adha)
イシャー	isha:'	夜の礼拝。
イジュマア	ijma:'	イスラム法の第3の法源。「合意」という意味。世界のウラマの一致によること。
イスティンジャー	istinja:	タハーラ (清め) の方法の一つ。排便後肛門を水で洗浄すること。
イスラム暦	isla:m	ヘジラ暦。ヒジラ (マディーナへの移住) を元年とした太陰暦。

		年は 357 日。
イバーダ	'iba:dah	信仰を具体的に表現する行為。タハーラ（清め）、サラート（礼拝）、ハッジ（巡礼）、ジハード（努力、聖戦）などがそれに当る。
イフワーン	ikhwa:n	アラビア語「akh」（兄弟）の複数形。イスラム同胞団（ikhwan）
イブリース	ibli:s	悪魔。悪魔の首領。コーラン 18-50（「われが天使たちに向かったとき、われは言った時を思え。かれらはイブリースを除いてサタン（悪魔）の間で、主の命令に背いた。）」
イマーム	ima:m	1、指導者。集団礼拝の時、礼拝を先導するもの。シーア派でイマームの子孫でなければならない。 2、模範となる者。コーラン 2-124（「われはあなたを、人びとに模範として立てた。かれらはあなたを仰せられた。）」 3、記録簿。コーラン 36-12（「われは一切を、明瞭な記録簿のうちに記録した。）」
イルム	'ilm	宗教「知識」。
インシャー アッラー	insha: ALLAH	「アッラーがお望みであれば」という意味。予定に絶対というニュアンス。アッラーの思し召しで
インジール	inji:l	イエスに下された啓示。福音。
ウイトウル	witr	「奇数」。イシャーの礼拝後行われる 1 ラカアのスンナの礼拝
ウマル		オマル参照
ウラマー	'ulama:'	イスラム社会において指導的立場に立つ宗教知識者。イスラム学者（'a:lim）。
ウンマ	ummah	「イスラム共同体」。
ウンム＝ル＝クルアーン	ummu-l-qur'a:n	コーラン第 1 章の開端章（ファーティハ章）を指す。ウンム＝ル＝クラー
ウンム＝ル＝クラー	ummu-l-qura:	マッカ。
オマル	'umar	第 2 代カリフ。オマル bin アル＝ハッターブ（'umar ubn ul-khattab）（善悪を区別する人）。
		コーラン訳は（宗）日本ムスリム協会発行の「日垂対訳・注解」からの引用。

■ イスラームとはなにか



イスラームとは

イスラームとはアラビア語で平和、従順、服従などの意味を持ちますが、宗教的には「アッラーのみへの帰依」を表わします。そしてムスリムとは、自分を全宇宙の創造者アッラーの法にゆだねる者のことです。

カリマ

イスラームの教えを一言で表わしたのが「カリマ」と呼ばれる文章です。これはアラビア語で「ラー イラーハ イッラッラーフ ムハンマド ラスールッラー」(アッラーのほかに神はなく、ムハンマドはアッラーの使者である) という文です。またこれを認めるには「アシュハド アッラー イラーハ イッラッラーフ ワ アシュハド アンナ ムハンマダン ラスールッラー」(私はアッラーのほかに崇拝に値するものがないことを証言します。そして私はムハンマドがアッラーの使者であることを証言します) という言葉を唱えます。この言葉を唱え、この言葉の意味することを認めれば、その人はムスリムになります。それでは、このカリマの意味するところはなんでしょう。

アッラー



アッラーとはアラビア語で「唯一の神」のことを意味します。よく言われるような山の神とか豊作の神のようなものではありません。「アッラーの神」という言い方は間違いです。アッラーとは、人間を含むこの世のあらゆるものの創造者であり超越者、あらゆる力の源泉であり、世界の生きとし生けるもの全てを養っている養護者のことです。人間が生まれてきたのも、考えたり話したり食べたりして生きてゆけるのも、全て慈悲深い支配者アッラーの力によるものです。大自然が美しいのも、この世界が一定の法則によって動いているのも、すべてアッラーがこの世界をデザインし面倒を見ているからなのです。

ムハンマド（彼の上に平安あれ）

アッラーはこの世界と人間を創造したままで放っておきはしませんでした。人間の心には欲望や悪い性質があるので、自然のままに正しく導かれるということはありません。そこでアッラーは人間を導くために、それぞれの時代にそれぞれの民族と地域に、人間の間から預言者と呼ばれる人を選び、彼らを通じて人間の生きる道を教えました。預言者とは「神の言葉を預かる者」という意味です。預言者は哲学者や思想家などとは違い、自分で宗教を考え出したわけではありません。また、自分で修業して預言者になれるわけではありません。昔からさまざまな預言者たちが送られて、さまざまな時代やさまざまな民族にアッラーの宗教をもたらしましたが、時代が下るにつれて間違いや悪意、思い込みや善意などから人間が勝手に宗教を変え、もとの教えと違ったものにしてしまいました。アッラーはこれらを正すため、最後の預言者としてムハンマド（彼に平安あれ）を送り、最後の完全な宗教としてイスラームを下したのです。

クルアーン

アッラーが天使ジブリール（ガブリエル）を通じてムハンマド（彼の上に平安あれ）に下したアッラーご自身の言葉がクルアーン（コーラン）です。クルアーンは人間によって書かれた書物ではありません。ムハンマドは読み書きができませんでした。その彼がもたらしたクルアーンは、当時のアラビアの文学者たちを驚かせる完ぺきで美しい文章だったのです。その中には、この世の終わりまで、あらゆる人間の導きとなる教えがあります。クルアーンは預言者ムハンマドの人生とともに 23 年間の歳月をかけて少しずつ下されました。そうして 1400 年たった今でも全く変えられていません。クルアーンはアッラーによって、そのオリジナルの内容が最後の日まで守られます。

ハディース

またムハンマド（彼の上に平安あれ）は、クルアーンのほかにアッラーから授かった知恵をもとにした多くの言葉・行動の記録を残しています。それらをハディースと言います。ハディースはクルアーンよりも細かく、具体的な事例について述べてあります。そこでクルアーンとハディース、この両者をあわせたものがイスラームの教えの基礎になっています。

人 間

人間はアッラーの最高の被造物です。そして動物などとは異なり、自由意志を与えられています。アッラーは人間を愛され、アッラーの言葉であるクルアーンと人類の見本であるムハンマド（彼の上に平安あれ）を通じて人間を導こうとされているのです。

イスラームの信条

ムスリムは次の6つのことを信じています。

ムスリムの生活

ムスリムの生活はあらゆることに教えがあり、生活の指針がありますが、新しくムスリムになった人は、イスラームの教えに100%従えるよう、子供が言葉を覚えるように、自分の能力に応じて精いっぱい努力し、少しずつ自分のものにしてゆけば良いのです。「無理に」とか「無理やり」というのは、イスラームにはありません。そのために重要なものがいくつもあり、それは五行として知られています。

イスラームの世界

今から約1400年前にアラビアに伝えられたイスラーム教は、その公正さと寛容さによって瞬く間に全世界へ広がり、現在世界人口の約5分の1がムスリムです。その代表的な国々は中東のみならず西はトルコやバルカン半島のアルバニア、などの東ヨーロッパの国々、北部・西部および東部アフリカ、東はイラン、アフガニスタン、インド、パキスタン、バングラデシュ、中国や中央アジアの国々。マレーシア、インドネシア、タイ、南部フィリピン、などの東南アジアの国々におよび、ヨーロッパ、ロシア、南北アメリカなどを中心として世界中で増え続けています。

イスラームと日本

■イスラームとはなにか



イスラームとは

イスラームとはアラビア語で平和、従順、服従などの意味を持ちますが、宗教的には「アッラーのみへの帰依」を表わします。そしてムスリムとは、自分を全宇宙の創造者アッラーの法にゆだねる者のことです。

カリマ

イスラームの教えを一言で表わしたのが「カリマ」と呼ばれる文章です。これはアラビア語で「ラー イラーハ イッラッラーフ ムハンマド ラスールッラー」(アッラーのほかに神はなく、ムハンマドはアッラーの使者である)という文です。またこれを認めるには「アシュハド アッラー イラーハ イッラッラーフ ワ アシュハド アンナ ムハンマダン ラスールッラー」(私はアッラーのほかに崇拝に値するものがないことを証言します。そして私はムハンマドがアッラーの使者であることを証言します)という言葉の唱えます。この言葉を唱え、この言葉の意味することを認めれば、その人はムスリムになります。それでは、このカリマの意味するところはなんでしょう。

アッラー



アッラーとはアラビア語で「唯一の神」のことを意味します。よく言われるような山の神とか豊作の神のようなものではありません。「アッラーの神」という言い方は間違いです。アッラーとは、人間を含むこの世のあらゆるものの創造者であり超越者、あらゆる力の源泉であり、世界の生きとし生けるもの全てを養っている養護者のことです。人間が生まれてきたのも、考えたり話したり食べたりして生きてゆけるのも、全て慈悲深い支配者アッラーの力によるものです。大自然が美しいのも、この世界が一定の法則によって動いているのも、すべてアッラーがこの世界をデザインし面倒を見ているからなのです。

ムハンマド (彼の上に平安あれ)

アッラーはこの世界と人間を創造したままで放っておきはしませんでした。人間の心には欲望や悪い性質があるので、自然のままに正しく導かれるということはありません。そこでアッラーは人間を導くために、それぞれの時代にそれぞれの民族と地域に、人間の間から預言者と呼ばれる人を選び、彼らを通じて人間の生きる道を教えました。預言者とは「神の言葉を預かる者」という意味です。預言者は哲学者や思想家などとは違い、自分で宗教を考え出したわけではありません。また、自分で修業して預言者になれるわけではありません。昔からさまざまな預言者たちが送られて、さまざまな時代やさまざまな民族にアッラーの宗教をもたらしましたが、時代が下るにつれて間違いや悪意、思い込みや善意などから人間が勝手に宗教を変え、もとの教えと違ったものにして

しました。アッラーはこれらを正すため、最後の預言者としてムハンマド（彼に平安あれ）を送り、最後の完全な宗教としてイスラームを下したのです。

クルアーン

アッラーが天使ジブリール（ガブリエル）を通じてムハンマド（彼の上に平安あれ）に下したアッラーご自身の言葉がクルアーン（コーラン）です。クルアーンは人間によって書かれた書物ではありません。ムハンマドは読み書きができませんでした。その彼がもたらしたクルアーンは、当時のアラビアの文学者たちを驚かせる完璧で美しい文章だったのです。その中には、この世の終わりまで、あらゆる人間の導きとなる教えがあります。クルアーンは預言者ムハンマドの人生とともに 23 年間の歳月をかけて少しずつ下されました。そうして 1400 年たった今でも全く変えられていません。クルアーンはアッラーによって、そのオリジナルの内容が最後の日まで守られます。

ハディース

またムハンマド（彼の上に平安あれ）は、クルアーンのほかにアッラーから授かった知恵をもとにした多くの言葉・行動の記録を残しています。それらをハディースと言います。ハディースはクルアーンよりも細かく、具体的な事例について述べてあります。そこでクルアーンとハディース、この両者をあわせたものがイスラームの教えの基礎になっています。

人 間

人間はアッラーの最高の被造物です。そして動物などとは異なり、自由意志を与えられています。アッラーは人間を愛され、アッラーの言葉であるクルアーンと人類の見本であるムハンマド（彼の上に平安あれ）を通じて人間を導こうとされているのです。

イスラームの信条

ムスリムの生活

ムスリムの生活はあらゆることに教えがあり、生活の指針がありますが、新しくムスリムになった人は、イスラームの教えに 100% 従えるよう、子供が言葉を覚えるように、自分の能力に応じて精いっぱい努力し、少し

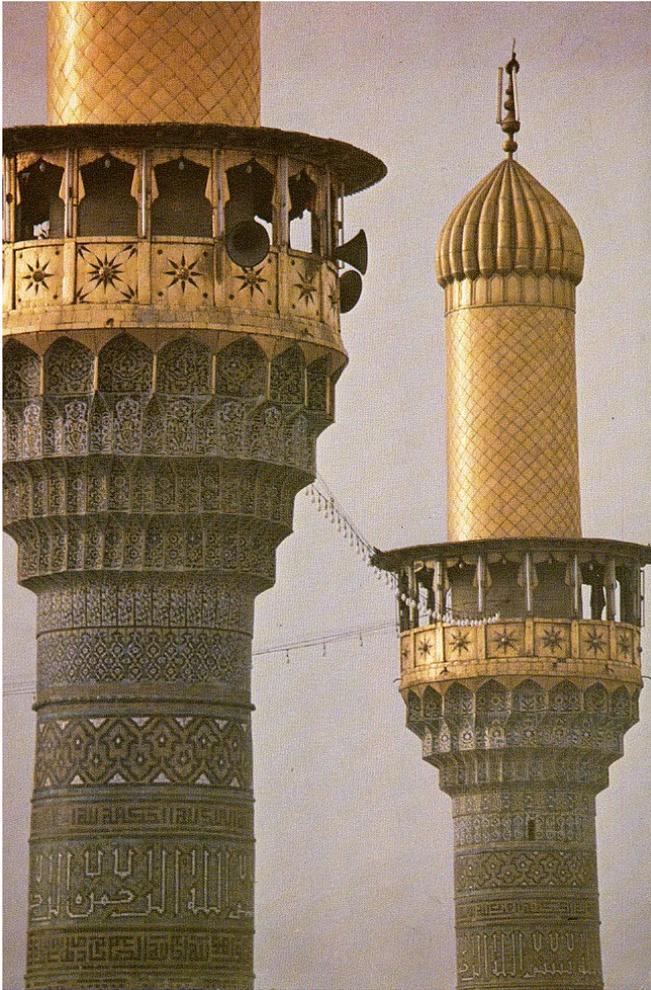
ずつ自分のものにしてゆけば良いのです。「無理に」とか「無理やり」というのは、イスラームにはありません。そのために重要なものがいくつかあり、それは五行として知られています。

イスラームの世界

今から約1400年前にアラビアに伝えられたイスラーム教は、その公正さと寛容さによって瞬く間に全世界へ広がり、現在世界人口の約5分の1がムスリムです。その代表的な国々は中東のみならず西はトルコやバルカン半島のアルバニア、などの東ヨーロッパの国々、北部・西部および東部アフリカ、東はイラン、アフガニスタン、インド、パキスタン、バングラデシュ、中国や中央アジアの国々。マレーシア、インドネシア、タイ、南部フィリピン、などの東南アジアの国々におよび、ヨーロッパ、ロシア、南北アメリカなどを中心として世界中で増え続けています。

イスラームと日本

イスラームのマスジド（モスク）とは、「アッラーの家」です。（もちろん、アッラーは肉体を持っていたり、休息の場所を必要としませんから、比喩的な意味において、です）それは、キリスト教教会や仏教の寺のように権威機関であったり、信徒が所属するものではありません。それはまず礼拝堂であり、信者はどこのマスジドに行っても礼拝することも許されます。また、マスジドは祈りの他、知識の座であり、あらゆるイスラームの活動の拠点です。また、それぞれのマスジドは、その側に住む人たちにとって地域のコミュニティーセンターの役割も果たします。一日五回の礼拝をマスジドで行うことによって、自然に近所付き合いが生まれます。



ミナレット（尖塔）は、多くのモスクに作られ、ドーム状の屋根と並んで、モスクの特徴の一つです。昔、ラウドスピーカーのなかった時代に、礼拝の時刻を知らせる呼びかけ（アザーンといいます）をこの塔の上から行いました。最近のモスクでは、ミナレットは形だけになったものもありますが、古い時代のモスクには、今でも塔の中に螺旋階段とムアッズイン（礼拝告知者）の立つ場所があります。

モスクの正面にはキブラ（カアバ神殿の方角）を示すメヘラーブと呼ばれる壁のくぼみがあり、大抵その右側にはミンバルという説教壇があります。これは階段の一部を切り取ったような形をしていることが多いです。特に金曜日の集団礼拝には、イマーム（礼拝の先導者）がこの壇の上から説教します。



[Index](#)

[ホームに戻る](#)

[English front page](#)

ムスリムが豚肉を食べない医学的理由

Why Muslims Do not Eat Pork? Some Scientific Reasons

M. フセイン・マリク(マレーシア大学教授)

精神と肉体

医学的立場から

豚は平気でゴミを食べる雑食動物である。あたりかまわず食べる。豚は病原菌、特に寄生虫を人体に移し蔓延させるのである。

現代の医学は最近になって老人性痴呆症の問題に焦点を当てるようになった。老人の血管の裏は固くなって血液を脳や心臓などの器官に送りにくくなっており、このような症状をアテローム性動脈硬化症と呼んでいる。血が固まるような症状を呈すると冠状動脈硬化血栓症、心臓麻痺や脳血栓、さらに脳卒中などの障害を引き起こす原因となる。なぜ血管が固くなるかといえばそれは食べ物によることが大で、特にコレステロールが原因であることは兎を使った動物実験で証明されている。このコレステロールに豚のラードを加えて実験を行うと症状発生率はさらに増加する傾向にあり、冠状動脈硬化症が引き起こされる。

ラードは100グラム中に2800単位のビタミンDを含んでいるが、ビタミンAはまったくない。実はこのビタミンDが冠状動脈硬化症を引き起こす原因で、ビタミンDはカルシウムに溶けやすく、ビタミンDを吸収したカルシウムが血

管内部に運ばれていくからである。食生活のなかで動物性コレステロールのとり方次第で人体の血液中コレステロール蓄積量が決まる。つまり血液中のベータリポタンパク質量が増大するのである。動物性脂肪は非常に濃い酸性脂肪を含んでいる。これが冠状動脈硬化症の原因の一つである。ベーコンには通常のプロテイン25%、動物性脂肪55%が含まれている」

「米・カナダ国民の六人に一人が寄生虫を体内に持っている。旋毛虫や寄生虫は豚肉を食べる食生活から起こる。だが本人には自覚症状がない。一度かかると快復はおそく、死ぬ者までいる。また一生涯寄生虫を宿し続ける者もいる。彼らに共通していることは、豚肉を好んで食べていることである。

このような病気に対する抗体はないから予防の施しようもないのが現状である。抗生物質もワクチンもこのような寄生虫には効果がない。最良の対策といえば豚肉を食べない、つまり体内にこのような寄生虫を入り込ませないようにすることである。

塩分やくん薫で寄生虫を退治できるわけがなく、また詰め物工場や屠場での肉の検査を役所が指導して行っても効果がないのは当然である」

「さあ、アツラーがお前たちに用意し、許した良い食べ物を食べるがいい。お前たちのアツラーにお仕えしている気持が本当ならアツラーの恵みに感謝せよ。アツラーはお前たちに死肉、血、豚肉、それにアツラーの御名が唱えられずに処理された肉を禁じ給うた。しかし強制されて食べてしまった者には、ああ、アツラーは許し、慈悲深い御方であらせられる」

「アツラーは明らかなことばで啓示を垂れ給うた。啓示は繰り返されるが主を恐れる人々の心と肉体には懲罰の恐れが溢れてくる。アツラーを忿ると彼らの心は和んでくる。アツラーに導きを求めるものには導きを与え給う、まさにこれはアツラーの導きである。だがアツラーが迷わせた者には導きはない。

そうになったら復活の日を恐れて顔を打ち続けるだけだ。誰が迷わせたと質問されるが、『お前たちのした報いを味わうがよい』と言われるだけだ。お前の前には拒否した者たちがあったが、皆思いもおよばぬ報いを受けている。アツラーは彼らに現世で辱

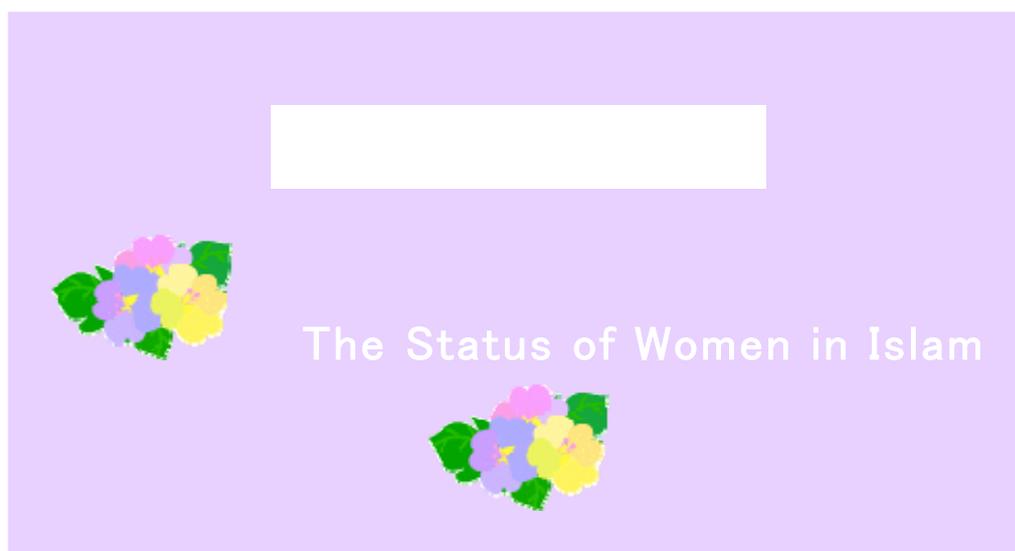
めを味わわせたが、来世ではさらにひどいことは彼らは知るまい」

牛肉と豚肉

「おお人間よ-この大地でアッラーが許したものを食べよ。悪魔の道を行ってはいけない。彼らはお前たちの敵であることは明らかなだ」

「性的な不道德行為に近づいてはならない。それはいまわしいことであり悪魔の道である」

「お前たちにはアッラーのみ使いという良い模範がいる。アッラーを念じ、最後の審判の日を信じる者のよい模範である。アッラーを数多く念じよ」



1. 女性は母である

日本でイスラームの真の姿を多少なりとも知っているのは一部の識者と信者に限られるようである。一般には西欧の偏見と悪宣伝による歪められたイスラーム観があり、なかでもその女性に関する面は大きく誤解されている。

イスラームとは、人間の健全な生き方で、人間本来の姿を損なうことなく、豊かでのびのびとした人生を設計するものであろう。そして創造主との対話の中に一切の不自然と極端を排し、一定の社会ルールに基づく自由な人間性を描き出しているのがその教えであるならば、そこには当然男女双方に対する公平で無理のない処世の道が示されているはずである。

精神面をふり捨てて暴走する現代の物質文明は、人間を機械への隷属状態に押しえ込んでしまった。歪曲した社会空間に捕らえられ、盲目のまま押し流される人間は、不安と焦燥にさいなまれながら必死で毎日をなんとか送っている。社会は混乱し。一触即発の危機をはらみながら、辛くもバランスを保っている。多くの社会問題が起き、解決の見通しはつかない。このままでは、いつの日か断崖から転げ落ちかねない。

かつて社会の水先案内人を自負していた男性が、今日の問題を抱えきれず、頭を砂に埋めて難を逃れようとするだちょうのようにふるまい、口先だけで威信を保とうとするかぎり、女性の侮辱を買うのも当然であろう。欧米における性の差別と男女平等を仕方なく受け入れ、我慢に我慢を重ねてきた女性が今日立ち上がり、男女平等を要求するのも当然のことであろう。19世紀末に至って女性の立場がいくらか改善されたとはいえ、それは表面的な改革にすぎず、一皮むけばあらゆる角度から不公平に染まった内面である。

ここでいう男女平等とは「それぞれの特性を活かした人間としての自由平等」であって、何でもかんでも全く同じに扱うことではない。人類存続のために課せられた「女性の聖なる使命」を考慮せず、男性同様の労働を要求するのは無謀といえる。その重圧をになう女性は、現代社会でも過酷な生存競争を免れるべきではなかろうか。金銭的自立のため身をすり減らし悪戦苦闘するのが女性の姿であってよいものだろうか。

金力の支配する現代社会において、金銭的自立が人間の一人前になる尺度とされている。それは社会が認める仕事をし、その報酬として自己の生活に足りる収入を得ることを意味する。だが、子を産み育てる事は、その認められた仕事の範疇にはない。女性が母としての使命を放棄したなら、社会など存在するはずもないし、我々も存在せぬ。子をつくるための男性の役割は、この場合ほとんど無視できる。そのためだけなら、ほんの一握りの男性でこと足りよう。

女性を「母」の面だけに限定してしまう事はできまい。やはり人間としての自由と権利は、男性と全く同じように守られねばならぬ。それは、女性が男性のように行動することを意味するわけではなく、自己の特性を活かす生き方でなければならぬ。

母性面に限定できないとしても、人間存続のためのその役割はあまりにも大きい。そして子を思う母の姿を見るにつれて、女性の真の美しさは、やはりそこをゴールとするように思えてならない。女性の一生を考える時、母としての立場を除外できるだろうか。女性の本質的な満足もそこにあるのではなかろうか。この全世界の中で、一番大切な人は母である。そしてすべての女性は、母となるからこそ、すべての男性に尊敬されなければならない。これがイスラームの教えである。

もちろん社会を動かす者と社会を産む者、そのいずれが上であるかは一概にはいえぬ。だが、たかが日々の糧を稼ぐからといって、妻を能なし呼ばわりしてもよいのだろうか。19世紀に至るまで、イスラーム圏以外のほとんど全域においてひどい男尊女卑がまかり通っていたのはなぜだろう。その点を訂正しようというここ百年の社会の歩みが、せいぜい男性並の働き方を女性に課すことしか考えない

のはなぜだろう。

心理学者と科学者が能力を競っても仕方あるまい。将棋の中原名人と巨人の王とどっちが勝つのか。生理学上の違いのある男と女についても、どちらが上かなどの質問は全く無意味であるはず。互いの個性を活かせばよいのでは。

問題は「女性は母である」ことを女性を含めた欧米社会の全員が忘れようとしていることだろう。この人口過密の世の中で、もう子供はたくさんだ。地球の資源だって無尽蔵ではない。やれ住宅難だ、食糧危機だ、オイルショックだ、などが叫ばれ、「母」としての機能は軽んじられ、また女性自身が「母」となることに疑問をもち始めている。あまりにも近視眼的な考えであろう。

母を大切にしないということは、自己否定につながる。生きること
に喜びを感じるなら、生命を可能とした母を粗略にはできぬはず。
生を肯定せぬものは、他者の生命をも尊重できぬだろう。

人口増加が「母」の立場を弱め、そして自己否定につながる。これは自然があらゆる動植物に課している過酷な調節と同種の何かかもしれない。しかし同じ動物の中でも、ある種のネズミは増えすぎると集団自殺を繰り返すし、象は受胎周期がのびる。人間は人工調節を行う。しかし人間の場合はそこにとどまらない。海洋開発や砂漠緑地化、はては天体の利用。人工爆発は科学の進歩の前では脅威とはなり得ないと断言する科学者もいる。つまり、人間がどれだけ増えても地球、あるいは太陽系はせまくはならないというのだ。そこまで考えるのは科学者の問題として、とりあえず、国によって人口密度が極端に異なる点だけをといあげてもよい。なぜ壁があるのだ。なぜ旅券が必要なのだ。なぜ科学は万人に仕えないのだ。

他人との相違点だけを見つづける人々。不安なのだろう、他人の欠点を見つけて瞬間的な優越感にひたらなければ生きていけないのだ。なぜ共通点を見つけようとししないのだ。その時こそ人類は兄弟姉妹となり国家主義の壁は取り除かれるかも知れぬ。その時こそ人類は、今までの何万倍も進歩するであろう。そしてこのような考えは、女性が推進しなければならない。女性こそ母として、我が子と

しての人類を守らねばならぬ。

そのようなシステムが、果たして成立し得るものだろうか。欧米社会を見ても、答えは見つかるまい。共産主義も解答を与えない。いずれにおいても、見出せるのは不安と焦燥と権謀の渦巻く人間関係だけである。人間は、全人類の見地に立って全体的な和合を試みる能力と資格を持っているのだろうか。

それが可能であると主張するシステムが存在する。それは 8 億の人間が信奉するイスラームである。現今の社会が人間関係の坩堝であり、沸騰するボイラーのようなものとするなら、イスラームのそれは、サーモスタットと安全弁のついた、ほとんど唯一のものかも知れない。



2. 女性に魂はあるか

イスラーム以前の女性の立場はひどいものだった。全くの隷属状態で男性の掌中にあり、結婚に際しての同意は必要とされず、その身体も財産も夫の所有物となり、私的にも公的にも仕事につくことは許されなかった。証人や保証人、後見人や管理者にはなれず、自分で物事を決定したり、契約の当事者たることはなく、自由意志をもたぬ奴隷に等しい存在だった。

このような偏見は、地域差はあっても、世界中にはびこり、ヨーロッパでは、女性は果たして「家畜なみ」なのか、それとも「奴隷なみ」かという驚くべき論議が横行し、一部のキリスト教宗教会議においては、「女性は魂を持たず、審判の日に復活することもない」との結論に達したものだ。

キリスト教初期の神父たちは、女性を醜悪なものとし、地獄の門であり、諸悪の根源としていた。生きること自体が人類への呪いであり、その美しさは男性を脱落させるための悪魔の武器であるとしていた。すべての女性はイブであり、禁断の木の開封者で、神の

意志である男性を打ちのめし、その罪のためにこそ神の子イエスが死ななければならなかったと決めつけた。

このような偏見は、西暦第7世紀までの世界に限らず、なんと19世紀の後半に至るまで、一部存続したものであり、今日の女性問題にまで影を落としている。女性は虐げられ、権利も自由もほとんどなく、男性の逆鱗にふれぬよう、びくびくしながら生きていたものだ。

イスラーム以前のアラビアでは、女兒殺しがはびこっていた。出産時に赤子が女であった場合、父親の顔は失望と怒りと恥辱から青黒くなり、即座に穴を掘って生き埋めにしてしまうことが多かった。また結婚生活においても男性に一方的な権限があった。たとえば妻に対して「汝は我にとって母の背中に等しい」と宣言する方式があったが、ただ単にこう言うだけで夫はすべての結婚上の義務を免れ、全く自由にふるまう事ができた。ただこの宣言だけで夫には妻を養う責任さえなくなったのだ。かといって妻は家を出ることは許されず、他と結婚もできず、夫の気もむくまま辛うじて生きたのだ。これは離婚ではない—男性だけの切札だった。当然妻は夫のご機嫌ととりむすぶのにきゅうきゅうとしていたし、それも愛と尊敬からではなく、怖れからだった。



3. 女性解放の第一歩

西暦7世紀、暗黒の泥沼にもがき、ありとあらゆる脱落と異常が横行した世界。世界中で女性が人間以下とされていたとき。マッカの預言者は次の信託と宣べていた。

一個の魂からなんじらをつくり

同じ一個の魂からその配偶をつくり

(クルアーン 7-189、4-1)

要するに一個の魂からつくられた男と女は、同じ人類であり、人間として同等の存在であるというのだ。20世紀の今日の話ではない、

1400年前のアラビアの話である。イスラームという「人間開放運動」の一環として記された真の意味での「女性解放運動」のまさに巨大なる第一歩であった。

人間としては同等であるし平等の権利を持たねばならぬが、はたして平等とはなにか。それは外面的なことではあり得ない。すべての外的および内的要素を調べあげ、その上で決めなければならない問題であろう。そしてすべての要素を知り尽くす能力は、人間にはない。

イスラームには、男女の肉体的、生理学的違いとそこから生ずる態度、ふるまい、好み、生き方を十分考慮に入れて精密に打ち出されたとしか思えぬようなシステムがある。そこには一見不平等に見えるほどの決まりさえある。たとえば、遺産相続における女子の取り分が男子の半分にすぎないこと、あるいは男性には必要に応じて4人までの妻が認められるが逆に女性が何人かの夫を得ることはできない。

女子の取り分が男子の半分ということは、そこだけを考えればたしかに不公平であろう。しかし公平とか平等という概念はやはり総括的なものであり、相対的なものであろう。イスラームでは、扶養の義務は男だけのものである。夫は自分の財を使って家族を養わなければならないが、妻の財産は妻だけのものであり、夫がいかに困窮しようとも、妻には自分の財産を使って夫を食べさす義務はない。これもまた、なんと不公平な話ではないか。

公平とか平等という概念は、人生の価値基準や目的意識、あるいは趣味や好みによっても大きく異なる。何が善で何が悪か、人は何のために生きているのか、人生のゴールは、死とはなにか、などに定義を与えなければ、公平とか平等という考えは定まるはずもない。欧米や日本、あるいは社会主義国などの無宗教国においては前記の質問に対する答えがないから、公平であるか平等であるかを計る物差しがない。基準の角度をわずかに変えるだけで鷺を鴉と言いくるめることも可能である。そして考え方角度は、同じ国民であっても、一人ひとり異なる。これを無理やり統一してしまうのが「イズム」であろう。ナショナリズム、コミュニズム等々。宗教も、そうである。しかし宗教には、正誤は別として、前記の質問に対する答えがあり、

人生には目的が与えられている。であるから、その目的に照らし合わせて、何が善で何が悪か、平等か否かの基準がはっきりしている。

イスラームの教えを考えてみよう。唯一無二の神アッラーに近づくため、自己の能力を最大限に発し、生まれてから死ぬまで、知識を吸収し、人生を温和に歩むことである。そしてアッラーの別名は真理である。この考えが間違っていると言える人がいるだろうか。もし言えないなら、そのシステムをイスラームの目的の中で考察せざるを得まい。

結婚に際しては、両性の合意が必要である。特に女性の合意は絶対必要であり、親が勝手に娘を嫁がせることはできないし、いかなる強制も許されない。

立会人や証人を用意した結婚の式が挙げられ、きちんとした契約が交わされる。契約書には双方の条件が書き込まれ、証書となり、法によって守られる。

夫は妻を離婚できるが、種々の待機期間が定められていて、その間、妻を親切に扱い、同じように扶養しなければならない。二度までの離婚宣言は、いつでもとり消すことができ、その間よりが戻れば、離婚はなかったものとする。三度目の宣言が行われれば、離婚は確定するが、それでも待機期間中は扶養せねばならず、子を身ごもっているときは子を産んで育てるまで、何らかの扶養義務が付いてまわる。イスラーム法には、離婚問題に関しての細かな規定があるが、その他にも、結婚の契約条件によって種々の援助を得ることができる。その法的立場において、女性は無力ではなく、十分な権利を保障されている。

妻も夫も離婚できるが、契約条件を履行させるためには、一定の条件が満たされなければならない。例えば、結婚契約に対する夫の違反、夫が精神病の場合、夫の性的不能、夫が家族を扶養せぬとき、夫が妻と同居せぬとき、常に不当に扱われたとき、裁判官が必要と認めるとき、などである。

全く同等の人間として契約をするのであるが、夫が一家の長として、家族を扶養することは定められている。後は、イスラームの教えに

違反せぬかぎり、自分の好む条件を加えてよい。

イスラーム法には姦通罪がある。夫または妻が行った場合は、死罪となる。未婚の場合は百叩き。男でも女でも同じである。ローマ、ギリシャ、中国などで女性には極刑が与えられ、男性にはほとんど何の刑もなかったことを考えれば、イスラームの場合は男女平等を目的としていることは納得できる。

ここでイスラーム圏の一部にある宗教とは関係のない慣習、たとえば顔を隠すベールとか、ハレムなどをイスラームに起因するものと考えてはならない。次に、世界のイスラーム教徒が、イスラームの教えを完璧に守っているとは限らないことである。イスラームの女性が家庭の安寧を捨ててまで、外へ出て男のように働く気がなかったからといって、(それは多民族のようにべつ視されなかったからだが) 男女差別だと言えるだろうか。もっともそのような歴史の中で、現在の一部の国々においては、女性の働く立場というものが男性のそれに劣る場合も多い。しかしこれもイスラームに起因するわけではない。イスラームでは能力に応じた給与とは言っているが、男女の差別を付けてはいないからだ。

ともあれ、イスラームは女性を大切にすることをすすめる。天国は母の足下でありとされ、すべての女性は母であるとしている。一番大切にしなければならぬのは誰かとたずねられた時、聖預言者は、「母である」「次は?」「母である」「次は?」「母である」と3回答え、「次は父親である」と答えている。女性を大切にせよとの教えはクルアーンにも預言者伝承にもふんだんにあり、夫婦は愛を基盤とした人間性豊かな生活を設計するように教えている。

この男女間の一断面をとらえてみても、イスラームの教えは第7世紀の水準をはるかに越えた高貴なシステムであったことは明白である。現代の社会システムと比べてどうだろう。ほとんどすべてのことが金銭的評価を受ける今日の社会において、そのシステムは色あせて見えるかもしれない。しかし仮に「人生とは金だけではない」とし、「精神の自由と独立は、金銭などに縛られるものではない」という考え方を心の中にしっかりと持ったらどうだろう。現代の諸システムは太陽の前の星のように、光を失ってしまう。

問題は、産業革命に始まる物質文明の奔流が過去のすべてをおし流してしまっただけにある。科学の進歩は未来にライトを当て、希望の光をともした。科学の恩恵は数うべくもない。しかしながら、その物質面の輝かしさだけに目がくらみ、過去の精神的遺産を忘却してしまう人類も、大していばれた存在ではない。科学とは、物理や化学だけでなく、人間の心とか魂の問題まで探求するものであろう。人間のすべてをカバーするのが科学であるはず。この点、真の科学とは真の宗教と合致するであろう。

イスラームでは、知識イコール科学（アラビア語のイルム）神学者イコール科学者（アラビア語のアーリム）である。そして真理（神の別名）に近づくための教えである。ここで考えてみて、さまざまな危険をはらむ科学暴走社会と、真理を目的とし、一定のルールに従うイスラームの社会と、いずれが住みよい社会であろうか。人間の本質に反逆し、人間の存在パターンを歪めたアルコール漬けるの牢獄。神を否定した者、真を拒否する者に行先はない。存在意義の基本ルールからも自由になろうと神を否定した結果、真の自由をすべてなくし、物質の奴隷に墜ちた人間。真理を求めるのを止めたとき希望がなくなった。生きているのか死んでいるのか、その心の暗さ。生きている事を確認するため、刺激を必要とする。段々感じなくなる。より強い刺激を求めるようになる。その途中で酒や麻薬があり、犯罪があり、その究極には自殺がある。その道は一本道であり、何かのきっかけで真理を求める気持ちが起きぬかぎり、まっしぐらに駆け下りてしまう。希望の光が消えたガラスの城。穴の開いた心。寒風に冷える心に浴びる津波のような酒または酒。

人間らしく生きられるのはどちらであろう。神という唯一の真理だけに頭を下げ、他のあらゆる権威を拒否し、あらゆる迷信と脅えから開放され、男は男らしく、女は女らしく、自由闊達に生きることができるのは、いずれであろうか。

もっとも、家庭や結婚の必要を認めない人は、社会の単位は個人であり、人間は人間であるから男とか女、父とか母、などの違いは二義的な問題であり、そのようなことにとらわれてはならぬという。男と女という言葉を使っただけで、差別だと騒ぎ立てる人々もいる。しかし性を無視して男が女のように、女が男のように生きるのは、その可能性はともかく、はたして望ましいものであろうか。性転換

の結果、念願がかなってなんとか女性の仲間入りをした男もいる。しかしそれはあくまで欠陥品にすぎまい。同様、男と同じ立場を要求する女性も、本質的には持っていない機能を要求され、自己のエッセンスを切り捨てることを迫られる。人間をアメリカ人、ドイツ人、日本人などに分けてはなるまい。白人、黒人、黄色人種に分けてもなるまい。これらは人種差別につながる。また、子供と大人に分けることの中にも大変な差別が存在するのは衆知の事実である。

しかし男であり女であることは、ただ単に生まれた場所や国籍の違いではなく、皮膚の違いでもない。それは厳とした構造上の違いであり、人間をつくり上げる二つの異なる因子である。あたかも人間という存在の割符のように、その二つが合わさって一人前となる。そこには当然、相おぎなう異なった機能が存在する。

イスラームは、男女の別を重視する。その特色を活かすため、一部違った種類の制限を課している。これが差別であろうか。それとも、一部異なった生き方をするからこそ、大局的に見て、人間として平等になるのではなかろうか。

人間存在の割符、半分と半分が結合して一になるからこそ、結婚が大切である。結婚を否定する者は、あくまで「半分」のままである。だからこそ、イスラームは社会の単位として家庭を置く。そして人間とは、男であり、女であり、父であり、母であり、子であり、これらは人間性の中に融合された、切り離すことのできない部分であり、人間性を構築する崇高な部分であるとしている。



4. 未来への基地、家庭

ところで、人間とは、いったい何だろう。その機能についてイスラームは、地上を管理するための神の代理者で、神を崇拝するために創られたという。このことは、神の別名が真理であり、慈悲であり、その他諸々の善であることを識り（注：神“アッラー”には 99 の別名があります）、その究極のゴールに近づくために日々神を意識し崇拝

することを学ぶなら、それは人間完成のための軌道修正に他ならぬことが理解できよう。

神の代理者として地上を管理するという事は、一体何を指すのか。少なくとも個人レベルでの話ではあるまい。個々の人間が各自の独想をもとに、てんでばらばらな活動を行ったとしても益はあるまい。全体が合意に達して、初めて可能となろう。全体制を示唆する句はコーランにもあまりにも多く、また預言者伝承にも多い。蟻に学べ、蜜蜂に学べ、隣人と仲良く、人類平等、人類皆兄弟姉妹、集団礼拝のしょうれい、親切、寛容、慈悲、慈善、大巡礼、すべてが全体の和合を指す。礼拝においては全員が、地球のどこに居ようとも、同じ方角（メッカ）に顔を向け、礼拝の終わりには世界中の兄弟姉妹に挨拶（サラム）するために顔を右と左に向ける。預言者は「ムスリムは全体が一個の人間のように、身体の一部が痛めば全体が痛む」と言っている。

数千数万のパーツが寄り合ってスーパーカーの機能を支えるように、イスラームのいう人間完成とは人類全体の和合に他ならぬ。そのためには、統一した目標を持ち、はるかなる唯一のゴール（神）に向かわねばならぬ。工場においてパーツの選別が行われるように、いつの日か人類の選別も行われよう。これが最後の審判であろう。優良なパーツは何らかの宇宙的機能に統合され、その状態が「楽園」となり、不良品は溶鉱炉に投げ捨てられるのではあるまいか。もっともそれは人間だけではなく、全創造物に共通することであろう。優良品はすべて楽園に集められ、不良品は廃棄される定めにあるのだろう。だが、こと地上に関しては、人間の役割が重大である。

人間とは、先祖伝来の遺伝子の融合体でもあろう。ということは、人間一人ひとりがすでに個々の存在ではなく、微視的レベルにおいては先祖の統合国家であり、現代に送り込まれた先祖からの代表とも考えられる。何のために？むろん人間完成の道を行くためだ。筆者は預言者の「人間は一人ひとりが国家である」という言葉をこのような意味に介す。

人間は、人生で得た経験の一部を全人類のために役立て、その本質は遺伝情報の形で子孫に伝えると思える。そしてその経験とは、特殊な体験だけを指すものではなく、考え方のパターンを構成するす

べての経験であろう。

遺伝情報は、しかし、人間の生き方を左右するものではない。それは本能の指針であり、今までの人間の「未来に対処する方式」にすぎまい。一人の未来に関しては、その本人が切り開いていくものであって、そのための許容力は十分にそなわっている。だが、その切り開いた人生はその本質において、遺伝情報の流れとして次の世代へ伝わっていく。この意味で、一人の人生は自分だけのものではない。この意味で、子は親の分身であり、未来への親の投影である。一面においては芸術作品のようであり、その限りにおいて、親は子の生き方に責任がある。片方、絵画や彫刻とは異なり、子という微視的國家への参加である。だから子を否定することは、大きな目でみての自分の未来を否定するだけでなく、自己の構成因子の否定でもあり、やはり本質的な自殺につながる。そこにあるのは進化の道程における歯止めではない。

人間はこのことを本能的に理解している。それが親子の愛情として表れる。当然、親の子に対する愛情は、子の親に対するそれよりも圧倒的に強い。なぜなら、子は未来であるからだ。このことは、人間の一人ひとりが無意識の内に理解していることがらである。

しかしながら、社会の混乱と未来への不安に途方にくれた人類は、このことを忘れようとしている。そこに自殺願望が起き、その変形としての子殺しや双方の責に起因する親子の断絶が生ずる。

この人間の全体的流れを把握せぬかぎり、人生の意義について解答を持たぬかぎり、全体としてのはるかなるゴールを認識せぬかぎり、混乱や不安はおさまるまい。個人を重視しすぎる資本主義社会も、個人を無視する現今の社会主義体制も、共にゴールを見失っている。そして共に、人類完成のための「愛情」の役割を悟っていない。

子は両親から遺伝子を受け継いで、顔形や体躯など、似通った面を持って生まれてくる。これは外面だけでなく、視力や他の面の遺伝も含む。親はそこに自己の分身を発見し、父性愛と母性愛を刺激され、子を守り育てる。子を守るためには命も捨てる。むろん母性愛が比較にならぬほど強いが、これは精子の数と卵子の数、また種々の人体構造の違い、また子を育てるための機能の違いなどからくる

のだろう。ともあれ、無力な赤子にとっては絶対安全地帯が親と一緒に居る家庭である。これは赤子の時から、本能的な直感力で、悟る安堵感であろう。この安堵感は、人生の底流として、成人して独立能力を持つまではその度合いに応じて強く、その後は微かながらも一生を通じて流れる。無意識の内に自己の存在価値を持つのが家庭である。それは遺伝子のつながりによって親に好感を持たれ、愛情をそそがれ、自己の能力を無理なく開発できるからである。

この点、家庭内における母親の役割は父親のそれとは比較にならぬほど重大である。彼女は、体内に重荷を負い、乳を含ませ、おむつをかえ、三度の食事に神経をくばり、子を育てることに自己のすべてを投入する。そして子供を盲愛する。その盲愛こそ、彼女の本能なのだ。母親の盲愛を否定してはならぬ。それこそ人間に人間性を与える基礎的栄養である。父親は父親なりに、母親の盲愛や溺愛をチェックする。そして子にとって、家庭と社会のきずなとなる。保育所などは、補助的な意味においては意義があるかも知れないが、家庭の代わりとはなりえない。そこには「盲愛」を注げる母親はいない。

もともと、現代社会において、人間が自我を強調しすぎるあまり、人類の見地に立てないのと同様、家庭内においても子の人格を無視し、あるいは全く放任する相が表れている。そこには子の持つべき安堵感はやや存在せず、壁を破る力が備わるまで我慢しなければならない牢獄と化している。親子の断絶は無理もない。



5. 一夫多妻制

イスラームがはなはだしい誤解を受けているのがこの点であろう。人はハレムを想像し、ある者はわいせつな思考にほくそ笑み、ある者は潔癖に拒絶するが、一概に男尊女卑の野蛮な風習とかたづける。これは、イエス・キリストの教えを歪めて創られた世界に住む者が、真理（イスラーム）の台頭を前に崩壊せんとする虚構の城をささえんとし、イスラームのすべてのことをことさら曲解し、その全体象

を歪めて宣伝した必死の悪あがきの顕著な面である。

イスラームは人間の尊厳を基盤とした高貴で実際的な生き方を教える。あらゆる極端は悪とされ、その中では、理想に走って現実を忘れることも戒められる。あらゆる問題に現実的解決を与えるのがイスラームである。人間と人間との接触課程において、その角を取り、弾き合いをなくし、融和の内に張りのある生き様を説くその教えを見る時、真理の探究者なら好感を持たざるを得ず、より高度な社会科学の所産であることを直感するはずである。そこには真摯な温和さがただよい、真剣な内にも殺伐さはない。個人の焦燥と社会の葛藤に対する、いわば安全弁が設けられた、バランスのとれた生き方である。

その安全弁のひとつが、限定された一夫多妻である。イスラーム以前の無制限なそれではない。また現代の隠れた陰湿な一夫多妻でもない。現代のそれは、法において禁止されてはいても、世界中にまんえんし、私生児の増加、女権の低下などをもたらし、諸悪の根源となっている。

人間は万物同様、進化を望む体質を持っている。そして進化とは、宇宙に適合する能力を得ることに他ならない。現代の人間が進化の極限にあるとは思えぬし、そのことは百四十億の脳細胞の内せいぜい数分の一しか使われていないと語る大脳生理学によっても確認できる。ならば自己の未来参加としての子を求め、その未来の進化への道を大切にすることは、他生命同様、人類にも備わった絶対的本能であろう。

その本能は、男性と女性の双方にあるが、身体構造上の違いにより、表れ方が異なる。つまり精子と卵子の違いであろう。通常、男性は一年に数百人の子供を産ませる可能性を持つが、女性は九ヶ月に一回しか出産できない。男は数人の女性を同時に愛することができ、逆に女性は一人の男性しか愛せないという言葉は、その正誤はともかく、このような生理学上の相違をもとにしているのだろう。ともあれ、子を慈しみ、守り育てることは、他生命同様、人類出現以来の欠くべからざる本能であろう。

動物の場合は、この本能に自動的な制御メカニズムが存在する。あ

るものは、一年に一回しか性欲を覚えない。あるものは一年に数回、性欲を持つ。人間は性本能に対する制御眼メカニズムを持たないが、それは、より良い遺伝子の結合を目指すため、より良い配偶を得るためでもあるまいか。その代わりに理性なるものが存在する。本能を制限せねば、そこには野獣都市が出現する。野獣より破壊的であろうことは確かだ。このきざしはすでにある。

本能の抑圧もまた、欲求不満を昂じさせ、同様の結果をもたらす。個人が自らに課す抑圧はこの限りにあらず。その場合、いつでも自戒を破ることができるという考えが微かにでも残り、それが救いとなる。また価値観の違いにもかかわるので一概には言えぬが、禁欲が習性となった場合には、何らかの悪影響を残すものと思える。僧職者の中で禁欲主義をまっとうできる者が少ないことは、それが人間の本性に反しているからであろう。ましてや、一般大衆に本能の抑圧を強いることは、混乱と爆発を促すものであり、社会の自殺に等しい。

前にも触れたように、性本能の表れは男性と女性において異なる。未来へのまい進において男性の性機能は一夫多妻を大きくうわまわる。一夫多妻制に固定されることは、こと男性にとって、能力の制限となる。むろん集団社会において、いくばくかの制限は必要であり、諸般の事情により、一夫多妻制が最高の形態である場合も多かろう。しかしそれが絶対視され、法となると、システムは硬化し、崩壊の危険にさらされるであろう。

色々な事情から、男性の本能は、他に女性を求めるようになる。需要は供給を呼び、日影は女性、夜の女などの変形を生み出す。法を守る気持ちが強ければ強いほど、そこにはジレンマが生ずる。心の阿責を逃れるため、酒の多用で本質的思考をにぶらすようになる。本能は、法との葛藤に打ち勝ち、酒の力をかりて無限に突っ走ってしまう。当然、犯罪も増える。

イスラームの限定された一夫多妻制は、このような観点からの安全弁であると思う。数の面からは、妻は四人まで認められる。しかし夫は、愛情や親切、思いやりなどの感情面で、そして扶養や送り物などの物質面で、あらゆる角度から妻を公平に扱うことを要求される。これはしかし、妻に個性がある以上、夫にとって多少の苦痛を

ともなうことは否めない。この点を熟慮して、とても公平には扱えまいと思うなら、妻は一人だけにせよ、との教えである。

これは中国に存在した第一婦人、第二夫人のシステムをは違らし、日本にあった妻妾制度とも違ふ。妻は全く同じ立場で平等に扱われ、夫に対して各々同一の権利を持つ。人間平等をうたうイスラームの中で、一夫多妻は、男女差別ではあるまいかとの疑問も起こりやすいが、この制度は強制的なものでもなく、単に許されているだけのことを理解し、そして男性のためだけのものではなく、女性の立場を救う意味もあることを考え合わせれば、疑問は永解しよう。

進化の道程をたどる人類が完成から未だほど遠いように、社会も完全ではなく、たえず変化を余儀なくされている。あらゆる変動が予測できる。現在は、一秒後にはすでに過去となり、一秒先は未来である。人間には明日のことは分からない。婚姻制度だけをとっても、永い間存在してきた一夫多妻制度と、人類の歴史上ほんの微かな期間だけ主流となった一夫多妻制のいずれが未来に対して有効であるかは判断できぬ。

男性と女性の数が全く同一の場合、一夫一妻制が優れていよう。しかし戦争などで男性の数が減少することも考えられよう。そのとき、あまった女性はどうなるのか。戦争は否定すべきだが、進化の途上にある人類の不完全社会が突如として全体の調和に目覚め、国家の壁をとり除き、地上の管理者として合体することは、そうやすやすとは望めないであろう。そのような時、一夫多妻は、女性のために有効な制度となろう。夜の女や妻妾制度をイスラームは断固拒否する。

個別の角度から考えてみよう。妻が不妊だった場合、その結婚生活は、一夫一婦制の立場において、夫の未来参加をその時点で拒絶している。では、妻が離婚さるべきだろうか。これは非人間的な解答であろう。不妊症と思われていた女性が、相当な期間を経た後に妊娠する例もある。それにもまして、男女は互いにあいおぎなう人間制の割符であろう。離婚は、結婚生活が双方の人間性豊かな生き方に対しても重大な齟齬をきたす場合のやむを得ない手段である。このようなとき、現在の妻はそのまま、次の妻をめとることは許され

るべきではなかろうか。

妻が病身である場合、離婚はなおさら非人道的であろう。妻は家事に耐えない。夫は性本能を拒絶し、子を持つことによる未来参加を否定し、妻の看護に徹し、家事に専念すべきだろうか。これらの問題は、第二の妻を持つことによって解消する。

このように一夫多妻が有効な解決となるケースは多い。そのような時、一夫多妻制が法のものに絶対視される社会の男性は、どのように行動するだろうか。耐えられる者は少ない。離婚する者もいる。しかし離婚が禁止されている社会もある。かくれた交際が生じ、夜の女が増える。

特殊なケースだけではなく、一般の平均的な家庭を例にとってみよう。夫は外に仕事に出かけ、妻は家で家事をする。夫にとって、仕事から帰る家は安息の場だが、妻は夫の世話をしなければならない。家事は重労働である。幼児がいる場合は大変だ。夫は一週間に一日ないし二日の休日を取り、年間の有給休暇など種々の骨休みを得る。妻には休みはない。一般的市民にとって、一体どちらが重圧を担っているのだろうか。この不公平の解決のため、夫の家事参加も考えられ、一部では実行もされている。はなはだしい例では、夫が家事と育児を担当し、妻が働きに出かける。子がいなければ、子という存在を無視するなら、一人の人間としての男と一人の人間としての女が共に稼ぎ、共に家事をすることは全く公平であろう。だが前述のように子の存在は無視できない。そして母性の欠落した、あるいは母性愛のうすれた家庭には、子の成長基盤がない。このような難問が昂じて、家庭不和をもたらす一因となっている。そこで、二人以上の妻が共同で家事と育児を担い、夫の世話をする方が、場合によっては、ずっと楽であろう。

もちろん、日本のような住宅難の社会において、二人以上の妻が同居することは難しいかも知れない。また、夫の愛を独占したい気持ちが無理のない本能的なものであることを考えるなら、一夫多妻がうまくいくかどうかは疑わしい。であるから、その制度は強制されるべきではなく、また、奨励されるべきでもない。

そこでイスラームは、一夫多妻制を、奨励するわけではなく、制限し

た上で許し、家庭不和と社会混乱への安全弁としているのだ。法で禁止してしまい、種々の弊害を巻き起こす社会と、場合に依じて許容する社会。いずれが柔軟性に富んでいる現実的な社会だろう。



6. 一夫多妻制との違い

では、無精子病の男性と結婚した女性の場合はどうか。母性本能を絶たれ、一生母となることができず、未来へ進むことができぬまま一代限りですべてを終えるのか、人間として平等であるなら、夫に許される事は妻にも許されるべきではないか。夫に多妻が認められる、妻にも多夫をみとめてよいのでは、との疑問を覚えるであろう。

女性は「母」としての崇高な役割を担う。それを否定されたのでは、立つ瀬もなかろう。この場合、夫に受精能力のないことがはっきり確認できるなら、当然、離婚が考えられる。人類の未来を考え、自己の分身を未来に送ることを考えるなら、当然であろう。

預言者伝承によれば、子を産める相手と結婚せよ、とある。現代においては、あらかじめその能力を確認できるはず。ただ、無精子症とは、語義どなりに精子が全く存在しない状態ではない。精子の数が一定以下となり受精能力を欠くと認定される場合を指す。男性の精子の数は、ふつうの場合でも、日々増加する。その状態が変転せぬとは限らない。つまり、現代医学も絶対ではないのだ。逆に、双方が全く正常とされても、子を持つ場合もある。このような問題に関して（どのような問題に関してもだが）最終的な判断は自分でしなければならない。

妻が複数の夫を同時に持つことは、イスラームでは許されない。これは女性の特質に反する。次に子の問題がある。一夫多妻の場合は、子の父と母は、はっきりしているが逆の場合には、どの父から生まれたのか判断できないこともある。その場合、父は自分の子であることを確信できぬまま、子が必要とする父性愛を注げまい。

妊娠状態の一時期、女性は性交不能となる。その間、複数の夫は欲求不満にあえぐ。その欲求を阻止できようか。社会は混乱するであろう。

人間に明日は分からない。一大異変が訪れ、母系社会が成立し、一妻多夫が正当化される事態が生じるかも知れない。突然変異によって、女性の受胎能力が増し、男性の精子が減少するかも知れない。未来を制御することは、人間には不可能だ。しかし、人類の過去と現在を調べ、未来を予測することは、微かながら可能である。そしてそのような予測の中に一妻多夫の位置はない。

イスラームはバランスの取れた柔軟なシステムであり、はっきりと禁止された事項以外は個人の自由を尊重する。より良き人生を送るための判断は、各人にゆだねられている。人間は一人ひとりが、その微視的國家の王である。生き方を強制されることはない。この点でイスラームは、人間のロボット化をきらう。アウシュビッツやベトナムでの、あるいは第二次大戦中の日本軍の残虐事件などでの「命令を遂行したにすぎず、責任は上官にあり」という逃げ口上はイスラームにない。このような体質は、イスラーム以外にはふんだんに見られ、日本の商社マンにも一部（あるいは多く）存在する。人間は一人ひとりが神と直結し、自らが自己の全責任をとるとイスラームは言う。人生のあらゆる局面において、判断を下すのは自分である。判断を下すためには物事を理解しなければならない。そのためイスラームは学ぶことを人間の義務とする。男であれ女であれ、幼児であれ老人であれ、生まれたときから死ぬ直前に至るまで、学ぶ事を課す。そしてクルアーンが人生の指針であり、預言者の生涯は人生の立体モデルである。イスラームの一夫多妻制は、問題解決のための一策として掲示されているにすぎず、その方策を取り入れるかどうかについては、あくまで各自の判断にまかされている。



後記

イスラームは、人類の歩み方と個人の生き方を同時に扱う精密な社会システムである。それは、現世から来世につながる魂の問題を

扱う。この点で、個人の生命は、一代限りではありえない。一方、本書は、魂や来世には触れず、人間の現世的歩み方でのみ限定したものであることをご了承願いたい。



慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において

サウム（断食）

イスラミックセンター編著

一、序文

断食はイスラームの五つの柱の一つです、五つの柱とは、次のとおりです。

- (1) 信仰の告白（シャハーダ）。それはアッラーへの服従を言葉で表明することです。アラビア語では、ラー・イラーハ・イッラッ・ラーフ・ムハンマドゥン・ラスールッ・ラーといい、その意味は「アッラーの他に神はなく、ムハンマドはアッラーの使徒（預言者）である」ということです、
- (2) 一日五回の礼拝（サラート）
- (3) 断食（ラマダーン月のサウム）
- (4) 喜捨（ザカートとサダカ）。それは貧しい人々や、救済必要者への、年一回の

義務的施しです。

(5) メッカ巡礼 (ハッジ)。イスラーム教徒は健康と経済が許す限り、一生に一度メッカのカアバ神殿に巡礼しなければなりません。

次に五つの柱について簡単にふれてみたいと思います。

「信仰の告白」(シャハーダ) をすることによって、人はアッラーの唯一性と、その主権および人間のアッラーへの帰依を心にみとめるわけです。これによって、人は他の人々からの規制とか、自分自身の欲望の隷属から解放され、全能の神の存在とアッラーに対する自分の責任を意識するのです。

ムハンマド (かれの上に平安あれ) の導きを通じて、アッラーへの信仰を告白することにより、わたしたちは生活のあらゆる面において、預言者の教えと慣習に従わなくてはなりません。また、毎日の礼拝 (サラート) を通して、わたしたちはアッラーとのつながりを強め、アッラーへの愛を深め、慈愛あふれる全智全能者、栄光と主権者アッラーへの崇拜の念を表わすのです。

そして喜捨 (ザカート) をすることによって、決して見返りを期待しないで、アッラーへの愛として、同胞に自分の財産を分け与えるのです。これによって、わたしたちの寛大と友愛の精神が助長され、全宇宙のすべての真理をその手中にしておられるアッラーとのつながりを通して、富と財産を楽しく使うことをおぼえるのです。メッカ巡礼 (ハッジ) では、あらゆる偏見から身をきよめ、国籍、人権、社会的な相違などはアッラーの目からみると何の意味もなく、イブラーヒーム (アブラハム) (かれの上に平安あれ) のように、真実の信仰と正義だけが、人間としての価値の本質であると心に感じとります。

断食の話に戻りますが、断食はクルアーンで述べてあるアッラーの教えに対する純粹な服従の行為です。その効用はきわめて多く、これから順番に述べていきます。その意義は、わたしたち人間を創造し、わたしたちに肉体的精神的必需品と、その使い方をさずげて下さった唯一のおかたアッラーへの完全な服従の気持ちを強めることです。

アッラーはわたしたちの主であり、天然の資源と人間自身に与えられた能力という主よりの贈り物を通して、わたしたちは生計を営むことができます。

それゆえ、アッラーが一定の期間中、飲食物や他の欲望を満すことを控えるように命じられるならば、わたしたちは喜んで従います。クルアーンではいわれています。

「信仰する者よ、なんじら以前の者に定められたように、なんじらに齋戒が定められた。おそらくなんじらは主を畏れるであろう。」(第二章 雌牛 第一八三節) 断食をすることによって、わたしたちは多くの恩恵を得るのですが、その第一の効用は自制心、欲望の節制および習慣の柔軟性にあります。飲食や喫煙または夫婦関係で欲望を満しすぎると、わたしたちは欲望の奴隷になってしまいます。

断食によって、人はこれらの欲望から逃れることができ、飢えや渇きという貧困者

の不幸を身をもって自分のものとし、かれらに対してより一口同情的になっていきます。

また断食という精神的行為を通じて、人々は自分が世界中のムスリム（イスラーム教徒）と一体になったと感じ、友愛の感覚を増してくるのです。

医学的にも断食には、血液中の脂肪分をとり、腸内の細菌や尿酸の有害な動きを押えるなど、健康上の効用も多くあります。

しかし、これらの効果だけが断食の目的でないことはもちろんです。これまで述べたとうり、アッラーがそれを命じられ、わたしたちはかれのみ心への敬虔な下僕として、この断食をするのです。

預言者ムハンマド（かれの上に平安あれ）は次のように言われています。

「ラマダーン月に断食し、アッラーの恩恵を求めるものは、過去の罪はすべて許される」「齋戒（断食）は、現世での不服従の行為と来世での業火に対する一つの盾である」



慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において

サウム(断食)

イスラミックセンター編著

二、ラマダーン(断食月)

ラマダーン月は、イスラーム歴の第九番目の月にあたりますが、イスラーム暦は月の周期をもとにした太陰暦であり、太陽の周期をもとにした太陽暦とは違います。アッラーはクルアーンの中で次のようにいっておられます。「ラマダーンの月こそは、人類の導きとして、また導きの明証正邪の基準のために、クルアーンが下された月である。それでなんじらのうち、この月家にいる者は、この月じゅう齋戒（断食）しなければならぬ。」（第二章雌牛 第一八五節）したがって、ラマダーン中には毎日が断食の日となります。

慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において

サウム(断食)

イスラミックセンター編著

三、みいつの夜(ライラト・ル・カドル)

預言者ムハンマド(かれの上に平安あれ)が、天使ジブリール(ガブリエル)をどうして、アッラーのお告げを最初にうけた夜をクルアーンでは「みいつの夜」(ライラト・ル・カドル)としています。聖預言者言行録(ハディース)によれば、ラマダーン月の最後の十日間のうちの奇数日の一日であるとされています。

クルアーンではこの夜のことについて、次のように述べられています。

「まことにわれはみいつの夜に、このクルアーンを啓示した。みいつの夜がなんであるかを、なんじに理解させるものは何か。みいつの夜は、千万よりもまさる。その夜、諸天使と精霊が、主の許しのもとに、よろずの神命をもたらして下る。暁の明けるまで、それは平安である」(第九七章 みいつ第一一五節)

預言者ムハンマド(かれの上に平安あれ)は、みいつの夜が訪ずれると、天使ジブリールは他の天使たちと降りてきて、立ったり座ったりして恵み深きアッラーをしのんで瞑想する人たちの祝福を祈られた」と言われたということです。

預言者の妻アーイシャは次のようにいっています。

「アッラーの使徒ムハンマド(かれの上に平安あれ)は、ラマダーンの最後の十日のあいだは、いつもより一層熱心にアッラーに帰依するために努力されるのが常でした」と。

サウム(断食)

イスラミックセンター編著

四、バドルの戦い

イスラーム教徒にとって、歴史上非常に重要な事件が、ラマダーンの最中に起っています。バドルの戦いは、ヒジュラ暦二年のラマダーン月十七日に行われました。最初はメディーナで組織されたばかりのイスラーム教徒の集団と、イスラームの敵であったメッカの多神教徒との間で争いが始まり、イスラーム教徒は三対一の劣勢で、しかも貧弱な装備のうえ戦闘の経験も持たなかったのです。

しかし、聖預言者ムハンマド(かれの上に平安あれ)のすぐれた指揮の下で、かれらは勇敢に戦いついに勝利はかれらの上に輝いたのです。

サウム(断食)

イスラミックセンター編著

五、イスラームカレンダー

イスラームの宗教上の儀式は、すべて陰暦をもとにしており、太陽暦でないのは注目すべきことです。これには大きな意味があって、例えばラマダーンを例にとってみると、陰暦では一年が三百五十四日ですから、太陽暦よりも十一日（閏年では十二日）短いことになります。

したがってラマダーン月は、春、夏、秋、冬と全部の季節に順番にめぐってきます。冬は日が短かくて、気候も寒いので断食はやりやすいのですが、夏は日が長い上に暑さのために断食は、他の季節にくらべて苦しいものとなります。

イスラーム教徒は、北半球、南半球のどちらに住んでいようとも、すべてのシーズンをとおして断食を行なうことになり、時には楽に、また時にはひどく苦しみがながら断食をすることになります。

しかし、もし断食がある特定のシーズンに決めてあったとしたら、北半球の冬は南半球の夏にあたるので、あるグループのイスラーム教徒は永久に楽な断食をやり、一方他の半球のグループの教徒達は、いつも苦しい断食を強いられることになったでしょう。

さらに新月は、砂漠の遊牧民も都会の居住者も、等しく見ることができるということも太陰暦の利点でしょう。

それは、暦を読むことができる者にも、まったく文盲の人々にも見ることができ、日附を数える精密な知識も必要ないのです。

また新月を見ること、特にラマダーン月の新月とその翌月、すなわちイード（断食明けの祭典）の月を見ることは、それ自体心に不思議な感動を呼び起します。

サウム(断食)

イスラミックセンター編著

六、断食の種類

A、教徒としての義務

ラマダーン中の断食は、あとに述べるいくつかの例外を除いて、すべてのムスリムの男女に課せられている義務（ファルド）です。ラマダン中に、もし断食をやれな

かった時には、後日これを埋め合わせしなければなりません。

B、義務でない断食

これはラマダーン月以外の特定の日に断食することであり、第十月（シャウワール）中の六日間、第一月（ムハッラム）の九日目、十日目および十一日目、第八月（シャアバーン）の十五日目などです。

これらの日の断食は、行なうほうが好ましいということで、預言者の行なった慣例（スンナ）ではありますが、すべてのムスリムに対する義務となってはいません。

C、個人的に行なう任意の断食

これは、自分の意志だけで随時行なう断食ですが、預言者（かれの上に平安あれ）も「なんじらは、務めを果すにも、それぞれ自分の立場に合わせてそれを行なえ」と言って、断食をあまり長期間やってはいけないと注意されています。

D、禁止事項

預言者ムハンマド（かれの上に平安あれ）は、イード・ル・フィトル（断食明けの祭典）とイード・ル・アドハー（犠牲祭）およびイード・ル・アドハーの後三日間の断食を禁じておられます。

サウム(断食)

イスラミックセンター編著

七、断食の時間

断食をする時間は、夜明け前（太陽の昇る約二時間前）から日没までの間です。

この時間内には、飲食や喫煙、および結婚している者は肉体関係を禁じられています。

さらに、口に入れたものを嚙んだり、のみ込んだり、または口や鼻から薬を体内に入れることも断食を破ることになります。

しかし、断食中であることを忘れて、無意識に飲食したり、何かを口に入れたり、香水、膏薬、化粧クリーム、外用薬の使用、歯を磨いて口をすすぐこと、唾液をのみ込むこと、体を洗うことなどは、断食を破ることにはなりません。

だが、正当な理由（病気、旅行、月経の徴候）がないのに、ほかのやり方で勝手に飲食や喫煙をして断食を破ることは、特定の日に断食をするという行為と意志を破るもので、重大な違反行為になります。

断食を破ったこの一日を埋め合わせるためには、六十人の人に食事を供するか、六十人の人に慈善をほどこすか、または自分で六十日間断食をするかしなければなりません。

また一方では、ラマダーン中の定められた日に断食をしなかった者は、たとえどんな理由があったとしても、後日に同じ期間の断食をしなければなりません。

サウム(断食)

イスラミックセンター編著

八、夕方の食事

陽が沈むとすぐに、軽い食事をとって、その日の断食を終了することになっています。

食事を始める前には、預言者（かれの上に平安あれ）の慣例にしたがって、次のように唱えることになっています。

「アッラーフンマ、ラカ・スムト、ワ・ビカ・アーマント、ワ・アラー・リズキカ、アフタルト、ビスミッ・ラーヒル・ラフマーニル・ラヒーム」

（アッラーよ、わたしはここに断食を行ない、主を信じ、主の食物をいただいて断食を終りました。仁慈あまねく慈愛深き、アッラーのみ名によって）

この夕方の断食明けを「イフタル」といい、その後でマグリブ（日没後の礼拝）をしてから各人の好きなように十分な食事をとってよいのです。

その時昼間に食事をしなかった分を埋め合せしようとして一度に食べすぎないように、注意しなければなりません。

この時間には、体が要求する水分や他の液体を沢山とるのが良いとされています。

サウム(断食)

イスラミックセンター編著

九、未明の食事

夜の明けないうちに、もう一度、食事をするのが普通ですが、その時にも「ビスミッ・ラーヒッ・ラフマーニル・ラヒーム」とアッラーのみ名を唱えて食事を始めます。

この食事は、東の空が白みはじめる暁の時刻より、二十分前に終了しなければなりません。つまり、日の出の時刻より、約一時間四十分前までに食べ終ることになります。

この食事は、スフールと呼ばれ、何を食べても良いことになっていますが、ふつう、あまり塩のきいたものや、強く味つけしたものを避け、たんぱく質を多く含んだ食物が昼間のエネルギーを保つのに良いと思われます。

夜明け前の食事（スフール）が終わったら、この日も一日断食をやり抜くという自分の意思を表明します。

たとえば、「おお、アッラー、主のみ名にしたがい、今日も一日断食を行ないます。主の恵みを賜りますように。」と唱えます。

もしその人が望むなら、食事をしてから暁（東の空の白み始める夜明け）までの時間を、クルアーンや何か他のイスラームの書を読んですごすのもよいことです。

東の空が白み始めたら太陽の出る前にファジュル（暁の礼拝）をアッラーにささげます。

サウム（断食）

イスラミックセンター編著

十、断食をしなくてもよい場合

次の人々は、断食をしなくてもよいことになっています。

(a) 断食をしたら、健康上重大な影響があると見られるような病人。その人達は、病気が治るまで断食を延期し、後日病気が回復してから、休んだ期間だけ断食をすればよいことになっています。

(b) 旅行中の者。家を離れて旅路にある者、または目的地に着いて数日中に帰路につくつもりを指します。

その者たちは、旅行中だけ特別に断食の勤めをしなくてもよいことになっていますが、旅行が終わったあとで、同じ日数だけ断食して、埋め合せしなくてはなりません。しかしクルアーンにも指摘されているように、旅行中でも、もし特に苦痛を感じないような場合には、やはり断食をしたほうがよいのはもちろんです。

(c) 妊娠中の女性や、幼児養育中の母親。かれらも後日同じ日数だけ断食して埋め合せしなければなりません。

(d) 月経期間中（最高十日間）または、出産後の休養期間中（最高四十日間）の女性は、断食しなくてもよいのですが、この期間がすぎたら、やはり同じ日数を断食して埋め合わせしなければなりません。

(e) 老人や虚弱体質のため、断食の義務の遂行に耐えられない者。かれらは断食の義務を免除されますが、もし余裕があれば、自分が断食しなかった日と同じ日だけ、少なくとも一人のムスリム困窮者に一回分として十分な食事か、それに相当する金銭を与えることになっています。この人達も、もし断食できるならば、ラマダーン月の中の一日だけでも断食をして、残りの日数を償うのがよいとされています。

(f) 思春期に達しない子供は、断食の義務を免除されています。

しかし、子供達が、その年齢に達しない前でも、ラマダーン月の数日だけでも断食するよう、子供達に奨励されています。

サウム(断食)

イスラミックセンター編著

十一、夜間の礼拝(タラウィー)

一日五回の礼拝とは別に、ラマダーン月中に行なわれる規定以上の礼拝（個人の任意による追加的なもの）つまり夜間の（イシャーウ）礼拝の以後に行なわれる特別の礼拝を行います。

この礼拝は八回、十回または二十回の単位（ラカート）に分れていて、二単位ないし四単位が、礼拝の一つのサイクルになっています。

この夜間の礼拝は、義務として課せられているものではありませんが、預言者の慣習に従うものであり、特にラマダーン月の最後の十日間は、これを実行するように強く勧められています。

サウム(断食)

イスラミックセンター編著

十二、断食明けの喜捨(ザカートとサダカ)

イスラーム社会では、貧困者が放置されないように気を配ることは、すべてのムスリムにとっての重要な務めであります。この考え方にもとずいて、人はだれでも、もし余裕があれば、断食明けの前か、断食明けの日の礼拝前に貧困者に何か施物をするように、求めています。

この慈善行為は、ザカート・ウ・フィトル、またはサダカト・ル・フィドルとして知られているものです。

聖預言者（かれの上に平安あれ）は、「ラマダーン中の断食も、もしそのあとでサダカの施しをしなくては、アッラーには認められない。」また「サダカは、断食をする者の齋戒の一つの方法である。」と述べられており、この際の金額は、少なくとも一定の代金に相当するものとされています。

サウム(断食)

イスラミックセンター編著

十三、ラマダーン中の善行

ラマダーンは、精神修養の月なので、人は通常の礼拝と断食以上の何かを行なうように要望されています。

夜間の礼拝とは別に、次のような事が勧められています。

(a) 聖クルアーンを読むこと。ラマダーン中に、少なくとも一回は、クルアーンのはじめから終わりまで完全に読破するよう努めること。また礼拝を規則的に行なうことは、言うまでもありません。

(b) 慈善行為をすること、断食の目的の一つは、飢餓や困窮とはどんなものかをムスリムに体験的に認識させることにあります。それゆえ、慈善の施しをすることは、断食の目的に強く繋がっていて、人は余裕のある範囲内で、出来るだけ多くの慈善をしなければなりません。

(c) 義務としての喜捨（ザカート）をすること。ザカートは、イスラームの第四の柱です。人は、ラマダーンの月に、必ずその年度のザカートを払うのがよいとされています。日本にいるムスリムの人で、ザカートを誰に渡してよいかわからない人は、後述の諸組織に連絡して下されば、クルアーン第九章（悔悟）第六十一節の啓示にしたがって、困窮者に分配します。

(d) 欲望を押え、人の誹謗や悪口をやめ、良いことをすることは、いつの場合でも望ましいことですが、ラマダーン中は特にそうすべきです。断食の精神と怒りの気持や他人の悪口とは、決して両立するものではありません。

サウム(断食)

イスラミックセンター編著

十四、断食明けの祭典

イード・ル・フィトル

断食月のラマダーンが終ると、イード・ル・フィトル（断食明けの祭典）を、次の月（シャウフルー月）の第一日目に行ないます。

イード（祭典）は、アッラーのみ教えにしたがって断食の務めをなしとげたことを感謝して祝う行事です。

午前中、日の出から正午までの間に祝賀の礼拝を行ない、六回から十六回まで、タクビール（アッラーフ・アクバルー：アッラーは、偉大なるの斉唱）をしながら、二単位の礼拝を捧げ、続いてイマーム（礼拝の主導者）がフトバ（説教）を行ないます。

礼拝に続いて、喜びと幸せの時がムスリムに訪れます。

ムハンマド（かれの上に平安あれ）は、「断食を行なう者は、喜びと幸せを二度受けるであろう。断食明けの時、断食が終わったという喜びと、最後の審判の日に、審きの主アッラーの前に立った時、自分が断食の務めを果たしていたことについての喜びの二つです。」と、述べています。

十五、アラビア語の重要語句と解説

- ・サウムあるいはスィヤーム：断食。イスラームの断食は、夜明け前に始まり、日没で終わります。夜間は断食をしないのです。
- ・ラマダーン：イスラーム暦の九月。ラマダーン月には、毎日断食を行ないます。
- ・スフル：断食月の夜明け前の食事のことです。
- ・イフタール：日没後、すぐ食事と飲食物をとって、その日の断食を終ることです。
- ・ライラト・ル・カドル：みいつの夜。ラマダーン月の最後の十日間のうち奇数日のある一日のことで、この日に預言者ムハンマド（かれの上に平安あれ）に最初の啓示が下されました。
- ・イード・ル・フィトル断食明けの祭典。ラマダーン月が終わったあとの祝賀と感謝の日です。イスラーム暦の十一月（シャウワール）の第一日に行なわれます。
- ・ザカート・ル・フィトル、またはサダカト・ル・フィトル：ムスリムの義務としての喜捨。これは一人一食分の食費に相当するもので、イードの日の前か、またはイードの当日の礼拝の前に貧困者や困窮者に与えられるものです。

神の預言者たち

イスラミックセンター編著

一、序章

●「使者」そして「預言者」の意味

アラビア語で「ラスール」とは、「遣わされた者」とか「使者」という意味で、「ナビー」とは「情報をもたらす者」とか「ニュースを布告する者」という意味である。我々は前者を「使者」、後者を「預言者」と解釈している。

宗教的にいえば、二つの語は「神の啓示によって与えられたメッセージを人々に（預言者ムハンマドの場合は全人類に）伝える人」という意味である。従って、イスラームで使われている「預言者」という言葉には、予言するとか、未来の出来事を予知するといった意味は含まれていない。

●クルアーンに記された預言者達

まことに、われは、それぞれの民に使者をつかわして「アッラーに仕え、邪神を避けよ」と命じた、（クルアーン第一六章三六節）

我々は、これまで世界中に多数の預言者がいたことを知っているが、このうちのごく少数の預言者しかクルアーンには書かれていない。

なぜならクルアーンには、次のように述べられているからである。

ある使者たちについては、先にわれはなんじに告げたが、ある使者たちはまだなんじに告げていない。（クルアーン第四章一六四節）クルアーンに出てくる預言者達は次の通りである。

アーダム

ハツド

イスハーク（イサアク）

ムーサー（モーゼ）

ヌーフ（ノア）

イブラーヒーム（アブラハム）

ヤアクーブ

ハールーン（アロン）

スライマーン（ソロモン）

イドリース

イーサー（イエス）

ズール＝キブル（エゼキル）

ムハンマド
サーリフ
ルート（ロト）
ユースフ（ヨセフ）
アイユーブ（ヨブ）
シュアイブ
イスマーイール（イスマイル）
ユースス（ジョナ）
ダーウード（ダビデ）
イルヤース（エリイジャ）
ヤフヤー
ザカリヤー

クルアーンやハディース（ムハンマドの言行録）から、我々はまたムハンマドが神に 使わされた最後の預言者であり、使者であることを知るのである。

●神の啓示の性格

クルアーンやハディースを読むと啓示は天使－神の命令を実行する精霊－を通じて、神の預言者たちに伝えられていることがわかる。

それは天使が人間の姿かまたは天使の姿で預言者達の前にあらわれ、神のメッセージを直接伝えるのである。唯一の例外はムーサー（モーゼ）の場合であり、この場合、神はムーサーに直接語りかけている（クルアーン第四章一六四郎参照）。この章では「啓示」という言葉は神が預言者達に伝達するこのようなやり方を意味するものとして使われている。

神の特性、審判の日の到来、死後の生命など、これら幽玄界の知識－啓示によって、預言者達が我々にもたらしたもの－には、はっきりとした真実の重みがある。一方、哲学者達の理論は、それがいかにもっともらしく見えようとも仮定に基づき、曖昧模 糊としている。それは、人間の限られた理解力が捉え得る一角にすぎないからである。

同じ理由で、預言者的な知識というのは、詩人、神秘主義者、先覚者、聖人などが直 感や靈感、神秘的な経験や霊的同化によって得たとされている知識とは性格も異なっているし、まったく比較にならないものである。

●預言者達の特徴

一、神の預言者達は人間であった。多くの人々はこのことを信じ難いものと考え、

この単純な事実を理解できないために道を誤っている。

導きが、かれらに下されたとき、人々の信心を妨げたのは、「アッラーはわしらと同じ一個の人間を使者としてつかわされたのか」と言ったからにはかならぬ（クルアーン第一七章九四節）

ここの部分において、人が誤りを犯しているのは、預言者達をペテン師だとみなして 彼等や彼等のもたらすメッセージを信じることを拒むか、預言者達を尊敬するあまり、超人的な存在または神の化身と考えてしまうかのどちらかであった。

二、神の預言者達は、自己の信念に忠実であり、徳行の模範であった。とはいえ、他の人間と同じように彼等もまた判断の誤ちを犯し、人間的な弱さも持っていた。ただ彼等は、神の命令に従い、その教えを忠実に例証している。クルアーンではそのこと について次のように言っている。

「およそ預言者は不忠実なことはありえない」（クルアーン第三章一六一節）

もっと詳しく言えば、特殊な預言者については、まことにイブラーヒーム（アブラハム）は一模範者であり、アッラーに服従し、純正な信仰であった。彼は偶像信者のたぐいではなく（クルアーン第一六章二一〇節）

ルートをばわれの慈悲にひたらせた。まことに彼は正しい者であった（クルアーン第二章七五節）

またイスマーイール、イドリース、およびズール＝キフルである。みんなよく耐え忍ぶ者であった。われはかれらをわが慈悲に浴させた。まことにわれらは正しい者であった（クルアーン第二章八五・八六節）

三、預言者の何人かは、神の許しを得て、特別な行為を行なったが、我々はこれを奇跡と呼んでいる。この奇跡は、それ自体ではメッセージの真実を証明するものではないが、時としてはメッセージが真実であることを示すために役立つことがある。

●歴史における預言者の役割

これまで様々な時代や国々に預言者が絶えず現われた。それは神がいつも人を導くこと、また現世や来世での人の運命に強い関心を持っているということのしるしである。人間の肉体的、生物学的な起源はいかにも世俗的なものであるが、クルアーンにこのことについて次のように述べられている、

われわれは土から、次いで一精滴からなんじらをつくり... (クルアーン第二二章五節)

かれがわれわれをつくった主な目的は神を崇拜させるためである (クルアーン第五章五六節)

クルアーンの中で述べられているこれら崇拜の概念は非常に広く、それは個人や個人相互間を問わず、人間の生活のすべての面を含んでいるのである。真の崇拜とは、神を愛し、子供が親に寄せるような絶対的な信頼を神に寄せ、神の命令に従い、社会正義と慈悲の心と人間相互間の協力という神の錠を確立するために努力し、一人の人間が他の者に暴政や圧政を強いることに反対し、人々に神の導きを受け入れるように呼びかけることである。イスラームとは、このような生き方に対し、神がクルアーンを通して与えた名称である。この生き方とは単なる信仰や敬神行為だけの生活ではなく、曇周の道徳と精神的価値を得るために、個人のみならず人間相互間の経済的、社会的、政治的、国際的な事柄における絶えざる努力を求めるものである。

クルアーンでは、イスラームとは神が人間のために定めた宗教〈生き方〉である、と我々に言っている (クルアーン第五章第四節参照)。これはイスラームが預言者ムハンマドが現われて始まったものではなく、最初の間が地上に現われた時、既にあつたということの意味している。

神が宇宙を創った時、かれはすべてのものに本性を与え、それに応じた指導を与えた。(クルアーン第二〇章五〇節)

自然界のものは、すべて神の指導〈それを我々は自然法と叫んでいる〉に従うようになっている。それはクルアーンにも述べられている。

天と地にあるものは、好むと好まざるとを問わず、ただかれに服従帰依し、かれに帰されるのである。

人間にも精神的資質と肉体的資質がある。人間の身体に限っていえば、それは肉体的生物学的な世界の一部であるわけだが、同様に精神や道徳の世界でも、神が人間のために定めた自然な道〈直き道〉は存在する。しかし人間は、生活のこの面において選択の自由を認められている (クルアーン第二二章三一節参照)。そして、これこそが人間を他の生物と区別しているものなのである。従って、この選択の自由には大きな責任が伴うことになる。このため神の信頼に答えられなかった結果は、現世を超えて来世にまで影響を与えることになるため、人間への挑戦は非常に大き

なものとなるのである。

人間の資質の一部として、神は人に均整のとれた肉体を与え（第九章四節参照）、優れた知的能力（第二章二節）と、地上のよるずのものを支配する力を授け（第二章六五節）、人間の魂に神への信仰心を植えつけ（第七章一七二節）、また人に知識や真実や美を愛する心を授けた。神は自分の霊を人間に吹き込み、天使よりも人間をより優れたものとしたのである（第三十八章七一・七二節）。

最後に神は、許される範囲内で正しい選択ができるよう、正しい生き方についての啓示をもたらし、道に背いて生ればどのようなことになるかを警告するため、神の使者を人間の中から選び出しヌーフからムハンマドに至るまで、すべての預言者は自らの考えからではなく、神から与えられたイスラームのメッセージを説いている。

彼等は神が唯一であると宣言したり、人々に神に帰依するよう呼びかけるだけでなく、自らの生活で模範を示し、善行、社会正義、兄弟愛、人間相互間の協力といった神の定めた淀を打ち立てるために努力したのである。謙虚な者、貧しき者、迫害されている者、真実の追求者、それに正直な者が預言者に従う最初の者であった。一方、傲慢な者、権力を握る者、富める者、快樂を追う者、盲目的に信仰や習慣を受け入れる者は預言者達に反対した（第七章五九・九三節参照）。

これら多くの預言者達の中に、イブラーヒーム、ムーサー、イーサーがいる。イブラーヒームの功紋は、神の唯一性を宣言したことである。イブラーヒームの時代からこのかた、人類の崇拜と献身と最も強い愛情に値するのは神のみである、ということ人間は決して忘れることはなかった。

ムーサーの後継者は、彼のもたらしたメッセージの一部は守っていたが、やがて彼等は多くの煩わしい細かな規制を付け加え、神の神聖な淀を単なる儀式へと落としめ、神の導きと後に人間が付け加えたものを混同してしまい、どれが人間の作ったもので、どれが神が創ったものかを区別することができなくなってしまった。彼等はまた神の導きが自分達だけへのものと考え始めるようになった。一方、イーサーの後継者達は、神のメッセージが人類すべてに普遍のものであることを理解していたが、イーサーを神の地位に押し上げることによって、彼のメッセージの中心となるべき真実—神の唯一性と尊厳—を傷つけてしまったのである。

最後に、記録された歴史を見てもはっきりとわかるように、神は大いなる慈悲心を示して、最後の使者ムハンマドを送られたのである、そして、それ以後のすべての世のために、最後の書であり、完成された書である神の声明書すなわちクルアーンを人類へ与えられたのである。人々の中から一人の使者が選ばれ、その導きを伝え、

解説し、それらを自らの生活の中で例証し、それに従って行動しながらイスラームを世界に広めんとする一つの共同体が結成された。

なんじらイスラーム教徒は、人類につかわされた最良の教団である。なんじらは正しいことを命じ邪悪なことを禁じアッラーを信奉する（クルアーン第三章一〇節）

真理は、既にそれ以前から人類に与えられていたのであるが、それは達成不可能な理想として残されたままになっていたのである。

そしてムハンマドの出現によってそれらは確固たる現実となったのである。つまり一団の人々が兄弟愛や親切心、社会正義、道徳律、信仰といった神の定めに従い「アッラーのお言葉を最高に上げたもう（クルアーン第九章四〇節）」ように生命と財産をあげて努力したのである。かくしてイスラームはイーサー（イエス）の後、七世紀を経ムハンマドの時代をもって、人類の歴史の中で逞ましく歩み始めた。

神の人類への導きは、クルアーンの中ですべて完全に記述されている。ここに神の最後の預言者が現われ、そして去っせいった。しかし、神の言葉を最高のものとしてとらえるように努力している者と自らを神と責任のない者と考え、人間の作った理論や法律、慣習にしがみついている者との闘いは今なお続いている。

預言者たちの使命について、その理解を深めるためにこの章では人類の歴史に大きな影響を残した三人の預言者、イブラーヒーム、ムーサー、イーサーの生涯について述べてみたいと思う。ここでの記述はクルアーンの章節に基づき、預言者達の生涯の中で特に道徳的精神的な意味を持つ部分を強調してみることにした。読者は、これら初期の預言者達の生涯におきた多くの出来事が、預言者ムハンマドの上におきた出来事と非常に似かよっていることに気付かれることであろう。ムハンマドとその高弟達は、迫害が侵略の戦いに直面した時、それまでに他の預言者の上におこった出来事を知り、大いに慰められ力付けられたのである。

慈悲あまねく慈愛深きアッラーの御名において

神の預言者たち

イスラミックセンター編著

二、イブラーヒーム（アブラハム）

アッラーに真心こめて服従帰依し、善い行ないにいそしみ、イブラーヒームの純正な信仰に従う者より、教えの上ですぐれた者があるか。アッラーはイブラーヒームを親しい友とされたのである。（クルアーン第四章二一五節）

イブラヒームの生涯の出来事は、クルアーンの各所に記述されているが、中でも次の各章に多くのことが記されている。クルアーン第二章二一四～一三五節、第六章七四～八三節、第二章六九～七六節、第一四章三五～四一節、第一五章五一～六〇節、第一九章四一～五〇節、第二一章五一～七一節、第二六章七〇～八七節、第二九章一六～二五節、第三七章八三～一一一節、第五章二四～三七節。

●幼年期

アザールの息子イブラーヒームは、チャルディアンズ（イラク）の地、ウルの街に約四千年前に生まれた。当時、神がそれまでの預言者を通じて与えた導きは忘れられ、人々は偶像崇拜の日々を送っていた。そのような時代的背景下にイブラーヒームは生まれ育ち、神によって使者として選ばれた。

若い頃からイブラーヒームは、偶像や天体を崇拜することの誤りと無益さについて、父や家族の者や周囲の人々に説きはじめていた。イブラーヒームは彼等と議論して訴えたのだが、彼等の答えは「我々は親の代から、これらの像を崇拜しているのを見てきたのだ」というものであった。

クルアーンの第二一軍五一節～七〇節には、イブラーヒームが人々の留守中に、偶像類をその最も大きなもの一つを除いて、粉々に砕いた仔細が述べられている。人々が帰って来て彼を問い詰めた時、イブラーヒームは次のように答えた。「その偶像が口をきけるなら、偶像にきいてみるがいい……」

彼等は偶像崇拜が意味のないことであると気づき、恥じたのだが、自分の生き方に固執する人間の常として、彼等は自分の誤ちを認め、生き方を変えるよりも真実を覆いかくす方を選んだのである。

彼等の対応は「イブラーヒームを火あぶりにして、我々の神を守れ」というものであった。しかし、神はイブラーヒームを救い「その時、われは『火よ冷たくなれ、イブラーヒームの上に平安あれ』と命じたのである、

●イスマーイール（イスマイル）

後年イブラーヒームは、神の命を受けて故郷を去り、カナン（パレスチナ）の地に行った。彼の供は妻のサラと、預言者でもあるルートと彼の召し使い達であった。何年か後に、彼等はネゲブに移り、そこからルートはさらにソドムへと移住した。イブラーヒームは既に年老いており、子供はなかった。そこで彼の妻の提案により、彼女の召し使いの一人ハーヰルを自分の妻とした。彼の祈りにこたえて、神はハーヰルにできた息子を彼に授け、その子にイスマーイールという名を与えた。その後神は、イブラーヒームにハーヰルと男の赤ん坊を連れアラビアのある地へ行き、そこに彼等を置き去りにするよう命じた。イブラーヒームはバータの谷間に彼等を同行し、後にメッカとなった場所に置き去りにした。谷は乾燥しており、一本の草木もなかった。すぐにハーヰルと子供は水の欠乏に直面し、イスマーイールは喉の乾きのため泣き始めていた。母親は水を求めて周囲の丘の間を走り、涙を流して神に助けを乞うた。力つきて最後に彼女が赤ん坊の所へ戻ってみると、子供が踵で掘った地面から水が湧き出ている。この泉はザムザムの泉と呼ばれ、今日に至るまでこんこんと水が湧き出ている。この故事にちなんだサアイの儀式は、ハーヰルが水を求めてサファとマルワの二つの丘を往き来したことを記念して、バッジの行事の中に取り入れられている。

●生費の試練

やがてアラビアの多くの部族がバータの谷にやって来ては定住し、イブラーヒームの家族と供に生活をはじめた。イブラーヒームは彼等の家々を何度も訪問した。イスマーイールが青年となった時、イブラーヒームは一人息子イスマーイール（イスハークはこの時まだ生まれていなかった）を神への生食として捧げた夢を見た。しかも彼はこの夢を三晩続けて見たのである。イブラーヒームはこの出来事を神の命令と受けとめ、息子イスマーイールに話し意見を求めた。イスマーイールはすぐに父の意見に従い、身を捧げることにした。しかし、それは神がイブラーヒームの信仰と神への献身の意志を試したものだということがわかり、一匹の仔羊が身代りとして生贄として捧げられた、このようにして神は、それ以後、偶像崇拜者が実際に行っていた人間の生費をはっきりと禁じたのである。このイブラーヒームとイスマーイールの神への献身を記念して世界中のムスリムたちは、仔羊、仔牛、またはラクダを殺し、その肉を友人や親類や貧しい人々と分け合い、イード＝ル＝アドハ（犠牲祭）を祝うようになったのである。

●カアバ神殿の建設

イブラーヒームはイスマーイールと共に、カアバ神殿すなわち神を崇うために建てられた最初の建造物をメッカの谷に築いた。その時イブラーヒームとイスマーイールは次のように祈ってカアバ神殿の礎えを定めた。主よ、わたしたちから、この奉仕を受け入れて下さい。まことにあなたは全聴者、全知者であります。

主よ、わたしたち兩人をあなたに服従帰依する者（ムスリム）にして下さい。またわたしたちの子孫をも、あなたに服従帰依する衆にして下さい。わたしたちに祭儀を示し、哀れみをたれたまえ。あなたはたびたび許したもう方、慈悲深い方であられます。（クルアーン第二章一二七～一二八節）

●イスハークの誕生

その後、イブラーヒームは妻サラとの間にもう一人の息子が生まれるという神よりの吉報を受け、その子をイスハークと命名した。サラはこのことに驚いて叫んだ。「私はとても年若い、夫も老いているのに、どうして子供を生むことができるのでしょうか、これはなんという不思議な出来事でしょう」

神は自ら欲するものを創りたもう。サラは老年になってからイブラーヒームの息子を生んだ。旧約聖書の創生記によれば、イブラーヒームは一七五才で死んだと記されている。その全生涯を通して、イブラーヒームは後世への正しい模範であり、彼の神への献身は何よりも優れていた。

●イブラーヒームの性格

クルアーンにはイブラーヒームの神への献身とその高潔な人格、そして信仰の純粹さを次のように述べられている。

まことにイブラーヒームは模範者であり、アッラーに服従し、純正な信仰を持った。かれは偶像信者のたぐいではなく、かれは、かれを選び、直き道に導いた主の恩恵を感謝した。われは現世において、かれに幸福を授けた。来世においても必ず正しい人びとのうちにはいるであろう。（クルアーン第一六章一二〇～一二二節）

まことにイブラーヒームは、しんぼう強く、心の優しい、不断に改悟して主に返る者であった。（クルアーン第二章七五節）

かれ（イブラーヒーム）が健全な心で、かれの主に来たときを思え。（クルアーン第三八章八四節）

自らの魂をそこなわぬかぎり、たれがイブラーヒームの教えにそむこう。まさにわれは、この世においてかれを選んだ。来世においてもかれは必ず正義者のひとりである。主がかれに向って「服従帰依せよ」と仰せられたときを思え。かれは「わた

しは、よろず世の主に従従帰依し奉る」と申し上げた。(クルアーン第二章一三一节)

●イブラーヒームの教え

預言者となる前からイブラーヒームは、礼拝—偶像の他に太陽や月、星への礼拝—の目的について、常に不審を抱いていた。最初から彼は偶像を否定していた。長い冥想の後、健全な彼の精神は、人は自分達の創造立だけを敬まい、従うべきであるとの結論に達した。しかし、すべてのものを創りたもうたもの、そしてその主は誰であろうかと彼は思い悩んだ。

クルアーンの中には、神の唯一性について次のように述べられている。

イブラーヒームがその父アザールに、「あなたは偶像を神だとなさるか。まことにあなたと

あなたの衆と、明らかに誤っていると考える」と、言ったときを思え。

われはこのように天と地の王国をイブラーヒームに示し、それでかれは悟りがひらけてきた。

夜の暗黒がかれをおおうとき、一つの星を見た。かれは言った「これがわたしの主である」と。

だが星が沈むにおよび、かれは「わたしは沈むものを好まない」と言った。

次いでかれは日がのぼるを見て、言った「これがわたしの主である」と。だがそれが沈むに

および、かれは「わたしの主がわたしを導かれないなら、わたしはきっと迷った衆のたぐいに

なるであろう」と言った。

次いでかれは太陽がのぼるを見て、言った、「これがわたしの主だ。これは偉大である」と。

だがそれが沈むに及んで、かれは言った「わたしの人ひとよ、わたしはあなたがたが、主に配

する者と絶縁する」。

「わたしは天と地をつくりたまえる、かれに端正に顔を向けて、純正に信仰し奉る。

わたしは多神教徒のたぐいではない」。(クルアーン第六章七四～七九節)

やがて神はかれを人々への使者に任じた。み使いになる前から恐れを知らず、邪教と闘っていたイブラーヒームであったが、いまや新たな熱意をもって、自分の父や周囲の人々と偶像崇拜の無意味さについて議論し、比類ない唯一無二の神に従従し、いつも神のことを心にとめ、徳の高い人間になるようすすめた。

われは先にイブラーヒームに、方正な行いを授けた、われはかれをよく知っている。
かれが父とかれの人びとに、こう言ったときを思え、「あなたがたが崇拝する、
これらの偶像は何ものであるか」。

かれらは言った「われらは祖先がそれらを崇拝するのを見た」

かれらは言った「おまえは真理をもたらしたのか、それとも戯れるものなのか」

かれらは言った「そうではない、あなたがたの主は、天と地の主、無から天地を創
造された方

であられる。そしてわたしはそれに対する証人のひとりである」。

(クルアーン第二章五一～五六節)

また、イブラーヒームをもわれは救った、かれがその民にこう言ったときを思え「ア
ッラーに仕え、かれを畏れまつれ。それはあなたがたのために最もよい。もしあな
たがたが理解するならば」。

「あなたがたはアッラーをさしおいて偶像を拝し、虚偽をねつ造する。あなたがた
が、アッラーをさしおいて拝するものたちは、あなたがたを給養する力はない。そ
れで、アッラーから糧（かて）を請い求め、かれに仕えかれに感謝しまつれ。かれ
に、あな ながたは、帰されるのである」。

あなたがたが真実を拒んでも、まことにあなたがた以前の諸世代も拒んだ。使者と
しては、ただ公明に伝道するのみである」。(クルアーン第二十九章一六～一八節)

アッラーがイブラーヒームに、王権を授けたまえることから、主についてかれと論
議した者を、なんじらは考えないか。イブラーヒームが「わたしの主は、生を授け、
また死を賜う方だ」と、言ったとき、かれは「わしも、生を授け、また死を与える」
と 言った。イブラーヒームは言った「アッラーは、太陽を東から登らせたもう、そ
れでおまえは、それを西から登らしめよ」と。そこでかの不信者は当惑してしまっ
た。アッラーは不義を行う民を導きたまわぬ。(クルアーン第二章二五八節)

そして、これがイブラーヒームがかれの息子達に残し、イスラーム教徒のわれわれ
に 今日まで伝っている遺産である。

「わたしの子らよ、アッラーはおまえたちのために、この教えを選びたもうた、それ でム
スリムとならずに、死んではならぬぞ」。(クルアーン第二章一三二節)

神の預言者たち

イスラミックセンター編著

三、ムーサー(モーゼ)

そしてムーサーには、じきじきにアツラーは語りかけたもうた。(クルアーン第四章 一六四節)

ムーサーの生涯における活動は、クルアーンの多くの章節に述べられているが、次の項が主である。第七章一〇三～一五六節、第一〇章七五～九二節、第一八章六〇～八二節、第二〇章九～九八節、第二六章一〇～六九節、第二八章四～三五節、第四〇章 二三～四六節、第四三章四六～五六節。

●歴史的背景

ユースフ(イブラーヒームのひ孫であり、預言者の一人)と彼の両親、兄弟とその家族がエジプトに住みついて約四百年が経った。彼らの子孫であるイスラエル人(預言者でもあるユースフの父ヤアクーブの子孫)は人口が増えた。ヤアクーブには十二人の息子がおり、イスラエル人はこの息子達の血筋により一二の部族に分けられた。

エジプト王(ファラオ=ラムゼー二世<B・C 一三〇〇～一二三四>)は大変な暴君であった。王、議会、僧侶達は一般市民、特にイスラエル人に対し苛酷で、しきりに迫害を加えた。ファラオや彼の顧問は、イスラエル人の反乱を恐れ、イスラエル人を奴隷の身分として扱い、重労働に就かせ、手に余るほどに仕事を増やしていった。そして、ついにはイスラエル人の増加を恐れたファラオは、部下に命じ、イスラエル人に生まれた男の子をナイル河に捨てたのである。

●ムーサーの幼年期

以上がムーサーが生まれた当時のエジプトの社会的状況である。神の導きにより、ムーサーは母親の手により数ヶ月の間かくまわれていた。しかし、そこも危なくなると、母親はムーサーを草の籠に入れ、ナイル河へと流した。母親は娘ミリアムに籠の後をつけさせ、何が起るか見とどけさせた。

河を少し下ったところで、ファラオの妻が偶然この籠を見つけて水から拾い上げた。中に可愛い男の子を発見した彼女は、宮殿に連れて帰り、ファラオの反対を説得し、命を助けたばかりか自分の養子とした。そこで、この子の世話をする女が必要となった。その時ムーサーの姉のミリアムが前に進み出て、こう言った。

あなたがたに、かれを育てる家人をお知らせしましょうか、かれにねんごろに付き添う者であります。こうしてわれは、かれをその母に返し……(クルアーン第二十八章一三節)

このようにして神の導きにより、ムーサ、はファラオの家で育てられた。ファラオの家族の一員として成長したムーサ正は、イスラエル人に対する同情心を母親から受け継いだことは想像に難くない。

ある日、ムーサーが街を歩いていると、エジプト人とイスラエル人が喧嘩をしているのに出くわした。イスラエル人が彼に助けを求めた。ムーサーがエジプト人を一撃すると、エジプト人は偶然にも死んでしまった。ムーサーは大いに嘆き悲しみ、声を出して神に許しを乞うた。

「主よ、まことにわたしは魂をそこないました。どうかわたしをお許し下さい」。それでアッラーはかれを許したもうた。まことにかれは寛容者、慈悲者であられる。(クルアーン第二十八章一六節)

翌日、この事件は街中に広まった。復讐に燃えムーサーを殺そうとする者達は、彼を捜し歩いた。このことを知ったムーサーは、西アラビアのマディアンへと逃れた。そして、彼が羊の水飲み場で休息をとっているとき、少し離れた場所に二人の娘が羊の群の中にいるのを見て、ムーサーは荒々しい羊飼いの男達の中をかきわけ、順番を待っていた娘の羊に水を与えた。その後、彼は日陰に戻り神に祈って言った。

主よ、あなたがわたしにお授けになる、何でも善いものが欲しゅうございます。(クルアーン第二十八章二四節)

しばらくすると、娘の一人が彼のところへ来て、父親のところへ来てくれるよう恥かしげに言った。ムーサーは彼女の後について行き、彼女の父親に自らの身の上話をした。大いに同情した父親は、娘の提案により二つの申し出をした。それはムーサーが父親のもとで働き、もし八年以上働いてくれるなら、娘の一人と結婚してはどうかということであった。ムーサーは喜んでこの申し出を受け入れた。

●使者への呼びかけ

顧用期間を務め終えた後、ムーサーは家族と共に他の場所へと旅立った。旅の途中、彼は山の向うに火を見た。

かれは家人に言った、「おまえたちは待っておいで、わたしは火を認めた、あそこからおまえたちに消息を持って来よう、または火把(ほだ)を持ち返って、おまえたちを暖めよう」。

だがかれがそこに来たとき、谷間の右かわの、祝福された地にある、一本の木から声がして、「おおムーサーよ、まことわれは、よろずの主、アッラーであるぞ」。

「さ、なんじの杖を投げよ」。するとかれはそれがへびのように動くのを見て、踵を返して逃げ、後も見なかった、(その時また声がして仰せられた)「ムーサーよ、近寄れ、そして恐れるな、まことになんじは、かたく守られている者である」。

「なんじの手をふところに差しこめ、なんのさわりもないのにそれは白くならう。恐れにさいしては、腕をなんじの両わきにしめつけよ、それらは、なんじの主からの、ファラオとその首領たちに対する、二つのしるしである、まことにかれらは、反逆の民である」。(クルアーン第二八章二九～三三節)

神はそれからムーサーに彼の使命を伝えた。ムーサーはファラオの許に行き、天地の創造主に服従し、イスラエルの民を奴隷から解放するよう説かねばならなかった。

ムーサーは彼の弟ハールーン(アロン、預言者の一人)を助手にするよう神に頼んだ。ハールーンは弁舌にたけていたからである。(ムーサーには子供の頃、真赤に燃える炭火で舌を火傷し、言語障害があったという伝えがある)。神はムーサーの要望をきき入れて言った。

それでなんじとその兄弟は、わしのしるしを携えて行け、そしてわしを念ずることを怠ってはならぬ。

なんじら両人はファラオに行け、まことにかれは高慢非道である。

しかしかれに、ものやわらかな説き方で語れ。だぶん訓戒を受け入れ、または主を畏れるであろう。

「それでなんじら両人は行って、かれに言え、まことにわたしたちは、あなたの主の使者である。それでわたしたちと一緒に、イスラエルの子らを釈放し、かれらを苦しめてはならぬ。まことにわたしたちは、しるしを携えてあなたの主か

ら来た者である。お導きに従う者は、平安である」。(クルアーン第二〇章四二～四四・四七節)

このようにして、彼等はファラオの許に行った。ファラオは「おまえたちの主はたれであるか、ムーサーよ」と言った。

かれは言った「わたしの主こそは、それぞれのつくられたものに、姿や資質その他を 賦与され、さらに指導を賜う方であられる」。

「かれは、大地をあなたがたの床(ふしど)とされ、あなたがたのため、その上に道を開き、また天から雨を降らせたもう。」(クルアーン第二〇章四九～五〇、五三節)

こうしてムーサーは、神の唯一性を説くメッセージをファラオに伝え、イスラエル人を解放しようとした。だがファラオは「もしお前が、私以外の者を神と考えるのなら投獄する」と言って脅した。神はそこで一連のしるしとして、様々な災害を起した。これはファラオをはじめ、人民達を苦しめたので、ついにファラオはムーサーの指揮のもとイスラエル人達のエジプト出国を認めた。

われはムーサーに黙示して「わしのしもべと共に夜に旅立って、イスラエルのために、海の中にかわいた道を打ち出し、追いつかれることを心配せず、また恐れてはならぬ」と命じた。

そこで、ファラオは、その軍勢をひきいて、イスラエルを追ったが、水が、かれらを完全に水中に沈めおおってしまった。

こうしてファラオはその民を迷わせ、正しく導かなかったのである。(クルアーン第二〇章七七～七九節)

●荒野の生活

荒野の生活については、クルアーンの各所、特にクルアーン第一章五一～八三節、第七章一三八～一六二節、第二〇章八六～九八節に述べられている。

神の導きによってムーサーは人々をシナイ半島の荒野に連れて行った。旅は困難をきわめた。水は乏しく、食物は足りず、いつ死んでしまうかわからない状態であった。そこに不平、不満、内部闘争、ムーサーに対する反抗があり、信仰の欠如していた時期でもあった。なかでもムーサーが山へ行き、四十日

そこに閉じこもり神の十戒を受けた時、イスラエル人達はエジプトで馴じんでいた偶像崇拜に戻ってしまった、ムーサーの留守をあずかる指導者である弟ハールーンの反対を押しきり、彼らは金の装飾品をつぶし、牛の像をつくってそれを崇拜した。しかし、神の助けと導きは下るのである。それは水と食物(樹液とうずらの群)と、人々が生きるべき道德律であった。

イスラエルの子らよ、われがなんじらに与えた恩典と、わが啓小を万民に先んじて下したことを念え。

そしてわれが、なんじらをファラオの徒党から救ったときを思え、かれらはなんじらを悪い刑に服させ、なんじらの男児を殺し、女児を生かしておいた。その中にはなんじらの主からのきびしい試練があった。

またわれは、なんじらのために海を分けて、なんじらを救い、なんじらが見ている前で、ファラオの徒党をおぼれさせたときのことを思え。

また、われが四十夜にわたり、ムーサーと約束を結んだときを思え、その時なんじちはかれのいない間に、子牛を拝し、不義を行なった。

それでも、その後われはなんじらを許した。おそらくなんじらは感謝するであろう。

またわれがムーサーに、経典と正邪の識別(フルクアーン)を与えたことを思え、おそらくなんじらは、導かれるであろう。

われは雲の影をなんじらの上におくり、そしてマンナとウズラとを下し、「われが授ける善いものを食べよ」……

またムーサーがその民のために、水を求めて祈ったときを思え。われは「なんじのつえで岩を打て」と言った。するとそこから、十二の泉がわき出て……

なんじらが「ムーサーよ、われらは、一色の食物には耐えられないから、地上に産するものを、われらに賜わるよう、おまえの主(ヤハ)に祈ってくれ。それは野菜・きうり・穀物・れんず豆と玉ねぎ」と、言ったときを思え。かれは言った「おまえたちは、良いものの代りにつまらぬものを求めるのか。それならおまえたちの望むものが、求められるような、どの町にでも降りて行くがよい」。……(クルアーン第二章四七～六一節)

このようにして、四十年以上にわたって神の導きと助けを得たムーサーは、奴隷であった多くの人々を神を畏敬する民へと解放したのである。ムーサーと供に出エジプトを果した人間達は、最後まで優柔不断で憶病であった。それゆえ神は、彼らが以前約束していた土地に入ることを拒んだ。

またムーサーが、己れの人びとにこう言ったときを思え。「わたしの人ひとよ、おまえたちに賜ったアツラーの恩恵を心に銘せよ……

「わたしの人ひとよ、アツラーがおまえたちのために定められた、聖地にはいれ、きびすを返して退いてはならぬ、そうしたらおまえたちは失敗者になるであろう」。かれらは言った、「ムーサーよ、まことにそこには、強大な民がいる、かれらが出て行かなければ、わしらは決してそこに、はいることはできない。もしかれらがそこから去ったならば、わしらはきっとはいるであろう」。

アツラーの恩恵に浴して、主を畏れるふたりが言った、「正門からは行ってかれらに当たれ。一たびはいれば、まことにおまえたちが勝利者であろう。おまえたちがもし真の信者ならば、アツラーに信頼しまつれ」。

だがかれらは言った、「ムーサーよ、まことにかれらがそこにとどまる間は、決してわしらはそこに、はいることはできない。おまえとおまえの主は、行ってふたりに戦え、わしらはここにすわっているであろう」。

かれは申し上げた「主よ、まことにわたしは、わたし自身と兄弟のほかは制御できません。それでわたしたちを、この反逆の衆から離して下さい」。主は仰せられた「そのためにこの国土は、四十年の間かれに禁じられよう。かれらは地上をさまようであろう。なんじは反逆の民のために悲しんではならぬ」。(クルアーン第五章二〇～二六節)

ムーサーはいまや老い、そして彼の任務は完了した。旧約聖書の出エジプト記によれば、彼は一二〇才で死んだ。彼の死後、イスラエル人はついにパレスチナの地を踏みしめた。

●トーラの問題

三九冊あるユダヤ教の経典の中で、巻頭の五書一創生記、出エジプト記、レビ記、反数記、申命記一は、ユダヤ人にトーラ(律法)と呼ばれている。この五書は別名1ーペンタチュークとか＝モーゼ(ムーサー)とも呼ばれている。

しかし、ムーサーがこれらの書を書いたのではなく、またムーサーに下った啓示(クルアーン中にはタウラーと述べてある)もユダヤ教のトーラと全く同じものではない。(同様に、クルアーンの中でのダーウードへの啓示と旧約聖書中のダーウードの詩篇も同じものではない。)クルアーンは言っている。

災いあれ、自分の手で経典をしたため、ささやかな代償を得るために「これはアッラーから下ったものだ」と言う者に。(クルアーン第二章七九節)

神の預言者たち

イスラミックセンター編著

四、イーサー (イエス)

童子を人びとへのしるしとなし、またわれからの慈悲とするため……(クルアーン第一九章二一節)

イーサーに関する記述はクルアーンの次の章節にある。第三章三五～五九節、第四章一五七～一五九節、第五章一九、四九、七五、七八、一一三、一二一節、第六章八五節、第九章三〇節、第一九章一～三五節、第二二章五〇節、第四三章五七～六四節、第五七章二七節、第六一章六、一四節。

●歴史的背景

紀元前六一二年、パレスチナはローマに征服された。当時のローマ皇帝は、国益に反しない限り、被征服者の生活に干渉せず、宗教の自由、旅行の自由を保障していた。ユダヤ人はどこの地にでも住むことができ、特にジュディアではユダヤ人の意志は尊重され、ユダヤの法律を確立するため、ユダヤ教徒の僧侶による諮問委員会が設立された。

法の熱愛と献身がユダヤ教内部の統一要素であったが、この法は「モーゼ(ムーサー)の法律」より相当多くのものを含むようになった。ムーサーの伝承や他のユダヤの預言者、ラビ、法学者などによる解釈や説明、儀式の細目などの全てがユダヤ法典の一部となったのである。

イーサーの時代、ユダヤ人の間に多くの宗派があった。トーラの権威や寺院の生食の儀式に異議を唱える者はいなかったが、信仰の教義を日常生活において、どのように解釈するかについて各派の相違が生じた。サドシー派とパリゼ派が二大宗派であり、イーサーの説法はこの二つの派に向けられている

ものが多い。なぜなら、彼等は精神を欠いた法の戒律の実践を強調した結果、宗教生活に真摯な心と謙譲の欠けた、盲目的な形式主義を作り出していたからである。イーサーはさらに、彼らが法の詳細部に至るまで堅く守っているにもかかわらず、彼らの宗教的遵奉の多くは、偽善による行為であり、神のためというより、他人に見られ、ほめられるために行なわれていると指摘した。

●イーサーの幼年時代

イーサーの母マリアはハールーンの子孫、イスラムの長女であった。マリアが生まれる前、母親は生まれてくる子を神への奉仕のために捧げた。少女の頃マリアは預言者であり、僧侶でもあった洗礼者ヤフヤーの父ザカリヤの保護の下におかれていた。神のマリアに対する御苦げとイーサー生誕の話は、非常に感動的にクルアーンの中に述べられている。

そのときわれは、わが精霊(天使)をつかわし、かれはひとりの立派な人間の姿でかの女に現われた。

かの女は言った「わたしは仁慈者に対し、あなたからお守りを願います。もしあなたが、もしあなたが、主をお畏れならば(わたしに近寄らないで下さい)。」

かれは言った「わたしは、純潔な童子をあなたに賜わる知らせのために、主からつか わされた使者にすぎない」。かの女は「いまだかつて、人がわたしに触れません、またわたしは不貞でもありません、どうしてわたしに童子がありましよう」と言った。

かれは言った「そうであろう。だがあなたの主は仰せられる、「それはわしにとって は容易なことである。それで、童子を人びとへのしるしとなし、またわれからの慈悲とするためである。それはすでに神命があったことである」。

こうして、かの女は童子をはらんだので、遠隔の所に引きこもった。分娩の苦痛のために、かの女はナツメヤシの幹におもむき、かの女は「ああ、こんなことになる前に、わたしは無きものになり、忘れられ、忘却の中に消えたかった」と言った。

そのとき(声があつて)かの女を下の方から呼んだ、「悲しんではならない、主はあなたの足もとに小川をつくられた」。

「またナツメヤシの幹を、あなたの方に揺り動かせ、新鮮な熟したナツメヤシの実が あなたに落ちよう」。「食べかつ飲んで、あなたの目を楽しませよ……
(クルアーン第一九章一七～二六節)

かくしてイーサーは処女の母から生まれた。これは神は、神が望むものは意のままに 創りたもうという表示であり、ここには神性についての暗示は含まれていない。母親のサラが高齢の時に生まれたイスハークのことを思い浮べてみるとよい。

後にマリアは、ダーウードの子孫である大エユースフと結婚し、イーサーの他にも子 供をもうけた。イーサーは長男としてユースフから大工の技術を習い、父の死後は家族の生計の柱となったことは想像できる。イーサーは献身的な息子として、家族の世 話をする労苦を母と分かち合った。

「またわたしの母に孝養を尽くさせ、またわたしを高慢な不幸の者になさいません」。(クルアーン第一九章三二節)

大工としてのイーサーは日々の労働を通して隣人達との関係を深め、彼らと喜びと悲 しみを分かち合った。この事は彼の後年の多くの寓話の中にも見受けられる。

クルアーンは、イーサーがまだ幼い時期に神から靈感を受けたことを書き記している 。そして彼は家庭や神殿において、自らの民族の宗教的伝統へと魅了されていくのである。主は経典と英知と律法と福音とを、かれに教えたもうた。
(クルアーン第三章 四八節)

●洗礼者ヤフヤー(ヨハネ)

紀元前二〇年代、クルアーンに神の預言者と述べられ、またイーサーの従兄弟である 洗礼者ヤフヤーは彼の聖職をはじめた。新約聖書を読むと、彼のメッセージが国民全部に悔い改めよ、という呼びかけであったことがわかる。彼は改悛の条件として、表 面的な儀式よりも内面的清流、つまり食物や衣服の簡素化、断食の徹底等、道徳行為の厳格化を布告した。

罪の許しを願う者は、過去からの完全な断絶を象徴する洗礼を受けなければならない 。これは自分の改悛の情を表わすことである。ヤフヤーは当時のいわゆる「信心深い」人達の利己心や強欲、偽善と対立するものとして、慈悲や誠実、精神の正しさを要 求した。彼は強い影響力を持ち、人々は彼のところに集まってきた。新約聖書には、イーサーもヤフヤーの手により洗礼を受けた

とある。ヤフヤーのメッセージはユダヤの人々を非常に鼓舞したので、ローマ帝国の統治者ヘドロは、自らの地位を脅かすものとして警戒し、投獄するまでに至り、そして最後には打ち首にされた。

●預言者としてのイーサー

新約聖書の伝えるところによると、ヤフヤーの投獄後イーサーは孤独と冥想の場を求めて荒野へと旅立った。その時、神からの自己の使命についてはっきりと覚醒を与えられた。それはヤフヤーの使命の延長であった。当時三十代前半であったと思われるイーサーは、故郷へと帰り、教えを説きはじめた。

クルアーンにも新約聖書の福音書にも、イーサーは全人類というより、ユダヤ人のみ のために神から遣わされた使者であることが強調されている。イーサーの使命はそれまでの預言者達のメッセージを確認し、ユダヤ人の人々に謙遜と至誠の気持に立ち戻り、ムーサーのもたらした戒律に従うよう呼びかけることであった。クルアーンに次のように述べられている。

まことにわれは、導きと光明のある律法を、ムーサーに下した。それでアッラーに帰依する諸預言者は、これによってユダヤ人をさばいた、……

われはかれらの足跡を踏ませて、マリアの子イーサーをつかわし、かれ以前に下した律法の中にあるものを確証するために、導きと光明のある、福音をかれに授けた。これはかれ以前に下した律法の確証であり、また主を畏れる者への導きであり訓戒である。(クルアーン第五章四四、四六節)

主は経典と英知と律法とを、かれに教えたもうた。

そしてかれを、イスラエルの子らへの使者とされた。……(クルアーン第三章四八、四九節)

神はイーサーに病人の治療や死者の蘇生などの多くの奇跡を与えたので、人命は彼が神の使者であることを知った。イーサーの教えについては、後の章で論じることとする。

イーサーの後半生や死に関しては、余り知られていない。新約聖書に記されているはりつけや復活、昇天の話は疑問を呼び、多くの現代聖書研究家さえも、信じられないことと考えている。クルアーンには次のようにある。

[神が旧約聖書に従うものを罰したのは]かれらが自慢したからである。「わしらは アッラーの使者、マリアの子イーサーを殺したぞ」と。だがかれらがイーサーを殺したのでもなく、はりつけにしたのでもない。ただかれらにそう見えたまでである。まことにこのことについて議論するものは、迷いの中にいる。かれらはそれについて確かな知識はなく、ただ憶測するのである。かれらは、実際かれを殺さなかった、いや、アッラーはかれを、おそばに召されたのである。アッラーは、偉力者、英明者であられる。(クルアーン第四章一五七～一五八節)

●新約聖書福音書の問題

新約聖書の二七巻の本のうち、最初の四巻(マタイの福音書、マルコの福音書、ルカの福音書、ヨハネの福音書)は、まとめて四福音書と呼ばれている。

福音<Gospel>という語(アラビア語で Injil)は<よきおとずれ>という意味である。クルアーンにおいて<Injil>は、神がイーサーへ啓示を下す時にだけ使われている。この啓示が本の形で書き記されて保存されているかどうかは、神のみが知るところである。新訳聖書の中にはイーサーが何か書いたとか、弟子達に口述して何かを書きとらせたとかいうことを示唆するものはまったくない。いずれにせよ、クルアーン中の<Injil>新約聖書の四つの福音書を混同してはいけない。これらの福音書はもっと段にパレスチナの外で(そのうち早いものはマルコの福音書で西暦七〇年頃)イーサーのものとは異なった言語で、四人の記録者マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネによって書かれたものである。バルナバの福音書や幼年期の福音書もあるが、これらはキリスト教の聖典には含まれていない。イーサーが語った正確な言葉は失われ、復元することは不可能である。我々はただ新約聖書の著者達に受け継がれたイーサーの教えを、わずかながら垣間見ることができるだけである。

イーサーの伝記として、彼の教えの記録として、我々はこの四つの福音書をどの程度信頼してよいのであろうか。過去二世紀以上にわたる聖書学者の研究と文献調査の結果は、H・G・グッドの論文「イーサーの生涯と教え」の冒頭に要約されるであろう。

「今日、我々はイーサーの生涯は決して書き得ないことがわかった。資料が足りない のである。福音書は質においても、資料としても、伝記作家の要求を満たすものではない。せいぜいそれはイーサーが人に教えを説いていた期間のある出来事を述べてい るにすぎず、彼の人々に与えていた祝福の物語を組み立てるには不十分であり、彼のメッセージの特徴すら反映していない」

もしイスラームの伝承学者に、福音書に伝えられているような話が提出されれば、彼らは史実や考証不足という理由で、信頼性に関する基準。に照会することすらせず、躊躇なく否定してしまうであろう。

イブン・イスハークのような伝承作家ですら、口碑伝説のタイプのものはすべて捨て、ムハンマドの伝記を書いている。四巻の福音書の内容は全部口碑伝説である。それゆえ、福音書とイスラームの文献中福音書に相当するものを較べる時、福音書はシーラの書（預言者の伝説）よりずっと評価が落ちるであろう。そもそも福音書とクルアーンと比較したり、ハディースの最もつまらない作品と比較することですら馬鹿げた ことであり、その行為は福音書やクルアーン、ハディースについて全く無知であることを示している。

イスラーム世界の成立

六信五柱

イスラーム教徒が何を信じ、いかなる行為によって神に仕えるかは、信仰内容と儀式を簡条化した「六信五柱」によく示されている。六信とは、(1) 唯一絶対の神アッラー、(2) 天使、(3) 啓典、(4) 預言者、(5) 来世、(6) 予定の6つを信じることで、五柱（五行ともいう）とは、(1) 信仰告白、(2) 礼拝、(3) 喜捨、(4) 断食 (5) 巡礼の5つを行うことである。啓典は「コーラン」だけでなく、同じく神の啓示として下された「旧約聖書」と「新約聖書」を含むが、「コーラン」は、これに先立つ啓示の誤りを正したものとされる。預言者にもユダヤ教・キリスト教のすべての預言者が含まれるが、ムハンマドは神が人類に遣わした最後の預言者で、ムハンマドなきあと、神の啓示が人類に下されることはないと言われる。信仰告白は、「神は唯一で、ムハンマドは神の使徒（預言者）である」と唱える。この言葉に、ユダヤ教・キリスト教と違うイスラーム教の特徴がはっきりと示されている。

アラビア半島のメッカに生まれた預言者ムハンマドは、唯一の神アッラーへの絶体的服従を説くイスラム教を創唱した。彼の教えに従うアラブ人は大規模な征服を行い、イベリア半島から、中央アジアにまたがる大帝国を建設した。この大帝国は、最初のうちアラブ人の征服王朝の性格が強かったが、征服地の住民のイスラム教への改宗が進むと、法の前での信者の平等が達成され、しだいにイスラム法の支配する世界になっていった。これがすなわちイスラム世界である。

- 610 ムハンマド、イスラム教創始
- 622 ヒジュラ (ヘジラ)
- 711 イベリア半島の征服 ~714
- 732 トゥール・ポワティエの戦い
- 766 バグダート建設完成
- 830 頃 ギリシア語文献の翻訳開始
- 969 ファーティマ朝、カイロ建設
- 1055 セルジューク朝、バグダート入城
- 1099 十字軍、エルサレム王国建設
- 1175 ゴール朝、インド征服開始
- 1216 チンギス=ハンの西征
- 1256 モンゴル軍、バグダート攻略
- 1357 オスマン帝国、バルカンに進出
- 1402 アンカラの戦い
- 1453 ビザンチン帝国の滅亡
- 1492 グラナダ陥落

1 預言者ムハンマド(マホメット)

アラビア半島の紅海沿いに、細長い山脈が南北に走っているが、この山脈の中ほどの小さな盆地にメッカの町がある。メッカは、南アラビアの商人が特産品の乳香を地中海世界に運んだ通商路の要地で、また偶像を祭る多神教の神殿カーバがあつて、毎年多くの巡礼者がメッカに集まり、その機会に市も開かれていた。5世紀の末ごろメッカに住みついたクライシュ部族は、南はイエメン、北はシリアに至る遠隔地通商を始めた。ビザンツ帝国とササン朝ペルシアが絶え間ない戦争状態に陥った6世紀の半ば以後、メッカ商人は、アラビア半島を経由することになった東西貿易を、半島内部で独占するようになった。しかし

貿易独占によって大きな利潤をあげたのは、少数の大商人階級に限られ、クライシュ部族民のあいだに貧富の差が広がった。

もともと商業は、商人個人の判断と責任で行われる。そのため、メッカの町に個人主義的な傾向が強まり、少数の大商人階級が利潤の追求に熱中して同胞の困窮者を顧みなかっただけでなく、富と権力を人生の理想とする気風がクライシュ部族民全体に広まった。

クライシュ部族のハーシム家に生まれ、孤児として不幸な前半生を送った商人ムハンマド（マホメット）は、このような気風の広まりを、クライシュ部族民の精神の病とみなした。宗教だけが精神の病^{やまい}をいやしうるであろうが、当時のアラブ人の伝統的な多神教は、ほとんど迷信と変わらないものまでに墮落していた。彼は610年に唯一神アッラーの啓示を受けて預言者であると自覚し、アッラーへの絶対的服従を同胞に説き始めた。これがイスラム教の創唱で、ムハンマドは絶対者へのおそれの念によって、人々の精神の病をいやそうとしたのである。従ってイスラム教は最も厳格な一神教で、鋭く偶像崇拜を非難する。ムハンマドの没するまで、アッラーの啓示は彼に下り続け、7世紀の半ばにこれを一冊の書物にまとめたのが「コーラン」である。

ムハンマドが大商人階級の利己主義を攻撃したことから、ウマイヤ家を中心とする大商人から迫害され、622年、ムハンマドは少数のムスリム（イスラム教徒）を連れてメディナへヒジュラ（移住）を行なった。メディナの人々は、宗教・政治の両面にわたるムハンマドの指導を受け入れ、アッラーを究極の主権者、預言者ムハンマドをその地上における代理人と認めるムスリムの共同体が、メディナに建設された。ムハンマドは、この共同体の人々を率いてメッカを征服し、メッカのカーバをイスラム教の至高の神殿にするとともに、カーバへの礼拝と巡礼をムスリムに義務づけた。多神教の神殿をイスラム教の神殿とするに当たっては、これをアッラーの館とする新たな意義づけが行われた。

ムハンマドはメッカ征服後もメディナにとどまり、没後はここに葬られたことから、メディナはメッカに次ぐイスラム教の第二の聖都とされた。ムハンマドの威信の高まりとともに、彼の教えに従うものがメッカ・メディナ以外にも現われ、632年に彼が没したとき、メディナの共同体を盟主とする地域・部族のゆるやかな連合体が、アラビア半島の広い範囲にわたって成立していた。

2 正統カリフとウマイヤ朝

ムハンマドの死の翌日、メディナのムスリムの共同体は、仲間のうちの長老アブー＝バクルを新しい指導者に選出した。彼はこのときカリフという称号を

帯び、カリフ制度が成立した。カリフはムハンマドの代理ないし後継者を意味するが、イスラムの教義ではムハンマドのあとに預言者はないので、カリフはムハンマドが併せ持った宗教・政治両権限のうち政治的権限だけを継承したとされ、教義の決定権と立法権とからなる宗教的権限をカリフに認めない。

アラブ人ムスリムはアブー＝バクルの指導のもとに、アラビア半島以外の征服を始めた。征服の速度は早く、ほぼ7世紀の半ばまでに、東は現在のイランとアフガニスタンの大部分、西はリビアのシドラ湾東海岸、北はコーカサス・タウルス両山脈に至る広大な地が、メディナのカリフ政権の支配に帰した。征服地には征服の基地および行政の中心となる都市が築かれ、多数のアラブ人が住みついた。従って征服は同時にアラブ人の大規模な民族移動を意味し、これらの都市を中心に、征服地の住民のアラブ化とイスラム化が進んだ。

アブー＝バクルら、第4代カリフのアリーまでの4人のカリフを正統カリフという。正統カリフ時代は、アリーの暗殺に至るいたましい内乱によって終わりを告げ、ウマイヤ家のムアーウィヤは、ダマスクスに拠ってウマイヤ朝を開いた。ウマイヤ朝の成立と、特にムアーウィヤから2代にわたってカリフの位が父子相続されたことは、かつてメッカでムハンマドを迫害した勢力の復活と受けとられた。またダマスクスが首都となったことは、二聖都メッカとメディナの人々の自尊心を傷つけた。このため再び内乱がおこったが、反ウマイヤ朝勢力の統一はならず、ムアーウィヤとは別系統のウマイヤ家のカリフが内乱を鎮め、ウマイヤ朝の支配は続けられた。

内乱の平定後ウマイヤ朝は征服を再開し、東方では中央アジアとインド、西方では大西洋に至る北アフリカの細長い地中海岸の帯状の地が征服された。北アフリカのベルベル人は、最初アラブ人の支配に抵抗していたが、やがてベルベル人のイスラム化は進み、アラブ人とベルベル人の連合軍は711年にイベリア半島に進出し、この地の西ゴート王国を滅ぼした。その後、フランク王国領に遠征して略奪を行っていたが、732年のトゥール・ポワティエ間の戦いに敗れると、ピレネー山脈の南に退いた。

3 イスラム帝国としてのアッバース朝

正統カリフとウマイヤ朝時代の政治の特徴は、アラブ人による征服地の異民族支配にあり、アラブ人は征服者・支配者集団として、多くの特権をほしいままにしていた。多くの特権のうち特に著しいのは事実上の免税特権で、地租（ハラージュ）と人頭税（ジズヤ）からなる重税は征服地の住民だけに課せられ、たとえ彼等が改宗してムスリムになっても、この重税を免れることはできなかった。

「コーラン」は神の前での信者の平等を説く。征服地の新改宗者は、このような差別を「コーラン」の教えに背くと考えた。また、7世紀の末ごろからイスラムの教義とおきての研究が進むと、アラブ人の中にも、ウマイヤ朝の政治を「コーラン」の教えに照らして非難するものが現われ始めた。そもそもウマイヤ家は、メッカでムハンマド迫害の先頭に立ったのではないか。ムハンマドの叔父の子孫で、従ってハーシム家に属したアッバース家は、このような気運に乗じて革命運動をおこし、これが成功して750年に、ウマイヤ朝が倒れてアッバース朝が開かれた。

アッバース朝は二聖都もダマスクスも避け、当時農業生産力が最も高く、従って租税収入の最も多かった南イラクの中心に、新首都バグダードを築いた。イラン人を主とする新改宗者の知識人の多くが帝国の要職に就けられ、カリフの政務を補佐する宰相の統率する官僚制度が発達し、行政組織の中央集権化が進んだ。アラブ人の特権も徐々に廃止され、アラブ人であろうとなかろうと、征服地に土地を所有するムスリムには地租が課せられ、他方すべてのムスリムから人頭税が免除されるという、イスラム租税制度の大原則が確立された。

正統カリフ時代末期の内乱でアリーを支持し、アリーの暗殺後は、彼の子孫が宗教・政治の両権限を握るムスリムの最高指導者でなければならないと信じる人々を、シーア派という。アッバース家は、シーア派の援助も受けて革命に成功したが、アッバース朝成立後はシーア派を弾圧した。シーア派も抵抗を試みたが、ムスリム全体の中では圧倒的に少数であったため、アッバース朝政権を揺るがすことはできなかった。

7世紀の末ごろに始められたイスラム教義とおきての研究は、アッバース朝になると神学と法学に発展し、神学者と法学者は、多数のムスリムに受け入れられるイスラムの教義と法の体系化に努めた。少数派のシーア派に対して多数派をスンナ派というが、アッバース朝第5代カリフのハールーン＝アッラシードの時代に、教義の決定権と立法権とをスンナ派の神学者と法学者に委ね、多数派ムスリムの信仰の擁護とイスラム法の施行をカリフの最も重要な職責とする体制が築かれた。正統カリフ・ウマイヤ朝のアラブ帝国は、アッバース朝のイスラム帝国へ発展した。

アッバース朝の初め長く平和が続いたことは、質の良い貨幣の十分な供給とあいまって、帝国諸地域間の自由な商品の流通をうながした。進取の気性に富むムスリム商人は、イスラム世界以外の地にも取引きに出かけた。遠隔地通商には隊商貿易と商船貿易とがあり、これを組織したのは都市に住む大商人であった。商人はまた、官僚・知識階級と並んでイスラム文明の担い手であった。イスラム文明は、アラブ人のもたらしたアラビア語とイスラム教を縦糸、征服地の住民が祖先から受け継いだ先進文明の文化遺産を横糸として織りなした新

しい融合文明であった。ウマイヤ朝時代には、融合の成果はイェルサレムの岩のドームなどの建造物に認められるにすぎない。9世紀にギリシア語の文献がアラビア語に組織的に翻訳され始めると、医学・天文学・数学・錬金術など高度の学問が発達した。インドの医学と天文学も伝えられ、特にムスリムがインド人から学んだ算用数学、十進法、ゼロの概念は、のちヨーロッパに伝えられて近代科学の発達に貢献した。ムスリムはまたギリシアの哲学を学び、スンナ派の神学者は厳密な哲学の用語と方法論とを採りいれて、合理的な客観的な神学大系の樹立に成功した。

2001年10月29日(月)「しんぶん赤旗」

テロは世界を変えたか〈上〉

不破 哲三

日本共産党の不破哲三議長は十月二十二日、党本部で朝日新聞のインタビューに応じ、米国で発生した同時多発テロ事件とその後の米国によるアフガニスタンへの武力行使、これらをめぐる日本共産党の対応や立場、さらには国際情勢の動き、日本の対応、宗教と文明論などまで、以下のように語りました。聞き手は、「朝日」のコラムニスト早野透氏です(インタビューの要旨は、十月二十六日付の朝日新聞に掲載されました)。その全体の概要を、二回連載で掲載します。

同時多発テロの歴史的な意味は？

早野 二〇〇一年九月十一日というのは、歴史のうえでもかなり記憶されるべき日になると思います。「あれで世界が変わった」ということがよくいわれますが、それは広範にある共通認識だろうと思います。しかし、いったいどこがどう変わったのか、何が変わってくるのか、そういうことについての歴史的意味について、分かったようで分からない。議長はあの事件をどうとらえているか、まず総括的な話をうかがわせてください。

不破 いままでテロというのは、基本的には世界でもあれこれの地域での局地的な問題だったのですが、それが文字どおり国際テロとなり、世界全体が対処しなければいけない二十一世紀の大問題になった、ということは明白だと思います。

先日、わが党の中央委員会総会(第三回中央委員会総会)があり、そこで私も発言して、このテロは地球文明と人類社会にたいする攻撃という性格をもっていることを指摘しました。人間が地球上のどこにしようが、まったく自分に関係のないことのために命を脅かされるという事態が生まれたわけです。この国際テロを根絶することは、二十一世紀の最大の問題の一つだという位置づけをしています。

ただ、それにたいしてどう対応するのかという問題について、戦争という手段しか考えつかなかったというのは、この国際的な大問題にたいする、国際社会の対応として——実際は国際社会ではなく、アメリカ中心の一部の国ぐにがやっていることですが、非常にまずい対応をしたと思います。

これは国家間の戦争ではないのです。相手は国際組織、国際的なテロ集団であって、地球上、どこでなにをやるか分からない勢力です。それを本当に追いつめるためには、全地球的に、どこの国でもこういうテロは許さないという意思統一が政府レベルでも国民的規模でもなされ、テロ勢力にはどこにも足場も逃げ場もないという状態を地球上につくりだすことが先決です。

イスラム諸国だったらテロ集団が庇護(ひご)されるかといえば、決してそうではありません。イスラム諸国でも、こんなテロを結構だとする者はごく少数派です。ですから、国際社会が本当にテロ勢力を包囲し追いつめることは必ずできるし、その状態をつくりあげること、一番の基本問題があります。

それをやらないで、使いなれた方法というか、戦争という手段に訴えてしまった、しかも、アメリカなど一部の国の決定だけでそれをやってしまった。しかも、その戦争は、報復戦争という色合いを日増しに強めています。ここに、大きな問題があります。

「何が変わったか」という最初の設問にもどりますと、世界を脅かす形で国際テロの問題が現れたこと、さらに、国際社会がこの問題にどのように対応して解決するかという問題が提起されていること、こういう点に、二十一世紀的な新しい問題があると思っています。

なぜアメリカがテロの標的になったか？

早野 国際テロリズムが、飛行機を乗っ取ったりするという段階から、なぜ九月のような事件をひきおこすような深刻な状況になったのか。同時に、なぜアメリカが狙われるのか。こういう問題についての基本的な認識はいかがですか。

不破 大きな問題からいいますと、アメリカ中心に資本主義諸国が世界に進出しているなかで、“南北問題”といわれる大問題が深刻になっています。いまアフガニスタンの民衆の生活をテレビの映像で見ても、あまりにも極端な貧困です。侵略と内戦の二十余年といわれますが、それだけにとどまらないきびしい貧困で、しかも、同じような状況が世界の大きな地域に広がっています。この状態と富の頂点にある国ぐにとの格差が、これだけ狭くなった地球上で、非常に激しく深刻な形で現れているわけで、こういう問題が、一つの背景として大きくあります。

もう一つ、これらの国ぐにが、大国の政治悪というか、諸大国の勝手な行動からさんざんな被害をうけてきたし、いまでも害悪をうけている、という問題が重大です。

“なぜアメリカが”ということについても、私は、この問題にかかわるいろいろな背景があると思います。まず決定的に大きいのは、アメリカが、中東問題で、ダブルスタンダード(二重基準)と批判される行動をとってきたことです。イスラエルとアラブ世界の関係は、戦後ずっと続いてきた問題で、経過も単純ではないのですが、ともかくイスラエルが国際的に決められた国境をこえてヨルダン川西岸とガザを侵略していることは、まぎれもない事実で、これは、だれが見ても明白な侵略です。ところが、アメリカは侵略をやめさせる真剣な対応をしないまま、イスラエル応援の立場をとっている。しかし、イラクがクウェートを侵略したら、ただちに兵を出す。この不公正さはなんだという思いが、湾岸戦争でアメリカの側につき基地を提供した国ぐにであっても、アラブの諸国民のあいだには根強くあります。

アメリカの歴代政権は、相手がイスラエルなら、なにをやってもイスラエルを擁護するが、アラブの国がなにかしたら、ただちに軍事的にたたく。イラクにたいしては、湾岸戦争が終わってからでも、なにかアメリカに気に入らないことがあると、すぐ爆撃機や巡航ミサイルで爆撃する。こういう不公正なことを中東の諸国民の面前でやってきているということが、アメリカにたいする見方の根底に大きく横たわっています。

それからまた、戦後の中東でのいろいろな国際紛争を見ると、アメリカがすべて介入しています。たとえば、イラン・イラク戦争(一九八〇年～八八年)。このときアメリカは、“イラン憎し、イラン革命反対”ということでイラクを応援し、さまざまな形で軍事援助をおこなってフセイン政権を強力にしました。アフガニスタンでは、一九七九年、ソ連の侵略とこれにたいするアフガニスタンの国民の反撃の戦争がおこったときに、アメリカはこの戦争に背後から介入しました。このときの軍事支援はビンラディンらを育てる結果となりました。しかし、ソ連が侵略に失敗して撤退したら、“あとは野となれ”式の態度をとりました。

つまり、アメリカの中東での行動は、イスラエルとアラブとのたたかいに不公正な態度で介入してきたことだけでなく、その他の紛争問題についても、自分の国家目的から利用できるものは利用するが、利用価値がなくなったらそっぽを向くという、大国の勝手横暴を、もっとも典型的にやってきたものでした。それが中東におけるアメリカの存在でした。ここに、アメリカが国際テロの標的になった背景があると思います。

しかし、ここで大事なことは、われわれはいわゆるリンケージ(連結)論にたつて、そういう基本の政治問題が公正に解決されないかぎり、テロは解決できないという立場はとらない、ということです。

どんな「大義」をかかげてもテロは許されない

早野 いろいろなことのツケがまわったから、といういい方はしない？

不破 ツケはツケで解決しなければいけないけれども、ここに原因があるからテロがおこっても仕方がないんだという立場は、いっさいとりません。

私たちは、だいぶ前にこういう問題を経験しました。一九七八年にPLO(パレスチナ解放機構)がテルアビブで、子どもや女性が乗ったバスを襲撃するテロをやったことがあるのです。多数の死傷者が出ました。このテロの理由づけは「イスラエルの侵略反対」でした。そのとき、私たちは、「赤旗」で、“だれがやるにしろ、無辜(むこ)の一般市民を犠牲にするテロは許されない”という立場を表明したのです。そうしたら、PLOの東京事務所長が、最初は非公開の手紙をあちこちに出して、「日本共産党はイスラエル側になった」という非難をばらまき、最後にはそれを活字にして公表しました。もちろん、私たちはそれに反論しました。

三年後の一九八一年にPLOのアラファト議長が来日したとき、私はアラファト氏と会談しました。私はその会談の席で、当の事務所長を目の前において、“この人は、日本共産党をこうって攻撃している。われわれはアラブの大義には賛成するが、テロには反対だ。それを攻撃するのはまったく許されない態度だ”ということを指摘したのです。アラファト氏はその場で、「分かった」として「事態の克服」を約束しました。その後、不当な攻撃はぴたっと止まりました。

われわれは、パレスチナ人民の独立国家建設という事業はずっと支持してきているけれども、そういう大義があるからといってもテロは許されるものではないという立場を、こういう形で、早くから公にしてきたのです。

テロ問題にかぎらず、私たちは、ある国際的な要求を支持するときでも、その運動のなかでいろいろな問題が出てきたとき、それにたいして、党としての自主的な判断と立場をとるということを、堅持してきました。パレスチナの独立国家建設の運動でも、一九六〇年代にPLOができてしばらくの間は、運動の大勢は“イスラエル抹殺”論でした。つまり、“イスラエルには中東に国家をつくる権利はない”、“イスラエルは中東から出ていけ”という立場だったのです。しかし、それではこの問題は解決できません。ですから、私たちは、一九七三年に、宮本顕治委員長(当時)が日本記者クラブで講演したときに、“日本共産党はイスラエル抹殺論にくみしない。イスラエルの国家的生存権を認めるべきだ”ということを表明しました。その後、党の代表団が現地においてPLOと会談したときも、この態度について話しました。

私たちがここで示した中東問題解決の目標は、パレスチナ人の独立国家とイスラエル国家とが共存できる関係を中東につくる、ということでした。この立場は、そのときは国際的な運動のなかで少数意見でしたが、いまでは国際政治の上でも、中東問題解決の当然の大前提になっています。

テロ問題では、いま説明したように、目標に大義があるからといってそれはテロを正当化する理由にはならないし、大義だからといって不道理は許されないということは、私たちの一貫して変わらない態度です。

ですから、こんどの国際テロ事件についても、私たちは、なぜアメリカが標的になるのかという政治的な背景の分析はもちろんやっていますが、しかし、だからといってこれらの政治問題が解決するまでテロ問題の解決をのばすという態度は認めないのです。

私は、テロがおきた直後の九月十七日と報復戦争が始まった直後の十月十一日、志位委員長と連名の書簡を、世界の約百三十カ国の政府首脳に送りました。中東問題などについてはそれぞれなりにいろいろな立場をとっている各国政府に訴える書簡ですから、そこでは、これらの政治問題をどう解決するかは抜きにして、二十一世紀に同じ地球上に生きる者として、国際テロの根絶に道理ある力をつくそうじゃないかという一点にしばって、私たちの提案をおこないました。

国連の制裁行動——非軍事と軍事と

早野 日本共産党が二回の書簡を世界各国に送ったというのは、日本の政党のなかでは唯一目立った行動だったわけですがけれども、なぜ二度出たのかをよく読みくらべてみると、最初は法と理性というスタンスでの解決、いわば経済的制裁、ないしは

政治制裁という段階での議論をされている。二回目の書簡になると国連憲章四二条の軍事的措置まで認めるといふ違いがある。これはどうしてなのですか？

不破 二つの書簡のあいだに、別に立場の違いはありません。九月十七日の書簡は、ああいうテロがあって、それにたいしてアメリカが戦争を用意しはじめた段階です。二度目の書簡は、十月八日に戦争がはじまってその三日後の十月十一日に出した書簡ですから、時期的にはその違いが反映しています。二回目の書簡では、現実におきた戦争について、戦争をはじめた結果はこうなっているじゃないかということも説明して出したのです。

私たちはもともと、国連の制裁という場合、国連憲章第四一条(非軍事的な制裁の条項)とあわせて、第四二条(軍事的な制裁の条項)があることをいつも視野に入れています。湾岸戦争のときにも、私たちはそのことを視野に入れて行動しました。しかし、国連としては、まず経済制裁など、非軍事的手段をとる段階が非常に重大な意味をもつのです。

たとえば、リビアのテロ派によるパンナム機爆破事件のときには、国連としては、経済制裁の手段でまず対応しましたが、それがリビアに大きな影響をあたえ、事件後約十年たった時点で容疑者を引き渡させることに成功しました。このときの容疑者はリビアの国家機関のメンバーでした。ですから、まず経済制裁など、非軍事の強制手段の段階で可能な力をつくす。それでもどうしても相手が応じないときには、憲章第四二条の軍事的制裁が問題になりますが、これは性格からいえば、警察行動の領域の行動だといってよいと思います。そして、この警察行動をやるときには、イスラム社会をふくめた国際的合意が、当然の前提になります。

早野 警察行動というのは、軍事的措置のことですか？ 警察行動的性格だということですね。

不破 そうです。軍事的制裁ではありますが、内容からいえばこれは警察行動の性格をもつもので、しかも、イスラム世界をふくめた国際的合意のもとにおこなわれるものです。こんどのように、一部の国の判断で、これが「制裁」だとして、国家間の戦争の方法を勝手にもちこむということとは、まったく違います。

アメリカでいまやっている軍事報復と、国連の制裁とは、軍事行動という共通面をもってはいても、一方は一国の判断と利害で勝手にやる戦争であり、他方は国際社会が道理をつくして犯罪勢力を追いつめる警察行動的な性格の強制措置ですから、そのあいだには根本的な違いがあります。相手が一定の理性をもっていれば、かつて

のリビアのように、アメリカからは「ならず者国家」と指定された国だけでも、非軍事の制裁の段階で、爆破事件の容疑者の引き渡しという対応をする場合もあります。

こんど場合は、タリバンから交渉の提案があっても、アメリカ側が全部断って、いわば最後通告をつきつける形で開始した戦争です。この戦争をやめて、国連が国際法にもとづく告発や制裁の行動をとる道にきりかえたとき、相手側がどういう態度をとるかということは、やってみなければ分かりません。しかし、すでに戦争がはじまって、事態がこういった状況に現になってきているときでしたから、十月十一日の第二の書簡では、憲章第四二条の軍事的制裁の条項にも触れました。先のことまで具体的に視野に入れて発言しないと、状況にあった説得力をもたないと考えたからです。

早野 その間、ビンラディンが、ビデオをつうじて自分の犯罪を認めるような声明を出したということも、一つの要素になっていますか。

不破 それはありますね。というのは、第一の書簡では、だれを告発すべきかということについては未定だという立場でしたから。

あのビデオはビンラディンの犯行声明そのものではないけれども、しかし、多発テロを「神の一撃」だとしたのは、あのテロを支持し美化する立場です。これは、テロを告発する国際社会の立場とまったく違うものです。それからまた、以前には「自分は無実だ」というビンラディンの声明なるものが流れたこともありますが、今回のビデオでは、あれだけの長文の言明のなかで、自分とアルカイダが無実だとは一言もいわない。さらに、次の二撃、三撃のテロを歓迎するという立場もとっています。こういう点で、直接自分の犯行だとまではいっていないけれども、政治的には国際テロの側に立つものだという名乗りをあげた声明でした。

ですから、第二の書簡では、ビンラディンを容疑者と認定することを前提にして、それにたいする国際社会の対応を具体的に提案しました。

早野 日本共産党がビンラディンを犯人と認定したというわけではないのですか？

不破 そうではありません。自分がこのテロの側に立っていることの名乗りをあげたという認定です。あのビデオ声明は、かなりクロに近いけれども、それだけで犯人だとの断定はできません。だから、書簡でも、容疑を自分から裏づけている、と書きました。

早野 そうすると、アメリカが自分で勝手にやっているという問題点はあるけれども、ビンラディンが容疑者であり、タリバンに責任があるという部分では、アメリカの主張に賛成するわけですか。

不破 アメリカの主張に賛成するかどうかということではなく、私たちは明らかになった事実にもとづいて主張をのべている、ということです。ブッシュ大統領がこういったからとか、小泉首相がこういったからとかいうことではありません。

日本は国連協力も「非軍事」で

早野 そこで、前から視野に入れていたといわれましたが、国連の軍事的措置を認めるというのは、私たちは“へえ”と思うわけです。その場合、国連のこの軍事的措置に自衛隊が参加することはないですか、またすべきではないかということになるのではないですか。

不破 私たちは前から、憲法第九条をもっている日本は、国連のとり行動でも軍事的措置には参加できないという立場を明らかにしています。湾岸戦争や「国連平和協力法」(一九九〇年、海部内閣が提案したが廃案になった)の時も、その立場は明確にしました。

私は、憲法九条をもっている日本だからこそ、このような事態がおきたときに、国連中心の道理ある措置を提唱すべきだと、思います。

先日の中央委員会総会でもいったことですが、日本の政府が憲法を守る姿勢をもっていたら、私たちが書簡で国際社会に提案したようなことを、本来なら日本政府自身が国際的な場で主張し提案して当然なのです。

私はこんどのことでも思うのですが、自民党の政治家たちは、日本が憲法第九条をもっていることにたいして、ものすごい劣等感をもっています。“国際的な舞台で、第九条があるためにやるべきことがやれない”と考える。これが彼らの劣等感です。

ところが、憲法第九条というのは、世界の政治の舞台でも運動の舞台でも、かなり注目されています。日本の政治家であるなら、劣等感ではなく、日本は憲法第九条をもっているからこそこういうことができるんだという、憲法第九条の優位性を発揮して当たり前だと、私は思います。

日本の自民党政治というのは、外交がゼロですから、憲法第九条のもとにいる自分が残念だと思ったり、そのことがみすぼらしく見えたりするのですかね。湾岸戦争のとき多国籍軍に入れなかったとか。

ところが、その日本が海外に軍事的に出てごらんない。このあいだ、難民への物資輸送で自衛隊機がパキスタンにいきました。その部隊に武器を持たせて派遣したわけですが、「武器は飛行機の中におけ」といわれた。それで、パキスタンの部隊が、この忙しいなかで、千人も動員されて丸腰の自衛隊を守った、との報道もありました。民間機だったら、こんなことはやる必要がないのですよ。軍用機だから攻撃される危険があるということで、そういうことにもなる。しかも、日本の自衛隊が武器をもってパキスタンのなかをウロウロされたら、パキスタンの政府としても困るのです。

アジアを侵略したあれだけの歴史をもつ日本ですから、その“軍隊”の進出については、アジアはものすごく警戒するわけです。話は少し飛びますが、いまから十三年ほど前、インドを訪問してインド共産党マルクス主義との会談をしたとき、現地のマスコミにもとめられてデリーで記者会見をやりました。そうしたら、最初の質問が「日本軍のアジア進出の危険」についてだったので、ちょっと驚きました。日本で自衛隊をめぐるきな臭い話が伝わって、「日本軍がまたくるのか」という話になっている。それぐらい、アジア全域に日本の軍事進出にたいする警戒心が強いのです。

その半面、日本が憲法第九条をもっていることへの安心感が強い。

日本の政府はアジアと真剣に対話しないで、アメリカやNATO(北大西洋条約機構)の側とばかり対話しているから、アジアでは信頼の柱になっている憲法第九条の値打ちが見えないで、これを劣等感をもって見ることになる。同じアジアにありながら、考え方や気持ちの上では、日本の政府とアジア諸国のあいだにはこれだけの開きがあるわけで、このこと一つとっても、このままでは二十一世紀の日本の外交的前途はたいへんだと思わざるをえません。

憲法第九条をもった国として世界平和への貢献の道を

早野 国連はぎりぎりの場合、軍事的措置の行動をおこすべきだという書簡の論理でいきますと、日本はその場合、憲法第九条があるから、小泉首相ではないけれども武力行使はできない。しかし、後方支援ぐらいはしなければいけないということになりませんか？

不破 憲法のもとでは、軍事と非軍事の区別はどんな場合でもきっちりさせないとだめです。

早野 そうすると、日本が国連の軍事的措置もふくめてやるべしやるべしといいながら、しかし私たちは憲法第九条があって軍事的措置にはいっさい参加しませんというのは、劣等感ではないけれど、なにかこそばゆいような気がしないでもないのですが、自信はもてますか？

不破 それは日本の姿勢だと思います。だいたい日本が国連に入るときに、憲法第九条をもった国として国連に入ることが大前提でしたから。それだけ、外交の面とほかの活動の面で、国際貢献を大いにすべきなのです。とくにこんどの問題では、国際社会が二十一世紀の新しい問題にたいして新しい対応を探究することが問題になっているのですから、憲法第九条をもった日本は、世界平和の立場で国際貢献をする一番いいポジションにあります。

アフガニスタン問題では、すべてが解決したあとの「平和」の問題、政権のあり方の問題もありますが、そういう先の先のことではなく、現実にも取り組むべき緊急の課題が、難民救援をはじめ無数にあります。憲法第九条をもった国だからこそ世界のなかでいちばん役割をはたせるはずなのに、そういう問題にたいして、いままで日本政府はろくに仕事をしていないでしょう。民間ではいろいろな方がボランティアでずいぶんやっています。そういう活動を世界の先頭にたっておこなって、「憲法第九条をもっている日本は、そういう面ですごい活動をするんだな」と思われることをこそ、めざすべきなのです。

戦争を放棄した憲法のもとで、憲法をごまかしごまかして自衛隊を出動させても、だいたい「武力行使をしない」建前のものが、軍事活動の役にたちますか。同じ戦線を組んでも、かえって邪魔になるだけでしょう。

早野 その点、政府・自民党からすれば、“だからこそちゃんとすべきだ”“もう少しきちっとした協力ができるように武器・弾薬も輸送すべきだ”という議論になってしまうわけですが？

不破 そういう議論をする人はいるでしょうが、これは、つきつめれば、戦争にもっと本格的に参加できるように、憲法第九条を捨ててしまおうという議論にゆきつくものです。ですから、問題の根本は、日本国民がなにを選択するかということです。憲法を変えるか変えないかというのは、日本国民の選択の問題ですから。

今年の憲法記念日の前に、朝日新聞で憲法についての世論調査を発表していました(五月二日付)。憲法そのものにはいろいろな意見がありますが、第九条を守るか守らないかといったら、「守る」というのが多数派でした(第九条を「変えない方がよい」7

4%、「変える方がよい」17%)。あの自民党総裁選の直後で、政界では改憲論が活気づいた時期の調査だっただけに、注目しました。

私は、これは、いまみたいなコソコソした議論ではなく、真正面から議論すれば、国民は意思統一できると思っています。いままでの歴代政府がやってきた、正面からの議論を避けてごまかして憲法を崩してゆこうというのが、政治も憲法も墮落させる道です。

早野 国連中心にやるべきだというのは、ある意味では小沢一郎さんがずっと主張しつづけていることと同じですね。もっとも彼の場合、武力行使もすべきだといっており、そこは明らかに違いますが、現在の状況の問題意識という点では、共通していますね。

不破 小沢さんは、憲法改定論者です。八年ほど前の著作(『日本改造計画』)で、憲法第九条について自分の改定案まで発表した人ですから。そういう立場での議論は、議論としてはもちろん成り立ちます。これにたいして、われわれは、日本の憲法は、将来の日本の進路にとっても、また世界の平和の政治の発展にとっても、大きな意義をもっており、これを守るという立場です。二十一世紀にこのどちらを選ぶのかというのは、国民の選択なんですよ。

私は、二十一世紀には、日本の国民は、小沢さんの主張ではなく、憲法を守るという選択をする、その条件が十分にあると思っています。

国際社会が合意した行動でこそ、制裁と人道が両立できる

早野 ついでといっはなんですが、国連の軍事的措置というのは、国連安保理の決議があって、アメリカ軍中心の多国籍軍という形もありうると思いますが、これは認められるのでしょうか？

不破 それは、そのときの問題の性質とそのときの条件によりますね。

たとえば、一九九一年の湾岸戦争のときには、国連決議による多国籍軍という形をとりました。私たちは、多国籍軍の存在と行動を頭から否定する態度はとりませんでした。これは、国連安保理の決議にもとづくもので、国連憲章第四二条に該当すると見ていましたから。あのとき、われわれが批判したのは、経済制裁をやってまだその効果もあげていないのに、しゃにむに軍事行動に走るというその性急さでした。あのときは国連安保理の会議でもフランスがかなり粘って、アメリカの性急な行動を抑制する立場で議論していましたが、結局は押し切られました。

私たちは、「急ぎすぎる」という批判をしたわけで、国連憲章にてらして違法だとして、多国籍軍の存在と行動を頭から否定する態度はとらなかったのです。

今回のアメリカがとった報復攻撃は、国連安保理の決議なしに勝手にはじめた軍事攻撃であって、前回の湾岸戦争のときとくらべても、根本が違ってきます。

早野 たとえば、経済制裁などをアフガニスタンに適用したりすると、あの苦しんでいる民衆がさらに直接苦しむということになると思いますが、これはやむをえないということですか？

不破 それは逆なんです。いままでもアフガニスタンで苦しんでいる民衆にたいして、たとえば水の救援、食糧の救援、それから地雷除去などの国際活動が非常に多面的にすすめられてきました。ところが、アメリカがはじめた戦争行動は、こうした国際的な援助活動を全部たちきってしまったのです。

朝日新聞の報道で読んだことですが、アフガニスタンでは地雷を除去する活動が長年積みかさねられてきて、「ここは除去された」とか「ここはまだ除去されていないが、どこに地雷があるかは分かった」などの累積がずっとあった。それがこんどの戦争で全部水の泡になった。おまけにアメリカがいま爆撃に使っているクラスター爆弾というのは、広範な地域に地雷をまきちらすことも可能な爆弾だというでしょう。そういう点では、いままでボランティアや国連諸機関の努力でやられてきた人道的な国際援助をたちきってしまったのが、いまの戦争行動だと思います。

いまアメリカ軍が「人道」の証明だと称してアフガニスタンに食糧をばらまいている話があります。十一月八日の国連総会で「食糧の権利」の問題で報告する人がいるのです。その人が、最近、「ああいう行動は、国際的な救援活動の中立性をそこない、信頼をそこなうもので、きわめて有害だ」という告発を記者会見でしています。つまり、中立的立場でやらなければいけない難民の救援活動を、軍事作戦の一翼に組み込んでしまうわけで、そうすると、軍事活動とは別個に中立的な立場でやっている人たちまで「あれは軍事作戦の仲間だ」とみられてしまうわけです。

国連がやる軍事制裁の活動なら、国際的な諸機関との相談や合意の上で、一般の市民に犠牲を出さず、救援活動を保障するというところに、大いに知恵を出せるし、よほどきちんとできると思います。

テロ新報——自衛隊を戦場近くに出したいという一心で

早野 少し話を変えて、「テロ対策特別措置法案」についてうかがいます。アメリカ軍への後方支援と被災民支援の二つが組み合わさった法律ですが、どんなふうに思われていますか？

不破 こんどの法案というのは、とにかく自衛隊を戦場に近いところに出したい、そういう法律上の枠組みを一気につくりたい、そういう願望だけでつくられた法案です。

ですから、「難民救援」といっても、日本がやる行動が、本当に難民救援の役に立つのかどうかは、何も検討されていない。それから、われわれは自衛隊の海外出動そのものにももちろん反対なのですが、自衛隊を派遣しようという政府自身が、法案にもりこまれた自衛隊の行動がアメリカのやっている戦争に実効性があるのかどうかを、まともに検討していない。国会でいくら議論しても、見えてくるのは、ただとにかく自衛隊を戦場近くに出したいという思惑だけです。

先ほどの難民救援物資の話でも、国連機関がイギリスと中国と韓国と日本の四カ国に物資の応援を頼んだとき、それにわざわざ軍用機を使ったのが日本でした。それもパキスタン製で日本に輸入されたものを、自衛隊機でパキスタンに運びかえすという、笑い話のようなことまでやった。とにかく自衛隊機を出したいという動機だけで行動しているから、こんなことになるのです。

それで思い出しますが、湾岸戦争のときに、難民救援のために自衛隊機を送るという話が急に出てきたことがありました。そのとき私たちは「赤旗」の特派員を中東の現地に派遣し、現地の日本大使館や国際移住機構（難民救援の国際機関）の取材をしました。驚いたことには、現地の日本の大使館筋にはなんの事前の相談もない。難民救援機関の方は「軍用機は必要はない。かえって危険だ」という見方でした。普通の民間機だったら平穩に飛べるものを、軍用機で運ばれたら攻撃を受ける危険がある、ということでした。

ところが、そういう現地事情を調べることもしないで、とにかく自衛隊機を出すチャンスだということだけでことを決めてしまう。政府のこの態度には、本当にあきれたものでしたが、こんどの法律も同じ精神でつくられています。

私がこんどのいきさつで注目しているのは、後藤田正晴氏のように、これまで自衛隊海外派兵などの問題で苦勞してきた人が、「このやり方は何だ」と言い出していることです。いままでなら、憲法を破るなら破るなりに、それなりの論立てを積みながらやっているわけです（笑い）。ところが、こんどの“小泉手法”というのは、論立てなしが特

徴です。たとえば、巡航ミサイルを発射したところは戦闘地域かと質問すると、「ミサイルが真っすぐ飛んでゆけば戦闘地域で、あとから人の操作がかわれば戦闘地域でない」とか、どこにもちだしても噴飯ものの議論が、とめどもなく飛び出してくる。法案の法解釈そのものが、法律的にまったくの無防備なんです。(つづく)

2001年10月30日(火)「しんぶん赤旗」

テロは世界を変えたか〈下〉

不破 哲三

理屈なしの小泉手法は国民の不安を広げている

早野 いまの閣僚答弁のレベルは、不破さんが予算委員会でわたりあっていたころの政府・自民党とくらべても低すぎるでしょう。

不破 ちょっとひどすぎます。

昔だって、ひどい話はありませんけれどもね。

余談になりますが、私は、ベトナム戦争の終結についてのパリ協定(一九七三年一月)が結ばれたあと、国会で、田中角栄首相と大平外相に、日本はどういう立場でアメリカのベトナム戦争を支持し応援したのかについて、質問したのです(一九七三年二月)。

「どうしてベトナム戦争がはじまったのか」と聞きましたら、田中首相たちは「トンキン湾で米軍が攻撃を受けたからだ。それで安保理事会の決議にもとづいてはじまった戦争だ」と平気で答弁します。私が、「とんでもない。国連の安保理の決議など存在しない」と指摘したら、外務官僚があわてて知恵をつけて、「国連には報告しただけでした」と訂正しました。トンキン湾で攻撃を受けたというのもでっちあげだったことがあとで暴露されましたが、「米軍はベトナムにいたから攻撃されたのだろう。ジュネーブ協定では外国軍隊はベトナムにいてはいけないことになっているのに、なぜトンキン湾にいたのか」と追及しましたら、困ってしまいました(笑い)。大平外相などは、別の機会でしたが、「事態はそれほど複雑怪奇でありました」(笑い)と答弁したほどです。

つまり、“アメリカはいつでも正義”という立場で行動してきたから、なぜ自分たちがこの戦争を正義と認めて支持してきたのか分からない、それどころか、ベトナム戦争が

どうしておこったのかの経緯も知らない、という日本政府の外交姿勢がはしなくもさらけ出される結果になりました。

日本外交は、出発点からアメリカの旗のもとにすすんできたから、自主的な立場で自分がとる国際的な行動の足場を一つひとつ道理にもとづいて踏み固めるという作業をいっさいやってきていない、ということです。

それでも、その当時は、こうした追及をうけて弱点や矛盾が暴露されると、そのことを恥じる気持ちが、政府答弁のはしばしからうかがえました。しかし、いまは、それを恥じる気持ちなど、どこにも見えません。本当にひどい世界になってきています。

しかし、国会論戦などを通じて、小泉内閣の政治手法にたいする国民の不安は次第に広がってきている、と思いますね。

たしかに自公保の数の多数はあるのですから、この数にものをいわせて、国会を突破することはできます。しかし、大きな問題は、小泉内閣はこの無責任な政治手法でどこへ日本をもっていこうとしているのか、このことについて、国民のあいだに非常な不安が広がりつつあることです。

早野 ただ、いまだに小泉内閣の人気は高いのですが、これはどう思いますか？

不破 ものごとはやはり質的な変化をおこすには一定の時間がかかりますからね。まだそこまではきていない。(笑い)

しかし、いま沈殿しつつある批判の累積というものは、やがて政治をも動かす非常に大きな力になってくると思いますね。

早野 少し歴史的、大局的にうかがいたいのですが、この十年、湾岸戦争、周辺事態法、今回の法案と、憲法をめぐる事態、変遷というのは、だれの目にも明らかなのですが、これはどういうふうにご覧になっておられますか。大きな意味での日本の憲法状況というのは変わってってしまうのでしょうか。私個人は護憲世代なものですから、困ったものだと思うわけだけれども、時代の流れはやはりそっちにいつてしまっているのかなというふうに思ったりもするのです。

不破 政治の舞台の変わり方と、国民レベルの変わり方とは違うと思うんですよ。先ほど憲法問題についての「朝日」の世論調査の結果を話しましたが、そこにはやはり健全なものが現れています。

日本の改憲派は、憲法九条の改定を直接問題にするということではどうもことはうまくすすまないと考えて、九〇年代のはじめごろから、「環境問題がふれられていない」とか「在日外国人の権利が明記されていない」、だから「憲法は古くなった」など、からめ手から攻めようという動きに出ました。そのとき、私たちは、日本の憲法は、国民の権利の問題でも世界のなかで先進的な内容をもっているということを大いに強調しましたが、いずれにしてもそういう議論が横行したのです。その結果でしょうか、先日の「朝日」の世論調査では、からめ手を本気にしての憲法改定の意見が比較的多くありましたが、改憲派が改悪をねらっている本命の憲法第九条については、「守るべきだ」が多数になっている。これは大事な結果だと思いました。

政治のほうはどうか。自民党の政治というのは、昔から「理屈はあとからついてくる」といわれた世界なのですが、このごろは、あとからでも理屈をつけること自体が嫌になって(笑い)、理屈なしで走ってしまうところまでできてしまっている。これも、私はそう長続きできるものではないと思います。国民がこうした政治手法にたいする危なさを感じているというのは、戦争問題と生活問題の両面でいま並行してすすんでいることですから。

国連主導の平和秩序の建設は二十一世紀の重要課題

早野 そういうこともふくめて日本の国家戦略というか、日本の国のありようというか、それは、憲法の問題、そして日米安保の問題、重視されている国連の問題などです。アメリカとのつきあい方というのは、これからどうしていくべきなのか。それから、先ほど国連を重視するというお話をされましたが、国連は実態として本当に集団安全保障の実力をつけていきうるのか、結局アメリカ支配のバージョン(一形態)になりはしないのかなど、いろいろ思うのですが、そこで日本はどういう意味で国家戦略を設計したらいいのか、このあたりはいかがでしょうか。

不破 国連のことからいいますと、日本が国連に入ったばかりのころと同じ感覚で国連に代表される国際社会を見ていたら、大間違いになると思います。

国連には、一方で大国中心の安保理事会がありますが、他方では世界のすべての国が参加する国連総会があります。その国連総会では、アメリカがやってきている軍事攻撃や軍事干渉の行動について、ほとんど毎年のように非難決議が圧倒的多数で採択されています。核兵器の問題でも、アメリカなどは頑強に抵抗したのですが、とうとう期限を切って核兵器の廃止にむかうべきだという流れを押しとどめられなくなっています。ここでは、発展途上国が中心となった非同盟運動が大きな力を発揮していま

す。これらの国々には、安保理事会にはなかなかその声が反映しないけれども、国際社会では無視できない大きな力を発揮しはじめているのです。

早野 いままでは、結局のところ、たいして力を発揮しない面が多かったのですが、いまは違いますか。

不破 じわりじわりと力を発揮してきています。だから、核兵器廃絶の問題などでも、以前には考えられなかったような国際的な決議の前進がかちとられるということも、おこってくる。ところが、日本は、国連に参加していても、アメリカ中心、NATO中心の見方ですから、そこが見えないのです。

もう一つは、国連は国際的な安全保障の機構としてつくられたのだけれども、実際には二十世紀の国連というものは、新しい流れがあっても、結局は、大国間の政治的な闘争やかけひきの舞台になってきました。

しかし、冒頭、国際テロの問題で強調したように、国連が本当に国際社会の代表者として問題にたちむかい、世界的な意思統一の中心になり、非軍事、軍事の制裁行動をとる場合にも、本当の意味で国連の指揮のもとに世界が行動する、こういうことに本気で取り組みだしたら、そういう活動のなかからこそ、二十一世紀の国連の役割というものが現実にも生まれてくる、ここが大事だと思います。

日米安保下の日本外交には三つの根本的な弱点がある

不破 それから、日本の国家戦略についていいますと、自民党政府の国家戦略は日米安保——軍事同盟一本やりですが、この日米安保というのは、まず、こんどのように、アメリカが軍事行動をやったら、日本も自衛隊を出さないと「同盟国としてあいつまない」という立場に必ずなり、憲法違反の軍備増強や海外派兵に突き進んでゆく大もとになります。そこに第一の有害さがあります。

日米安保のもう一つの有害さは、日本の外交をゼロにしてしまったことです。だいたい日本の外交がゼロだということは、世界中が知っていることです。

早野 知られちゃっていますか？

不破 だって、国際政治のうえで重大問題がおきたとき、日本に相談にくるといって国は一つもないではありませんか。湾岸戦争のとき、おやじさんの方のブッシュ大統領でしたが、日本にくる約束になっていたのに、戦争がはじまったら、外交が忙しくなっ

たといって、訪日をキャンセルしました。それほど、日本の政府は、国際政治では同盟国のアメリカからも頼りにされていないのです。ほかの国はなおのことです。

それは、軍隊の海外派兵ができない国だからではありません。外交的にアメリカのお供の国だから、日本にいてもなにも独自の新しい知恵があるわけではない、また日本と相談してなにか新しいことを見いだせるわけではない、そういうことが世界の常識になっている。だから、世界を緊張させる問題がおきて、国際外交が活発になると、日本はいよいよ影がうすくなるのです。

私たちは日米安保条約のない独立・非同盟の日本を望んでいるのですが、この目標は国民多数の合意がないと実現できません。しかし、そこまでゆく以前にも、外交の転換は可能だと考えています。

転換の第一は、アメリカにおまかせの外交から、日本自身の自主的な判断と選択を重視する自主外交にきりかえることです。どんな国際問題にたいしても、日本としての独自の判断をもつ。アメリカのやっている行動に賛成するときでも、日本自身の自主的な立場で「これはこうだから賛成する」ということを最小限いえるようなところに踏み出さないと、国際社会で信頼を勝ちとることはできませんからね。

第二に大事なことは、憲法第九条をもった国なのに、日本ぐらい、対外関係を考えるときに軍事的な発想を優先させる国はない、という問題です。いつもなにか軍事的な「脅威」を探しては、それに対抗することを対外政策の基本にする。相手が北朝鮮であろうが、中国であろうが、「やがてこの国は脅威になるだろう」という立場でしかもものを見ない。これは、現在の世界、とくにアジアではたいへん異常な立場です。

私は、この点を、一昨年（一九九九年）の東南アジア訪問のさいに本当に痛感しました。東南アジアというのは、ベトナム戦争の当時は、多くの国がベトナムに戦争をしかけたアメリカの側にたって、ずいぶん緊張した地域でした。それが、いまはがらっと変わってしまい、ベトナムもふくめた大同団結が東南アジア全域ですすんでいます。国際政治に対応する態度でも、“軍事同盟にも核兵器にも反対、大国の横暴は認めない”ということが、共通の大きな流れになっています。

そのなかでもう一つ実感したのは、どんな国際紛争にたいしても、まず平和的な話し合いを中心にして対応するというので、軍事中心の対応を優先させる考えを強いましめていることです。マレーシアで話し合ったときにも、こういうことを、首相直結の戦略国際問題研究所や外務省の幹部たちが、ずばりと指摘します。

ところが日本の場合、対中国政策を考えると、二十一世紀の半ばごろになると中国の経済力が大きくなって「脅威になるはずだ」という調子の、なんでも「脅威」からものを考える議論がさきに立ちます。このアジアで、二十一世紀に、日本と中国がどんな関係をもつことがアジアと世界の平和に役立つのかという発想がないのです。

これはどこにたいしてもそうです。「軍隊」がないはずの国なのに、外交はいわば防衛庁的な発想が主導するといった格好です。軍事優先のこの発想には、本当に日本独特のものがああります。対北朝鮮政策でも、テポドンの「脅威」だけが問題になるという時期がありました。ところが、アメリカが北朝鮮に特使を送って平和的な関係を探求しはじめたら、日本政府の側には、「戦争」に対応する議論はあっても、「平和」に対応する用意がなくて、困ってしまいました。こういう事態が生まれるのです。

私はここにも、安保体制のもとで日本がやってきた外交の根本的な弱点が現れていると思います。

三番目は、日米安保下の日本外交には、アジアの一員という立場がないことです。日本が、同じアジアに、アジアの諸国民とともに生きているということは、過去・現在・未来を通じて変わらない根本的な事実です。しかも、日本は、二十世紀の前半の時期に、侵略戦争と植民地支配によって、アジア諸国民にあれだけの巨大な惨害をあたえたのです。その日本が、これからの日本の進路を考えると、アジアの一員という立場を抜きにして、未来にむかう進路を設定できるはずがありません。ところが、いまの日本の外交的立場では、はっきりいってこの根本が欠落しています。

侵略戦争と植民地支配にたいして、限られた外交的な反省の言葉はあっても、真剣な反省の態度がないのも、その深刻な現れの一つです。

国際政治のなかでの立場でも、いまのアジアでは、圧倒的多数の国——二十三カ国中二十一カ国までが非同盟の流れに属していて、軍事同盟の一員として残っている国は、日本と韓国だけです。韓国は南北分断という特別の事情がありますが、日本は、そういう事情がないのに、アメリカとの軍事同盟のなかに組みこまれているアジアで唯一の国です。

そればかりか、外交を考えるときは、対米外交、対NATO外交が最優先で、アジアの一員としての自覚も立場もまったくない。ここにも、自民党政府の外交戦略のきわめて重大な問題があります。

私はこれが、日本外交の三大欠陥だと思います。自主性がない。なんでも軍事中心で考える。アジアの一員の自覚がない。私たちは、根本的には、日米安保条約をなくして、主権を回復した非同盟中立の日本を築いてゆくという目標をもっていますが、そこに前進する過程においても、いまあげた三つの点で日本外交の転換をかちとることが急務だと考えています。

「世界化（グローバリゼーション）」の動きをどう見るか

早野 こんどは、もう少し未来社会のことを考えてゆくと、二十一世紀の国家というのはどうなってゆくのか。なかんずくグローバリゼーションの光と影が世界を覆っていて、その影の部分がテロリズムにつながっていくとも見られる。国家とグローバリズムというようなことについて、どのように考えていますか。

不破 国際的な課題、世界全体で取り組むべき課題は、二十一世紀にはものすごく大きくなると思います。しかし、だからといって、国家が不要になるとか、それぞれの国民の自主性が軽くなるとかいうことではないでしょう。国際的な課題に取り組むということと、それぞれの国が自主性をもってその仕事に参加するということとは、矛盾することではありません。

「グローバリゼーション(世界化・国際化)」という言葉の一番の発信元は、アメリカなんです。ところが、アメリカは、自分の気に入らない国際課題については、“わが国の死活の利益が優先する”という立場で、平気で背を向ける態度をとっています。地球環境の問題で京都議定書に反対したり、核兵器廃絶を拒否したりするのは、この立場のもっとも鮮明な現れでしょう。私たちは、アメリカ流「グローバリゼーション」のこうしたごまかしには乗りません。

昨年十一月の私たちの党大会のさいに、ヨーロッパのいくつかの共産党の代表たちと意見を交換しましたが、そのとき、「世界化(グローバリゼーション)」への対応でかなり大きな立場の違いがあることに気づきました。ヨーロッパの共産党は、フランスもイタリアも、「グローバリゼーション反対」という方針でした。私たちは、そういう立場はとっていません。「世界化(グローバリゼーション)」、つまり資本主義がいよいよ世界的になるということは、マルクスが声を大にしてその意義を強調した資本主義の発展の基本方向ですから。(笑い)

では、日本共産党はこの問題をどう扱っているかということ、経済面でも大国中心の国際秩序ではなく、どんな大国の経済的な横暴も覇権も認めない国際秩序をめざして、国際的にも経済秩序の民主的な改革を要求するという立場です。

「新国際経済秩序」ということは一九七〇年代から世界的に大きな問題になってきましたが、そういう方向での改革が、二十一世紀を迎えていよいよ切実に必要な課題になってきています。「世界化」「国際化」でも、大国中心の国際化ではなく、諸国民の平等な権利と地位を原則とする民主的な国際化をめざす、その立場で世界的課題にしっかりと取り組むべきです。

アメリカ中心の国際化の危険性は、アジア諸国がとくにこの数年来の経験を通じて、非常に強く感じていることです。

四年前に金融危機、経済危機がアジアを襲いましたが、その背景には、国際的な金融投機集団の経済秩序を破壊する策動がありました。この時、アメリカが各国に押しつけようとした処方せんは、IMF(国際通貨基金)の指揮のもとでの経済再建でした。日本は、この面でも、アメリカの「同盟国」ぶりを発揮して、インドネシアが経済危機に落ち込んだ時には、橋本首相がわざわざインドネシアに出向いて、「IMFの処方せん」を受け入れるよう勧告することまでしました。しかし、このIMF路線は完全に失敗しました。

一方、マレーシアは、「IMFの処方せん」をいったんはもらったものの、それをはねかえして、自主的な再建路線に踏み出し、みごとに危機からの脱出に成功しました。私がマレーシアを訪問したのはその直後でしたから、経済関係の幹部たちも非常に意気軒高で、自主独立が重要だということで、大いに意気投合したものです。

そういう点では、「グローバリゼーション(世界化・国際化)」といっても、アメリカ主導でいわばアメリカ・ヨーロッパのタイプに全世界をはめこもうという「世界化」は、現実の世界のなかで、多くの面で落第点がつけられています。

やはり、世界では、それぞれの国がそれぞれの社会の内的な論理をもって発展してきているのです。国際社会では、その自主性を大いに発揮しながら共同しあうというあり方がもとめられています。しかも、かつてのように、資本主義が高度に発展している大国だけが世界を動かすのではなく、経済的にはさまざまな発展段階にあっても、世界の諸大陸の多くの国ぐにがそれぞれなりの力をもって世界の政治と経済にくわわっているのが、今日の国際社会です。国際社会のこうした特徴は、二十一世紀には、より大きな意味をもってくるでしょう。

そこまで見通して世界化の問題を考えずに、ワシントンやニューヨークの立場からだけ世界を見、そのせまい立場から「世界化」「国際化」を見ていると、世界の前途を見誤ると思います。

イスラム世界も、世界の進歩の流れのなかにある

早野 そういう議論は日本でも、まだ少数ながら芽があるような気がします。こんどの事件は、「文明の衝突」というわけではないけれども、長い歴史のなかでよってきた歴史的なこじれといいますか、これがあるような気がします。それから宗教という問題が、国家や文明、人類の将来とどういふふうにかかわってくるのか。今回は明らかに宗教が人間の生活の最上位にあって、それがいくらか混乱させているということがあると思うのですが、人類文明といたら上げすぎるかもしれませんが、こんどの事件で、地球上の文明はどういう関係になっていくか、とくに宗教と国家というのはどういう関係になっていくのか……。

不破 「文明の衝突」論というのは、最近、いろいろな人が唱えているようですが、今後の世界を「文明の衝突」という立場で見るといふのは、私は、大きく間違った見方だと思います。とくにこんどの問題を「文明の衝突」という枠にはめこんでしまって、イスラム文明を代表しているのがテロ勢力で、欧米文明を代表しているのがアメリカの巡航ミサイルだといふのは、きわめて有害な見方でしょう。

だいたい、イスラム世界を、歴史の進歩の外にある世界と見ること自体、事実に反する見方です。第二次大戦後の半世紀を見ても、この世界には顕著な進歩が現実記録されています。

私たちは、二十世紀を、二つの世界大戦、ファシズムと軍国主義などを経験した世紀であると同時に、民族自決権、民主主義、基本的人権の前進などの点で、人類史のなかでも、巨大な進歩をとげた世紀だと評価しています。イスラム世界でも、これらの点で、とくに第二次世界大戦後の進歩にはいちじるしいものがありました。

第二次大戦が終わったとき、イスラム世界で独立国だったのは、トルコとサウジアラビア、イラン、イラク、アフガニスタン、エジプトぐらいで、それらの国ぐにも、多くはヨーロッパの大国への強い従属のもとにありました。しかも、このなかで主権在民の共和制をもっていたのはトルコだけでした。そしてその他のイスラム世界は、アフリカからアジアまで、イギリス、フランス、オランダ、イタリアなど、ヨーロッパ諸国の植民地でした。

それが戦後の過程で、独立をかちとり、多くの国ぐには、王制から共和制への転換がかちとられました。国民の人権の面でも、国ごとに紆余(うよ)曲折はあるし、時には逆流もありますが、ともかく全体としては前進の流れのなかにあります。

そういう点で、イスラム社会自体がイスラム社会なりの進歩をしてきています。そのことを見ないで、イスラム世界では世界的な進歩・発展と無縁のもののように考える見方は、成り立つものではありません。

「文明の衝突」ではなく、異なる文明の「平和共存」の探求を

不破 重大なことは、欧米文明の側に、自分たちの体制が絶対だという立場で、そのモノサシで他国の文明を裁断し審判するという見地が非常に強いことです。これにたいする抵抗というものが、イスラム世界だけでなく、世界に大きくあることを、よく考えなければなりません。

たとえば、日本の歴代首相は、すぐ「わが国はアメリカと自由と民主主義の価値観を共有する」といいます。しかし、この「価値観」論は、イスラム諸国やアジア諸国ではすごい抵抗があるものなのです。この議論の根本には、自分たちの「価値観」を絶対普遍の「価値観」だとする考えがあって、他の国にそれとは違う体制があったり、そのモノサシにあわない試行錯誤や探求があったりすると、これを全部否定的に見るわけです。

こういう見方に立って「文明の衝突」を考えるとしたら、これは危険なことだといわざるをえません。

先ほど東南アジアを訪問したときの話をしましたが、マレーシアに行ってるほどと思ったことがありました。マレーシアという国はマレー系が六割ですが、中国系(華僑)が三割、それからインド系が一割います。この三つの民族の混合国家で、民族間のバランスにすごく苦労しています。華僑は住民の数からいけば少数派ですが、経済的にはいわば支配者の地位にある。だから、自然にまかせるとマレー人は経済的にも社会的にも痛められる一方ということになります。

そういうことが、マレーシアでの民族的なぶつかりあいの背景にあって、その経験から、諸民族間の融合をどうするのかということで、いろいろな探求がおこなわれてきました。たとえば、政治の上でいうと完全には平等でなくて、経済的には弱者であるマレー人が、行政に採用されるときには優先権をもつという制度があったりします。そのことのいい悪いの判断はいろいろあるでしょうが、マレーシアでは、苦労して解決の道筋を探求しながら民族融合への努力をしています。

マレーシア外務省の幹部と食事をしながら話したとき、私が、「あなた方は民族融合の問題でこれだけ苦労してきているから、その苦労が外交に生きていると思う」といいましたら、えらく感激されまして「そこまで見てくれた人はない」といわれたものです。そ

の人たちが「われわれは、国際社会では『価値観が違う』といつもやられている」というんです。

マレーシアというのは、イスラム教が国教ですが、そういう形で、多数者をなすイスラム社会を維持しながら、政治的な基本は民主主義の方向でやっています。

イスラムのその他の国でも、イランでは、ハタミ大統領がこの前来た日でしたが、ここはイラン革命でホメイニがつくった共和国ですから、完全なイスラム体制です。その国を、民主主義国家としてどう改革してゆくかという点で苦勞をしています。インドネシアにもインドネシアなりの歴史がある。ともかくイスラム住民を基本にした諸国で、どういう形で民主主義的な発展をはかるか、試行錯誤をふくむいろいろな探求があるので

す。

イスラムの宗教というのは独特で、「政教一致」をマホメット(ムハンマド)が決めてしまいましたが、そのなかでいろいろな模索があるわけです。それは、それぞれの民族が模索して自分で解決してゆくことであって、国際社会としては、国際的にも非難されるべき有害な圧政と、そういう模索とは区別して、対処しなければいけないと思います。

ところが、いまアジアの多くの国々には、アメリカなどがいう「価値観」論とは、欧米的価値観で全部なで切りにするというものと受けとっています。

そういう点では、「文明の衝突」ではなく、いろいろな文明の「平和共存」ということを、あらためて考えるべきときではないでしょうか。以前は「平和共存」というのは資本主義と社会主義の関係で問題になりましたけれども、長い歴史のなかでそれぞれの違った文明をもってきた国々が地球上で共存してゆくときには、「平和共存」という対処の仕方が必要だと思います。そのなかでこそ世界の進歩もありえます。

いまイスラム人口は世界で十一億人をこえていると思います。文明も違うし、社会の風俗も違えば、経てきた歴史も違う。しかも、イスラム社会に属する国々にの大多数は、独立をかちとってまだ半世紀にもならない国々にだということも、頭に入れる必要があります。

いまでこそ欧米諸国が世界の中心のような振る舞いをしていますが、人口的には現在すでに地球上の少数者です。現在でも、人口は中国が十二億をこえ、インド、パキスタン、バングラデシュをあわせれば、インド亜大陸の人口も十二億をこえるでしょう。二十一世紀の世界では、そういう国々が占める比重は、経済や政治のうえでも間違いなく大きくなります。

早野 非常に広い意味で、本質的意味で平和共存という形でゆくしかないということですね。

不破 そうですね。世界のすべての国が自分の進路は自分で決める権利をもっている、それを尊重しあってこそ国際社会が成り立つということをきちんと踏まえることです。

マルクスは、それぞれの社会の独自の発展の論理を探求した

早野 それが結論になるかと思います。ところで、あまり深くたちいることはしませんが、たとえば社会主義、共産主義というような思想は、いわば啓蒙(けいもう)主義から発展していった自由、平等、民主主義というようなことの発展の系譜にもあったわけです。これは、文明の平和共存、それから文明それぞれの価値観の併存というところからすると、どんなことになるのでしょうか。

不破 私は、イスラムやアジアなどの社会がそれぞれなりの道筋を通っても、歴史の進歩の流れゆく先は、世界全体として、大きな共通性があると思っています。

マルクスにしても、社会の発展の段階について、原始共産制、奴隷制、封建制、資本主義、社会主義とのべるときには、これは「大づかみに言って」の順序だという断り書きを必ずつけたものです。“自分は、世界をこういう図式にあてはめるつもりはない”ということもくりかえしました。

彼はアメリカの新聞の通信員でしたから、たとえばスペインでなにか大事件がおきて、つっこんだ論説を書こうとするときには、必ずスペインの歴史を徹底的に勉強して、スペイン社会の内的な発展の論理をつかみだす努力をしたものでした。世界を図式的な枠にはめこむようなことは絶対にしない。その社会の歴史そのもののなかから、どういう進歩の流れ、発展の論理があるのかをつかみだすのです。だから、アジア社会を見るときにも、アジア社会の研究のなかからこの社会がどういう進歩の展望をもつかを明らかにしようとしていました。

私たちが、マルクスから学ぶべきものは「科学の目」です。十九世紀の世界を見て彼が出した結論の一つひとつが二十一世紀に通用する値打ちをもつわけではない、という場合は、たくさんあります。しかし、十九世紀の世界を見たその方法、考え方のなかには、いまに生きる科学性があるわけですから、この「科学の目」をうけつごうということ、私は自らの指針としています。

その目で見ると、先ほどいいましたように、イスラム社会が第二次世界大戦が終わってからのこの半世紀のあいだに発展させてきたものは、民族自決であり、民主主義の前進であり、人権の前進なのです。国ごと民族ごとに、いろいろな道を通りながら、また時には逆流も経験しながら、歴史も世界も進歩してゆくわけで、最後は、それぞれの国で「国民が主人公」になる方向に発展してゆく、私は、世界史のこの大きな流れは変わらないと思います。

「平和共存」の歴史をふりかえって

早野 普遍的価値というのがあるのでしょうか。普遍的なるものというか……。

不破 歴史のなかで、おのずから普遍性が証明されてくる、というものは、当然、あるでしょう。しかし、地球上のある国ぐにが、自分の国のあり方が「普遍的な価値」だといいたしたら、それは、間違った道に踏み込むことです。

少し歴史をさかのぼる話ですが、ロシアで最初に社会主義の革命がおこなわれた時に、これにたいする資本主義世界の対応というのは、まさにこの種の「普遍的価値」論に立つものだったのです。資本主義が「普遍的価値」だと思いこんで、資本主義と違う制度をもった国が地球上に生まれるなどということは夢にも思っていなかったし、そんな国と同じ地球上で共存することには我慢できなかった。だからイギリスもフランスもアメリカも日本も、こんな体制は武力で倒せと、ロシアに攻めこんだり、反革命派を応援したりしました。大干渉戦争でした。

それに失敗して、社会主義ロシアが生き残った時、一九二二年にジェノバ会議という国際的会議(欧州復興会議)が開かれたのですが、その会議の招集のさいに、“各国は、経済でも政治でも、自分の好む制度を選ぶ権利をもつ。世界のどの国も、あれこれの制度を他の国に押しつける権利はもちえない”ということが確認されたのです。レーニンがこの条項に注目し、これを手がかりに、ソビエト政権としてはじめて国際会議に参加しました。また、同じ時期にドイツと結んだ条約(ラパッコ条約)でも、この原則がうたわれました。その時点で、世界ははじめて、経済体制の違う国が共存しあうのが新しい世界の秩序だということを確認したのです。

それ以後、「平和共存」というのは、資本主義と社会主義との関係で主に問題にされてきたのですが、現在では、もっと広い意味で、つまり、違う文明、違う価値観をもつ国と国とのあいだで「平和共存」の道を探求することが、必要になってきています。ここには、世界がいま直面している非常に大きな問題があるのではないのでしょうか。

Osama bin Laden

NBC NEWS

NEW YORK — Osama bin Laden, one-time ally of the CIA in the war against the Soviet army in Afghanistan, is now the primary suspect in the attacks on the World Trade Center and the Pentagon, the most deadly terrorist assaults in U.S. history. The Saudi-born millionaire has been sheltered by Afghanistan 痴 radical Taliban regime since 1996. NBC News investigative producer Robert Windrem has tracked bin Laden 痴 rise to the top of America 痴 Most Wanted list. Here are some questions and answers about bin Laden:

ADVERTISING ON MSNBC

Sponsored by



Citibank® Online

Search for exciting **free games:**

Blackjack



Where is Osama bin Laden?

Most recently, he has been seen near Jalalabad, a city in eastern Afghanistan. He moves three or more times weekly, living in mud huts, tent cities, caves, etc. Bin Laden is accompanied by a security entourage, including heavily armed bodyguards and anti-aircraft guns mounted on trucks. Often, multiple sites are set up for his use and he will choose a site at the last minute. He is believed to have a network of some 400 operatives in Afghanistan, most having arrived with him from Sudan in 1996.



How often does U.S. intelligence know where he is?

In recent months, U.S. intelligence has gotten a better grasp on how he operates and where. “We are getting better at finding him. There are days and days where we don’t know where he is,” said one U.S.

official. On other days, the United States has “different degrees of specificity as to where he is. Does he move every night? Not every night ... but he moves a lot.” Vice President Dick Cheney said on Sept. 16 that the United States did not know where bin Laden currently was.

● GO TO TOP ↑

How does bin Laden disguise his movements?

Bin Laden regularly varies the details of his movements. He will vary not only the number of vehicles in his convoys, for example, but also the type of vehicle as well. On some travels, he will give his entourage hours’ notice of his departure. At other times, he will leave at a moment’s notice. He will also have several locations prepared, with only a few of his aides knowing which he will ultimately choose. While he does not change locations every night, he changes about twice a week.

● GO TO TOP ↑

How does he communicate?

His biggest problem remains communications, which the United States has successfully compromised. Another official said, “He’s stopped using satellite phones, although we’ve caught many of his couriers, it only takes 50 bucks to buy someone in Afghanistan.” Bin Laden previously used Inmarsat phones until he discovered that the United States was intercepting his communications off the Inmarsat-3 satellite over the Indian Ocean. For years, the National Security Agency

would distribute verbatim transcripts of calls bin Laden made to subordinates. One of the biggest breaks in the embassy bombing investigation was interception of a congratulatory phone call in the days after the bombings.

Other officials note the clever combination of 19th and 20th century means of communications bin Laden has adapted. Bin Laden's couriers often carry encrypted floppy disks and meet in third countries. Once in the hands of the target nation's cell, the disk is de-encrypted. He has also used faxes from remote locations and in some cases, Internet-based e-mail. In addition to encryption, al-Qaida has used various code words and aliases to disguise identities. Bin Laden has been described in al-Qaida communications as "the Sheikh," "Hajj," "Abu Abdullah" and "the Director." Fazul Abdullah Mohammed, mastermind of the embassy bombings, used at least three aliases. Ramzi Yousef, mastermind of the World Trade Center, used 15, as well as 11 passports. One law enforcement source said al-Qaida has been trying to recruit Americans as couriers, knowing an American passport is easier to use worldwide.



Can he travel outside Afghanistan?

Bin Laden is believed to have access to "several planes," the ownership of which is "a bit cloudy ... but there are certainly enough aircraft to move a rather tall terrorist," one senior U.S. intelligence official said. Bin Laden traveled around the Muslim world in charter jets for years prior to his exile in Afghanistan. He also owns a private jet, said an intelligence official.

● GO TO TOP ↑

How is bin Laden’s terror network, al-Qaida, structured?

Bin Laden is the undisputed leader, called “emir” or “prince” by his followers, who must take a sworn oath to him, violation of which is punishable by death. Beneath him is the “shura al-majlis” or “consultative council,” which includes his top lieutenants. His two aides are Egyptians: Ayman al-Zawahiri, a physician and leader of al-Jihad, the violent Egyptian group responsible for the Luxor tourist massacre in 1995. Muhammed Atef, his military commander, also served in al-Jihad.

A “fatwah” committee of the council makes the decisions to carry out terrorist attacks.

● GO TO TOP ↑

Where does al-Qaida operate?

Al-Qaida is believed to have operations in 60 countries, active cells in 20, including the United States. It is also believed to operate training centers in both Afghanistan and Sudan, the first beginning operations in 1994 with representatives from Egyptian, Algerian, Tunisian and Palestinian extremist groups. Among the countries or regions identified as having active cells of al-Qaida are Pakistan, Afghanistan, Kosovo, Chechnya, Philippines, Egypt, Tunisia.

How does al-Qaida network operate?

Its operations are meticulous, with some plans in the works for months if not years. They are also clever, and bin Laden himself is very much hands-on.

Some examples:

- The 1993 World Trade Center bombers cased the twin towers multiple times, looking not just at security but the points under the trade center where an explosion could do the most damage.
- The East Africa embassy bombers phoned in credible threats to the embassy and then observed the embassy response.
- The 1995 assassination attempt of Egyptian President Hosni Mubarak in Addis Ababa, Ethiopia, was based on surveillance of Mubarak's security arrangements in Ethiopia two years earlier. Similarly, bin Laden operatives videotaped security arrangements at President Clinton's 1994 visit to Manila, knowing he had already committed to visiting the Philippine capital for an Asian-Pacific summit two years later. The tapes were sent to bin Laden, then living in Sudan.

“He may have begun as a venture capitalist for terrorism,” said one high-ranking intelligence officer of his evolution as a terrorist. “But there is no doubt now that he is operating like a CEO.”

How long is an operation in the planning stages?

The minimum appears to be four to six months, with some plans evolving over years. The surveillance of the East Africa embassy bombings began in 1993, five years before the bombing was carried out.

● GO TO TOP ↑

How are operational responsibilities divided?

Each operation has a planning cell and an execution cell, with the execution cell arriving on the scene in some cases only weeks before the attack is carried out.

In most cases, like the 1993 World Trade Center bombing and the embassy bombings, an outsider recruits local country nationals to operate as a cell. Cells rarely number more than 10 people. In rare cases are the bombers — either the planners or the operators — older than 30. At the time of the two bombings, the masterminds were both 25.

Plans are made in one location, then the bomb is made in another. In the 1993 World Trade Center bombing, the planning took place in a Jersey City, N.J., apartment, the materials were stored in a self-storage facility and the bomb was put together in a garage. Similarly in Nairobi, the planning was done at a run-down hotel in downtown, while the bomb was put together in a suburban villa.

● GO TO TOP ↑

How much do these operations cost? Bin Laden has enormous resources. Is he using up most

of his money?

“Terrorism is not an expensive sport,” said one senior Treasury Department official who tracks terrorists’ money. The total cost of the 1993 World Trade Center attack amounted to around \$18,000, including purchase of equipment, rental of the van used in the bombing, purchase of a car, rental of two apartments, a garage and the self-storage space as well as plane tickets. Not included in the cost: \$6,000 in unpaid phone bills.

Although at the time of the embassy bombings, the CIA and others pegged bin Laden’s wealth at \$300 million, subsequent intelligence gathering has resulted in a significant reduction of the estimate, although the number is still in the tens of millions.

● GO TO TOP ↑

Does he focus on one target at a time or simultaneously plan various attacks?

Said one official of his recent planning, “He is planning several hits, and at some point he’s going to break through.” U.S. officials note that the embassy bombings in Kenya and Tanzania were to be accompanied by other, near-simultaneous bombings in other world capitals. One in Tirana, Albania, was foiled days before it took place, so a series of coordinated attacks is well within his operational capabilities.

● GO TO TOP ↑

How important is operational security to

al-Qaida?

Very, say officials. They have seen repeated instances where if operatives encounter something unexpected, they will “go back to square one” out of fear that operational security has been breached. There is little autonomy, little spontaneity in operational matters and changes in plans must be approved at higher levels. The cell leader on the scene can call off an operation without consulting anyone higher, said a senior intelligence official.

Said one counter-terror official: “They have one idea ... alter it for them, then they go back to the drawing board. They are not agile. They have to reload, and that takes months ... about four to six months.”

“They are very willing to trade time for operational security.”

● GO TO TOP ↑

Has the United States had any success against his operations?

Without providing details, CIA Director George Tenet has publicly testified that the CIA has disrupted “several” terrorist attacks against Americans. U.S. officials confirm those disruptions have involved planned attacks by bin Laden.

More than 100 of his operatives have been arrested worldwide since the embassy bombings in August 1998 on every continent but Australia and Antarctica. Five men accused of conspiring in the embassy bombings are in U.S. custody, awaiting trial in New York. Another is awaiting extradition in London. Among operations believed to have been thwarted: a planned attack on U.S. facilities in London early this

year and an attack on FBI headquarters in Washington this past summer.

“We keep stopping him; he keeps coming back,” said one Pentagon official. “You cannot overestimate the danger this man poses to the United States,” said a senior White House official.

“He has regenerated some cells and started new ones,” said a Pentagon official involved in tracking bin Laden. “We will be dealing with him for a long time because his organizational capability continues to improve. Does it suck being UBL [the common shorthand in U.S. intelligence community for bin Laden]? Yes. He is on the road all the time. It is hard to conduct business. He can’t touch a phone. He is constantly on the run. But he is still out there.”



Are his operations limited to bombings or does he have aspirations in the nuclear, biological and chemical areas?

Officials from intelligence, military, emergency management and national security agencies say bin Laden is branching out: planning assassinations using “contact poisons,” obtaining “rudimentary” chemical and biological materials, trying to acquire radioactive material.

The newest information, which one official called “fascinating,” is that bin Laden may be returning to an old strategy: assassination. One Pentagon official involved in tracking bin Laden says the man officials call “the terrorist prince” has been obtaining “contact poisons ... KGB-like pellets” that would be used in assassinations and in some cases are difficult or

impossible to detect in an autopsy. The official noted that in the early 1990s bin Laden and his al-Qaida network were involved in assassination attempts on Egyptian President Hosni Mubarak, Pakistani Prime Minister Benazir Bhutto and Jordanian Crown Prince — now King — Abdullah as well as planning to kill Pope John Paul and President Clinton.

He added that public U.S. intelligence reports on bin Laden's training camps have noted the network has instructed terrorists in assassination and kidnapping.

The contact poisons are among "rudimentary chemical and biological stuff" bin Laden has obtained recently. However, one official said the network's efforts to obtain such materials is "scattershot and unfocused ... all over the board" without a pattern to indicate what he might be planning.

"He is looking for all sorts of stuff," adding that twice bin Laden operatives tried to obtain nuclear materials. Bin Laden's German operation was the victim of a sting operation in 1993 when it tried to buy highly enriched uranium on the Soviet black market. A year later, another similar attempt failed. The bin Laden operatives in charge of those attempts, Mamdouh Salim and Ramzi Yousef, are in U.S. custody. Moreover, Russian intelligence has told the United States that it believes bin Laden has been working with Chechen rebels to obtain radioactive material for a "radiological dispersal device" or "dirty bomb" that would spray the potentially deadly material over a small area. An official involved in planning emergency response to a terrorist attack says the United States has taken the intelligence seriously.

However, officials cautioned that there is "no sense of a technical sophistication" in bin Laden's camp and that "this stuff is much more difficult to use than people think.

“After all, Saddam Hussein spent \$8 billion on nuclear weapons and came away with (nothing). He doesn’t know how to do this. He is spending every night in a different mud hut, so we’re not too worried that he is reprocessing plutonium.”

On the other hand, the official added, “if he is stumbling onto something, there is no doubt he will use it.”

● GO TO TOP ↑

Why haven’t we tried to grab him?

“We are serious about going after him,” said one senior administration official. “He is serious about going after us. If we can nail his ass, we will. But it is going to be action and reaction for a long time.”

Doing a “snatch-and-grab” operation from “time to time looks appealing,” said a Pentagon official. Has the United States planned such a mission? Yes, said the official. Has the United States put Delta Force personnel on planes in preparation for such a mission? “Not recently.” The big problem remains the need for real-time information on his whereabouts.

● GO TO TOP ↑

How is his health? A few months ago, there were reports he was terminally ill. What became of those reports?

A senior counter-terrorism official said the latest CIA analysis is that he is “a hypochondriac ... but then he has chosen a stressful lifestyle and that can manifest

itself in strange ways ...”

Nevertheless, he is known to have an enlarged heart, chronically low blood pressure and is missing toes on one foot from a battle wound suffered in Afghanistan. He is regularly attended by a physician.

● GO TO TOP ↑

Is there any indication he works with governments in the Middle East?

Aside from Afghanistan, where bin Laden has long-standing ties — including some possible family ties — with the ruling Taliban, there are indications bin Laden has some contacts with both the governments of Iran and Pakistan.

The connections with Iran are described in recent Justice Department papers filed in the embassy bombing case. The United States alleges that on two different occasions in the early 1990s, a senior religious leader from Iran met with bin Laden’s representatives in Khartoum to discuss putting aside religious differences — bin Laden is a Wahabi Muslim, Iran is Shiite — and cooperating against Western interests. However, there is no information to suggest any joint operations were ever planned or carried out.

The link with Pakistan is more current. One issue that distresses U.S. officials is intelligence that bin Laden, Kashmiri Muslim rebels in India and Pakistan’s Inter-Service Intelligence [ISI], its quasi-autonomous military intelligence agency, are involved in “monkey business” together. The United States used the ISI in the 1980s to fund, train and arm the Afghan mujahedin, including bin Laden, in its fight against the Soviet Red Army.

Calling it a “stew,” a “crazy soup” and a “cozy relationship,” two officials noted that the key to the relationship is Pakistan’s use of rebel insurgents in Kashmir, the troubled region that has been the subject of three wars between Pakistan and India. Muslim fighters, financed by the ISI but trained by bin Laden, have been operating in the Indian part of Kashmir.

“The Pakistanis have interest in working with people who can help them in Kashmir. Bin Laden has an interest in helping Muslim fighters. It is a cozy relationship.”

In fact, said the officials, the United States now believes that most of those killed in last August’s attack on bin Laden camps in Afghanistan were Kashmiri insurgents training to kill Indians. And that linkage, they note, is critical to understanding both bin Laden’s network and the future of religious terrorism. Bin Laden, they note, has had connections over the years with other terrorist groups in Iran, Pakistan, Afghanistan, Egypt, Chechnya, Bosnia, Albania, Algeria, Uruguay and Ecuador.

● GO TO TOP ↑

Why did bin Laden declare a “fatwah,” or religious decree, against the United States?

U.S. intelligence officials believe bin Laden began to turn against the United States in the mid-1980s — a time when he still took aid and training from the CIA, which was then helping bin Laden and other Islamic groups fight the Soviet Army in Afghanistan. The CIA funneled its aid through the Pakistani secret service, the ISI, to various cells in Afghanistan, one of them known as the MAK. In 1984, bin Laden broke

with the MAK and formed a separate, more radical splinter group that espoused a harsh, fundamentalist version of Islam that was dedicated to the liberation of Islamic nations from any foreign influences, from Israel to the United States to the Soviet Union. Particularly infuriating to him is America's coziness with the Saudi Royal family since the Gulf War. But bin Laden's first public "fatwah" came only after the Gulf War. Specifically, he railed against the presence of American and European troops on the soil of the Arabian peninsula, site of Islam's holiest cities, Mecca and Medina. Since then, U.S. intelligence officials say, bin Laden has been behind an unprecedented campaign of attacks on U.S., European, Israeli, Russian and other interests around the planet. In 1998, he broadened his "fatwah" to specifically include civilian targets:

■The ruling to kill the Americans and their allies — civilians and military — is an individual duty for every Muslim who can do it in any country in which it is possible to do it, in order to liberate the al-Asqa Mosque [in Jerusalem] and the holy mosque [in Mecca] from their grip, and in order for their armies to move out of all lands of Islam, defeated and unable to threaten any Muslim. This is in accordance with the words of Almighty God, "and with the pagans all together as they fight you all together" and "fight them until there is no more tumult or oppression, and there prevail justice and faith in God."

■It adds, "We with God's help call on every Muslim who believes in God and wishes to be rewarded to comply with God's order to kill the Americans and plunder their money wherever and whenever they find it. We also call on Muslim ulema, leaders, youths and soldiers to launch the raid on Satan's U.S. troops and

the devil's supporters allying with them, and to displace those who are behind them so that they may learn a lesson.”

● GO TO TOP ↑

What are the vital facts about Osama bin Laden?

Born: July 30, 1957, the 17th of 20 sons of a now deceased Saudi construction magnate of Yemeni origin.

Background: Bin Laden gained prominence during the Afghan war against the Soviet Union. In 1989, when the war ended, he returned to Saudi Arabia to work in the family business, the Bin Laden Construction Group, but his radical Islamic contacts caused friction with Saudi authorities. As a result of his opposition to the ruling Al Saud family, Saudi Arabia revoked his citizenship in 1994 and his family disavowed him, though some of his brothers have reportedly maintained contact. In 1996, under strong U.S. and Egyptian pressure, Sudan expelled him and he returned to Afghanistan, where he has lived under the protection of the Taliban. On June 7, 1999, bin Laden was placed on the FBI's Ten Most Wanted List and a \$5 million reward was offered for his capture.

Education: Bin Laden received a degree in public administration in 1981 from King Abdul-Aziz University in Jeddah, Saudi Arabia. He has visited countries of the Arabian Peninsula, Syria, Pakistan, Afghanistan and Sudan.

Assets: Approximately \$300 million in personal finances with which he funds a network of as many of 3,000 Islamic militants.

Leadership structure: Bin Laden is the undisputed leader, called “emir” or “prince” by his followers, who must take a sworn oath to him. Violating the oath is punishable by death. Beneath him is the “shura al-majlis,” or “consultative council,” which includes his top lieutenants. His two aides are Egyptians: Ayman al-Zawahiri, a physician and leader of al-Jihad, the violent Egyptian group responsible for the tourist massacre in Luxor, Egypt, in 1995, and Muhammed Atef, his military commander, who also served in al-Jihad.

International reach: Al-Qaida cells have been identified in Afghanistan, Pakistan, Bangladesh, Saudi Arabia, Qatar, Yemen, Jordan, Egypt, Libya, Lebanon, Algeria, Tunisia, Mauritania, Sudan, Azerbaijan, Uzbekistan, Tajikistan, Chechnya, Somalia, Eritrea, Kenya, Tanzania, Uganda, Ethiopia, Malaysia, the Philippines, Uruguay, Ecuador, Bosnia, Kosovo, Albania, the United Kingdom, Canada and allegedly inside the United States.

Fatwa: Issued by bin Laden on Feb. 23, 1998, against all U.S. civilians and military.

“The ruling to kill the Americans and their allies — civilians and military — is an individual duty for every Muslim who can do it in any country in which it is possible to do it, in order to liberate the al-Asqua Mosque (in Jerusalem) and the holy mosque (in Mecca, Saudi Arabia,) from their grip, and in order for their armies to move out of all lands of Islam, defeated and unable to threaten any Muslim.”

*Sources: Congressional Research Service,
“Frontline”*

● GO TO TOP ↗

Al Qaeda



FRONTLINE
<http://pbs.org/frontline/>

HUNTING BIN LADEN

"AL QAEDA"

The US government issued an indictment in November 1998 alleging that Osama bin Laden heads an international terrorist network called "Al Qaeda," an Arabic word meaning "the base." The government's allegations from this and subsequent indictments concerning Al Qaeda include the following:

HOME

INTRODUCTION

WHO IS BIN LADEN?

TRAIL OF EVIDENCE

TWO TERRORISTS

INTERVIEWS

BACKGROUND: AL QAEDA

.....

* In approximately 1989, bin Laden and co-defendant Muhammad Atef founded "Al Qaeda," " an international terrorist group ... which was dedicated to opposing non-Islamic governments with force and violence."

* "One of the principal goals of Al Qaeda was to drive the United States armed forces out of Saudi Arabia (and elsewhere on the Saudi Arabian peninsula) and Somalia by violence."

* "Al Qaeda had a command and control structure which included a majlis al shura (or consultation council) which discussed and approved major undertakings, including terrorist operations." Both Atef and bin Laden sat on this council.

* Al Qaeda had ties to other "terrorist organizations that operated under its umbrella," including: the al Jihad group based in Egypt, the Islamic Group, formerly led by Sheik Omar Abdel Rahman, and other jihad groups in other countries. "Al Qaeda also forged alliances with the National Islamic Front in Sudan and with representatives of the government of Iran, and its associated terrorist group Hezbollah, for the purpose of working together against their perceived common enemies in the West, particularly the United States."

COUNT ONE: CONSPIRACY TO KILL UNITED STATES NATIONALS

.....

* The named defendants, plus other members of Al Qaeda, "conspired, confederated and agreed to kill nationals of the United States." In furtherance of this conspiracy,

* Bin Laden and others "provided training camps and guesthouses in various areas, including Afghanistan, Pakistan, Somalia and Kenya for the use of Al Qaeda and its affiliated groups,"

* Bin Laden and others provided currency and weapons to members of Al Qaeda and associated terrorist groups in various countries throughout the world.

* Bin Laden established a headquarters for Al Qaeda in Khartoum, Sudan, in 1991, and established a series of businesses, including two investment companies, an agricultural company, a construction business and a transportation company, all of which were, "operated to provide income and support to Al Qaeda and to provide cover for the procurement of explosives, weapons and chemicals and for the travel of Al Qaeda operatives."

* Bin Laden issued a number of fatwahs (rulings on Islamic law) stating that US forces stationed in Saudi Arabia, Yemen, and the Horn of Africa, including Somalia, should be attacked.

* Al Qaeda members "provided military training and assistance to Somali tribes opposed to the United Nations' intervention in Somalia. ... On October 3 and 4, 1993, in Mogadishu, Somalia, persons who had been trained by Al Qaeda (and trainers who had been trained by Al Qaeda) participated in an attack on United States military personnel serving in Somalia as part of Operation Restore Hope, which attack resulted in the killing of 18 United States Army personnel.

* Bin Laden and others attempted to procure components of nuclear and chemical weapons.

COUNT TWO: BOMBING OF THE US EMBASSY IN NAIROBI, KENYA

Defendants bin Laden, Atef, Fazul Abdullah Mohammed, and Odeh, together with other members of Al Qaeda "detonated an explosive device that damaged and destroyed the United States Embassy in Nairobi, Kenya, and ... directly .. caused the deaths of at least 213 persons, including Kenyan and American citizens."

COUNT THREE: BOMBING OF THE US EMBASSY IN DAR ES SALAAM

Defendants bin Laden, Atef, Fazul Abdullah Mohammed, Odeh, al-'Owhali, Mustafa Mohamed Fadhil, Khalfan Khamis Mohamed, Ahmed Khalfan Ghailani, Fahid Mohammed Ally Msalam and Sheikh Ahmed Salim Swedan, together with other members of Al Qaeda "detonated an explosive device that damaged and destroyed the United States Embassy in Nairobi, Kenya, and ... directly .. caused the deaths of at least 11 persons, including Tanzanian citizens."

In his interview with FRONTLINE, Saudi dissident [Saad Al-Fagih](#) challenges the U.S. government's characterization of Al Qaeda.

[home](#) + [introduction](#) + [who is bin laden?](#) + [trail of evidence](#) + [two terrorists](#) + [join the discussion](#)
[interviews](#) + [reporting from the times](#) + [links](#) + [press reaction](#) + [tapes & transcripts](#)
[frontline](#) + [pbs online](#) + [wgbh](#)

new content [copyright](#) © 2001 pbs online and wgbh/frontline